
I S 《インフィニット・ストラトス》 FRONTIER VALKYRIES

Carpediem.613

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

IS FRONTIER VALKYRIES

【Nコード】

N1410W

【作者名】

Carpediem・613

【あらすじ】

バジラクイーンと共に光りの中へ消えていった早乙女アルト。たどり着いた先の世界は女尊男卑の世界だった。

マクロスF劇場版とインフィニット・ストラトスのクロスです。

本文を加筆修正

IS説明及び武装名称変更 しました。

筆者はド素人ですが長い目で見ていただければ幸いです。ご意見が
あればお願いします。
宜しくお願いします。

第0話 サヨナラノツバサ (前書き)

しつこいですが筆者はド素人です。
宜しく願います。

第0話 サヨナラノツバサ

あの時、オレは信じていたんだ。

とある誤解で始まったオレ達とバジユラ達の戦争。2人の歌姫達の歌をバジユラ達に届ければ終わると……。バジユラを理解し、みんなと一緒に生きられると。この時のオレはそうなるのだと信じて飛んだ。そう、自分の命なんか考えずに……。

早乙女アルトは17歳の少年でパイロットだ。かつては歌舞伎の天才女形として、女だったこともある。それは遠い過去で今の彼は、バルキリー可変戦闘機を駆るパイロットだ。

彼は今、とある惑星で戦火の中心にいた。バジユラ本星。そこで戦っていた。

「思いだせ！ブレラ！貴様はそんな男じゃないだろう！取り戻せ……
…お前の、本当の心を！」

「心……オレに、心、だと!？」

彼は今、ブレラ・スターンというサイボーグの少年と戦っている。ブレラは操られており、アルトは必死に彼の心を取り返すため言葉を投げかける。無数のミサイルが無秩序に飛びかい、歌姫達の声が響きあう戦場の空をアルトは可変戦闘機VF-29『デユランダル』で光の舞を披露していた。

「この歌……それに、あの舞。そうだ……これは、ランカの……」

ブレラはサイボーグであり、人間だ。例え、脳まで機械に支配されていても人の心までは消せない。さらにアルトが見せた舞、歌姫達の歌。それらがブレラの心を救った。ブレラは自身の脳に埋め込ま

れた洗脳装置であるインプラントを引きずりだし、

「ランカー！」

と叫んでいた。彼に正気が戻り、敵戦艦……つまり彼を操っていた艦に特攻をかけた。

「どんな時でもランカを守る！それが、オレの約束だ！貴様らに操られる理由などは……ない！」

そうして彼は愛機である可変戦闘機VF-27

『ルシファール』を光の矢に代え自分共々操り主達を消し飛ばした。

バジユラクイーン。超時空生命体とよばれるバジユラ達の親であり、脳を持たないバジユラ達の司令塔。クイーンも操られていた。この戦争を引き起こしたギャラクシー船団の電腦貴族に。ブレラが電腦貴族を倒してくれたおかげでクイーンは正常にもどりつつあった。

アルトはVF-29のキャノピーを吹き飛ばし、飛行用スーツのEX-ギアを纏い空を飛んだ。彼は役目を終え、その剣を捨てクイーンの元まで飛んだ。そして、ふわり、とクイーンの円形の舞台のような箇所に着地し、通信をいれた。

「ランカ、シェリル。聞こえるか？」

「え、ええ！」

「聞こえるよ、アルトくん！」

シェリルと呼ばれた大人のドレスを纏った少女が返事をし、それに続くように小さなかわいらしいリボンのついたドレスを纏ったランカという少女が通信に答えた。この2人が歌うことで脳を持たないバジユラ達と『会話』できる。

彼女たちはこの戦いを止めるために歌でバジユラと『会話』していたのだ。

それを聞いたアルトは2人の少女に天女のように微笑み伝えた。

「ランカ。すまないーオレは、お前の気持ちに応えてやることはできない。そしてシェリルー」

「――。――」

と伝えようとしたその刹那、味方艦隊からの砲撃が開始された。アルトは砲撃があると知りつつも、バジユラと『会話』することを選んだ。そして早乙女アルトはその光に飲み込まれこの世界から消失した。

第1話 宇宙(そら)の果てで (前書き)

多いに拙い妄想が入っています。

第1話 宇宙（そら）の果てで

早乙女アルトが目を覚ますと酷く暗い世界にいた。宇宙の果てであろつか。

そこにはバジユラの女王たるクイーンと数匹のバジユラたちがいた。バジユラとは先程までを戦争をしていた。そのバジユラ達が宇宙服のないオレを助けてくれたのだらう。オレは円形のフィールドのなかにいた。

戦争といってもそれは言葉で話せないという些細な壁と一部の欲望にまみれた人間達が起こした戦争だった。フロンティア船団は外宇宙を旅して新しい入植できる惑星を探すという目的の移民船団だからそこで戦争に巻き込まれたのだ。

詳しいことは割愛するがその戦争は3人の少年少女によって終結した。1人はランカ・リー。

生れつきバジユラと歌で通じあえる能力を持つ超時空シンデレラ。1人はシェリル・ノーム。V型感染症という病気によりバジユラと通じあえる歌声を得た銀河の妖精。そして最後の1人がバルキリーという可変戦闘機のパイロットであり元歌舞伎役者の早乙女アルトである。2人の歌をバジユラに届けた男である。

そんな早乙女アルトがバジユラクイーンと呼ばれる固体に問いかける。

「ここは一体どこなんだ？」

クイーンは質問を返すためアルトの耳についているフォールドクォーツ製のイヤリングに念じる。

『ワカラナイ。オソラクギンガノハテダ。』

そう聞こえた。

アルトはさらに質問をした。

「お前達はこれからどうするんだ？」

クイーンは伝える。

『ホシヲサガス。ワレラノアタラシイホシヲ。』

「そうか。なら俺も一緒に行っていいいかな？もうフォールドでは戻れないだろ？」

フォールドとは超空間航法的一种だがある目標が解らないと跳べないのだ。バジユラ達はフォールド断層というフォールドの壁を越えることができる。が、目標がわからなければどうしようもない。バジユラ達の本星から銀河の果てまで飛べたのも理由がわからないのだから。と考えているとクイーンが

『オマエハツレテイカナイ。』

などと言ってきた。

流石に「は？」

と返すしかなかった。するとクイーンは続けて、

『オマエトオナジンゲンノイルアオイホシガアッタ。ソコエイツテモラウ。ワレラガアタラシイホシヲミツケタラムカエニクル。ソウシタラホンセイマデツレテイツテヤル。』

「本当か！？どれくらいで帰れるんだ？」と意気揚々で聞くと残酷な数字が響いた。

『オマエタチノシャクドデイト50ネンホドカ』

「オイ…」

と肩を落としていると小型のバジユラが何かを渡してきた。何かと思えば大粒の宝石だったのだが…

「これはフォールドクォーツか？貰っていいのか？どうしてオレに？」

と聞くと

『オマエタチタスケテクレタカラ』

と言われた。

これを使って上手くやれということらしい。有り難く受けとった。

「分かった。なんとかその星で帰れる手段を探すことにする。色々がありがとうな」

クイーンは何も言わずフォールドの用意を始めた。その光に包まれたアルトはまたも気を失った。

第1話 宇宙（そら）の果てで （後書き）

バジュラとの交信方法等いろいろご都合主義ですがお許しください。

第2話 新たなるフロンティア（前書き）

今回も強引です。次回はもっとですが（笑）

第2話 新たなるフロンティア

ここはIS学園。

アラスカ条約に基づいて日本に設置された、IS操縦者育成用の特殊国立高等学校。

操縦者に限らず専門のメカニックなど、ISに関連する人材はほぼこの学園で育成される。

その学園に勤務している織斑千冬教諭は現在学園内の見回りをしていた。

来月には新入生が入ってきたため忙しく家に帰る暇もなく働いているのだ。

「やれやれ、次に帰るときはアイツに制服と参考書を持っていかなくてはな」

などとぼやいていると、突然アリーナの方から見慣れない光がほとばしっている。

現在アリーナは使用されていない時間だったのでおかしいと思い携帯電話を取り出す。

「もしもし。山田くんか？先程アリーナにて不思議な発光を確認したがあれは生徒のものか？」

と同僚の教師に確認を取る。

「い、いいえ。現在アリーナでの生徒の確認は取れていません。」

と副担任の山田真耶は慌てながら返答した。
すると

「分かった。では私が確認を取る。山田君は一応教師部隊を召集しておいてくれ。」

「わ、わかりました。」

というところで電話を切ってアリーナへと向かう。

（山田君ももう少し落ち着いて対応してくれればいいのだが…）

と思ったが今はアリーナの確認が先なので心にしまっておく。

織斑千冬がアリーナへ到着すると光は消えていた。

そこで見たものは見慣れない翼の付いたスーツを着た女性の様な長く青い髪をした男であった。

歳はアイツと同じぐらいであろうか？

と思い起こそうとするが反応がない。仕方なくISを纏った教師部隊に救護室まで運ばせた。

「やれやれ。帰るのは明日になりそうだな。」

と千冬は呟きながらアリーナを後にした。

美少年救出後IS部隊が四苦八苦しながら翼の付いたスーツ（EXーギアというのだがまだ知る由もないが）を外し宇宙服らしきものをぬがせ外傷等を確認する。どうやら眠っているだけのようだ。それから何分かたつと少年は

「うつ…」

といいながら目を覚ました。

すると千冬は

「目は覚めたか？」

と確認する。

少年が頷くと千冬は

「ならば名前と所属を教えろ。そうしてなぜIS学園に侵入しようとした？」

「オレの名前は早乙女アルト。フロンティア船団S・M・Sスカル小隊小隊所属パイロットです。」

と一応本当の事を伝える。もしかしたら他の移民船団が入植した星かもしれないと微かに期待したのだが…

「フロンティア船団？S・M・S？なんだそれは？」

という答えが返ってきた。

「やはりそうか。」

と軽く溜息をつくとアルトは話を続ける。

「ここがどういう場所なのかはわかりませんがオレがここにいるのには理由があります。」

と力強く言う。するとなにやら外側から駆け足で誰かが来て勢いよく救護室の扉を開けた。

「織斑先生！大変です！」

と眼鏡をかけたやたら童顔で胸のある人がやってきた。でかいなと思いつながらアルトが聞いていると織斑という女性は低い声で言い返した。

「何事だ？山田君？」

と言いつ返すと

「と、とにかく一緒に来ていただけませんか？あ、動けるのならその彼女も一緒に。」

この瞬間久々に彼のコンプレックスが刺激された。友人のミシエルにはからかわれ（アルト姫）なんて言われるがこれだけはどうしても我慢できず

「オレは男だ！！！！！」

と大きな声で叫んだら織斑という先生にげんこつを喰らった。

「うるさい。まだ事情がはつきりしていないのだから大人しくしている。」

とのことだ。

そして頭を摩りながらアルト、織斑は山田の後についていく。

第3話 バルキリーとISと早乙女アルト（前書き）

説明回ですね。アルトの口調が再現できません。

第3話 バルキリーとISと早乙女アルト

そこは倉庫の様だったが並んでいるものにアルトは全く見覚えはなかった。なんだかEXーギアを大きくし各所に武装やスラスター、シールドの付いたものが並んでいた。

その中でも一際目についたのが山田先生がつけたスポットライトが照らされているものだった。

どこかでみたような武装がついていた。ガンポットだ。バルキリーに標準装備されている機銃がなぜこんなところにあるのだろうか？

そして驚愕していたのはアルトだけではなかった。

千冬も驚きの顔を隠せなかった。

「山田君。これはなんだ？ISなのか？」と千冬は山田に説明を求め。

すると山田は

「は、はい。まずこれは教師部隊が使用していたラファール・リヴアイブなのですが彼じ…いえ、彼が持っていた宝石の様なものをこのISが取り込んだ様なんです。」

それを聞いてアルトも千冬もさらに驚愕の表情になった。

「な、なんだって？オレの持っていたフォールドクォーツがそのISというやつに取り込まれたってことか？」

それを聞くと千冬は

「早乙女アルト。説明してもらおうか。」

説明は終わった。

俺のいたフロンティア船団の事。フォールドクォーツが貴重なものだという事。

そのISとやらが俺達が乗っていたバルキリーという戦闘機にそっくりだということ。そこで戦闘機のパイロットをしていたということ。

バジユラについては説明を省いた。異星生命体といっても彼女達は理解できないだろうと考えたからだ。

説明を終えるとアルトは千冬に対して質問をした。

「それで？ISっていうのはなんなんだ？
すると千冬は

「話し方が気に入らんがまあいいだろう。」

千冬が説明を始めた。

ISとはなんなのか。ISは篠ノ乃東という天才科学者が発明したこと。ISのコアが467個しかないということ。ここはIS学園という養成所だということ。あらゆる国家に帰属しないためデータ収集をかねて世界中から入学してくる。アルトは美星学園のようなものかと思い、話を理解した。

「それでフォールドクォーツとそのISが合体してしまったというのは一体どういことなんだ？」

「それは我々にもわからんよ。寧ろこちらの方がお前に聞きたい。」

「理由はわからないし、オレは科学者ではなくパイロットだからな。専門家に調べてもらうのが一番良いと思う。」

アルトはやっかいなことになったと思いつつもどうしようもないのでそう伝えた。こんな時に後輩でパイロットありながら科学者のルカ・アンジェローニがいればと思わずざるを得なかった。

「早乙女。その前にこれに触れてみる。」
「？」

「触れば分かる。」というので取り合えず触れてみる。するとISは光を放ちだした。

「な、何だ。この動かし方が頭に入ってくる。」

「やはりそうか。ヤレヤレ。」

「じゃ、じゃあ早乙女君は二人目の男性操者に…」

千冬と山田がそう呟くと

「早乙女。お前には私の一存でこのIS学園の生徒になってもらう。異論は認めんがな。」

「何だって！？どういう意味だ？」

「早乙女。お前は女性にしか起動できないISを起動してしまった。その意味がわかるか？貴重な男性操者。そんな人間を放置しておくほど世界は甘くはない。この世界でモルモットとして生きたいか？」

「ぐ…。それは…。」

「それにお前はもといた所に帰りたいのだろう？ISは元々宇宙用パワードスーツだ。なんらかの役には立つだろう。3年間は各国の干渉もなくなる。これほどおいしい条件はない。」

「…わかった。」

アルトは渋々了解した。もちろん彼の目的はもといた場所へ帰還することだ。その点には異論はない。

千冬はさらに

「後1週間程で丁度入学式だ。まずはお前はそのISと共に倉持技研にいつてもらう。そこでまずこのISを調べて貰え。ある程度の情報はこちらで用意しておく。向こうでいろいろ教えて貰え。入学式前日にこちらに戻ってISの起動試験をしてもらう。分かったな？」

「了解。」

「それと次からは織斑先生と呼ぶように。こちらの山田君も学園の教師だ。敬意をもって接するように。」

「わ、分かりました。先生。」

「うむ。」

「よろしく願いますね。早乙女君。」

前途多難な学園生活が今始まるうとしていた。

第3話 バルキリーとISと早乙女アルト (後書き)

次回「そのISの名前は？」になります。

第4話 戦乙女は飛ぶ (前書き)

短いです。ご了承ください。

第4話 戦乙女は飛ぶ

6日後：アルトはIS学園のアリーナにいた。倉持技研での調査と改修を終えISの起動実験の日だ。改修といっても武装強化のためある装備の試作品を取り付けただけでフォーマットは既に終了している。

「早乙女。まずは確認だ。そのISは基本的には通常のISと変わらないのだな？」

「はい。調査の結果、AIが優れているくらいで他は変わらないとのことでした。ただし今後どのような反応をISが見せるか予測不能なので注意して下さいと。後パッケージの作成を引き受けて頂きました。5月には完成するそうです。」

「ふむ。了解した。では先ずISを展開しろ。」

「了解。」そして彼が名付けたISを待機状態のイヤリングから呼び出す。

「ヴァルキュリア・デランダル展開！」

白と赤をベースにした色合いのIS。フォールドクォーツ4つの聖遺物が鮮やかな光を放ち、多数の銃火器を積んだISを身に纏いアルトは呟く。

「おもわざれば花なり。おもうは花ならざりき。ただオレは…感じるままに——飛ぶ！」

聖剣となった戦乙女が今本物の大空に飛び立った。

第4話 戦乙女は飛ぶ（後書き）

次はISの説明に入ります。ここまで読んでくださりありがとうございます。

「おもはざれば」の一説は劇場版では確か発言はありませんでした。この台詞はテレビ版からの引用です。

このアルトは既に舞うことに対してわだかまりをもっていない。ただし女に間違われるとキレます。ちなみに時系列的には入学前です。（書いてあったかな？）

IS説明（前書き）

長々と書いてしまいました。サラッと読んで頂けると幸いです。

IS説明

早乙女アルト専用機

IS名：ヴァルキュリア・デュランダル

製造：倉持技研

待機形態：シエリルのイヤリング

世代：第3世代に相当

コンセプト：特殊射撃による広域殲滅型。及び超高速機動戦闘による一撃離脱型

携帯武装

ラミントンES-25A 25mm高速機関砲

頭部の両側に計2門を装備している。

YF-29デュランダルと同様の武装。

HPB-01A量子ビームガンポッド

携行式の大型ビーム砲。

YF-29デュランダルと同様の武装。

TW2-MDE/M25 隠頭式連装ビーム砲

旋回式のビーム砲。背部に収納されている。奇襲や後方の敵などに使用。YF-29デュランダルと同様の武装。

ビフォーズMBL-02 マイクロミサイルランチャー

各部に計16基設置されたランチャーに最大16×16発のマイクロミサイルを格納する。追加装備され火器慣性システムのマルチロケットを使用する事で多数の的に狙いを付けることが可能。使用時には頭部全面に巨大なフォロスクリーンが展開。

YF-29デュランダルと同様の武装+ガンダム00のガンダムサバーニヤの乱れ撃ち。

SSL-9B ドラグノフ・アンチ・マテリアル・スナイパーライフル×1

長距離狙撃用ライフル。使用時には照準用フォロスクリーンが展開する。元ネタはガンダム00のケルディムガンダム。狙撃戦闘でのみ使用される。

ガーバー・オーテックAK/VF-M9 アサルトナイフ×1

近接戦用のアサルトナイフ。ピンポイントバリアを纏うことでバリア貫通攻撃が可能。防弾シールド内に収納。

ガーバー・オーテックAK/VF-M9 アサルトロングブレード×1 ロングソードバージョン。イメージはガンダム00のガンダムエクシアのGNロングブレード。

防衛兵装

防弾シールド×1（左腕に装備）

ピンポイントバリア

PPBを展開することで広範囲に渡る防衛も可能。

ピンポイントバリアシステム一式

時空連続体のひずみを利用した小径のバリアシステム。実体弾やビーム兵器を無効化する。一夏の『零落白夜』ほど無効化は出来ず容量を超えた攻撃には破られる。攻撃展開も可能。この場合ISのバリアを無効化する攻撃が可能だが一点に集中してエネルギーを使用するために燃費が悪い。

アクティブステルスシステム一式

ステルス技術で一種のECM装置。従来のレーダー機能では捉えることが出来ないがISのハイパーセンサーが高性能なため一定時間

のレーダーに写らない様にするのが限界。

エネルギー転換装甲

ISの動力原から発生したエネルギーを「装甲表面に電流のように流し込む事で素材の分子構造を強化し、装甲強度が向上する」というもの。PPBとは違い少ないエネルギーで使用が可能。

チャフ・フレアー・スモークディスプレイチャージシステム一式

慣性制御システム

ISC 正式名称「Inertia Store Converter（慣性蓄積コンバーター）」

機動慣性を異次元空間に一時待機させ、少しずつ通常空間に還元することで瞬間的な慣性負荷から使用者を保護する。簡単にいうならGを少なくしてくれる。これにより一定時間の連続イグニッションブースト《方向転換を含む》を可能にした。

単一能力 不明

後付武装 不明

追加武装 不明

早乙女アルトのIS専用機。第3世代型のISで倉持技研が作成ということになっているが実際は練習機のラファール・リヴァイブがフォルドクォーツと融合して出来た機体である。アルトが愛機であるYF129デュランダルと同じ兵装をもつ。

イメージはまんまYF129デュランダルを着た感じで考えています。

ISCを使用したマニュアルによる一撃離脱の戦法が得意。名前はバルキリーの読み方を変えただけ。シェリルやランカ、（アルトもだが）を戦乙女としてイメージ。

IS 説明（後書き）

武装の名称はこれからを書いていくのが楽になるため全て名称を付けさせてもらいました。デュランダルも含め全て神話等に出てくる聖剣・魔剣の名前です。安直ですが決めさせていただきました。

第5話 起動実験（前書き）

短い上に戦闘シーンどうするか。

第5話 起動実験

早乙女アルトは大空を舞っていた。

（これがこの星の空。2つ目の本物の空だ）

アルトの表情は美しく微笑んでいた。それはまるでかつてアルトが『桜姫東文章』で『桜姫』を舞台で演じた時の様に美しくもコロコロと表情は変わっていたのにアルトは気づいてない。

「ふむ。早いな。」

織斑千冬はそのISのスピードに感心していた。

（そして美しくも感じるな。あの表情がそう思わせているのだろう。歌舞伎の家の生まれは伊達ではないということか。基になったラファール・リヴァイプではあそこまでのスピードは出ない。あのフォールドクォーツという石が何らかの影響を与えている様だ。）

と考えていると

「スピードでは現行ISの中でもトップクラスのスピードですね。これがヴァルキュリア・デュランダルの方なんですね。」

山田真耶は驚嘆の声を漏らす。

（女の子にしか見えない。それに動きがとっても綺麗……。）

千冬と真耶は似たような感想を抱くも観察点がかなりズレていた。

すると千冬は

「ああ。もつとも早乙女の適応力の早さや持ち前の技術も関係しているだろうがな。ああも空を上手く飛ぶのだからな」

さすがは戦闘機乗りといったところかと千冬はさらに感心していた。

（私ですらあそこまで綺麗に魅せて飛ぶことは出来ないな。
）

千冬は過去ISの日本代表であり公式戦無敗であり、ISの^{モンド・グロ}世界大会で優勝したことがある元IS操者である。その千冬にも出来ないであろう事を目の前の少年はやってみせたのだ。
そして千冬は通信をアルトにおくる。

「早乙女。聞こえるか？」

『はい。聞こえます。』

「それでは次は武装試験に移行する。バルーンを発射する。それらを全て撃ち落とせ。」

『了解。』

正面に出現したバルーンをアルトは頭部の両側に付いている高速機関砲2門で打ち抜く。

次に背後にバルーンが2つ現れると背部に格納されている隠頭式連装ビーム砲を旋回させてバルーンに命中させる。

左側に現れたバルーンは手持ちのビームガンポットで破壊した。

これで終わりかと思っていると前方に16ものバルーンが現れた。
山田先生の

『これはいきなり多過ぎるのでは』

という声が聞こえたがアルトは各部に計16基設置されたマイクロミサイルランチャーを新装備したマルチロックオンシステムで（頭部前方にフォロスクリーンを出し大多数のものへ狙いをつけ一斉発射するシステム）ミサイルを発射しバルーン全てを打ち落とした。

すると山田先生が

「あのマルチロックオンシステムは倉持技研でも未完成のものだったはずじゃ……」「恐らく未完成のままでそれをアイツは自分の腕で補っているのか、ISのAIが完成させたのか、どちらにしろスペック上では100発以上同時に発射できるようだからな。あの程度なら未完成でも問題はないはずだ」

「恐ろしいですね……。」

「よし！早乙女。ピットまでもどりISを解除して待機しろ。」

『織斑先生。もう少し飛んでも……』

「私は待機しろといったはずだが？」

『了解しました……』

渋々いうとおりにするアルトであった。

第6話 入学……試験？（前書き）

オリジナル展開です。もうすぐ本編にはいれるかと…

第6話 入学………試験？

アルトは指示通りIS専用ピットに戻っていた。すると先んじて山田先生が立っていた。

「起動試験お疲れ様です。もうすぐ織斑先生もこちらに来ます。ISを解除して待機しててくださいね。」

「わかりました。」

言われた通りにアルトはISを待機状態に戻し、アルトの片耳に付いているものと同じイヤリングとなった。

「早乙女君。もう一つ同じイヤリングを付けていますがそれは？待機形態は1つのはずですが？」

「これはある女から借りている幸運のお守りみたいなものです。オレはこのイヤリングを返すためにも戻らなきゃいけない。言ってみればこれを返すまで死ねないんですよ。」

アルトは微笑んだ。しかし先程までとは違う、どこか影を含んだ微笑みだった。しかしこの天然教師はそんな事には気づかず

「か、彼女いるんですか？」

とどきまぎしながら質問してきた。

「か、彼女？違いますよ！そんなんじゃない…ま、まあ大切な人には変わりませんが…」

すると山田先生は

「これならチャンス…ダメ。私は教師で早乙女君は生徒なのに

…」

なんかボソボソ言っていて聞こえない。なんとなくアルトは早めに話を切り替えようと思い山田先生に質問した。

「そ、それで起動試験は？問題ありませんでしたか？」

「あ、はい。問題はありませんでした。後ほど織斑先生からも説明があると思います。それにしても早乙女君は飛ぶ事が好きなんですか？すごく楽しそうだったので。」

質問を質問で返された。

「はい。オレの住んでいたのは都市型宇宙船で空気とか水とか作っているので地球と状態とほぼ変わらないのですが、所詮は宇宙船なので空は狭いんです。だから地平線が続くどこまでも広がる空をオレは飛びたかったんです。だからオレは歌舞伎役者の家を継がずに家を飛びだしてパイロットになったんです。」

「はあ、なるほど。」

山田先生は聞きながらそうだったのかと思っていた。

（空を楽しそうに飛んでいたのにはそういう理由があったんですね。）

すると向こうから織斑先生がなにやらレオタードの様なものを着てやってきた。そのことに真っ先に反応を示したのはアルトではなく山田先生だった。

「お、織斑先生その恰好は？まさか…？」

「うむ。早乙女。お前のISの性能は見せてもらった。それでだ。今から30分後に模擬戦を行う。相手は…私だ。」

「お、織斑先生相手とですか？それなら私が…」

「いや、山田先生とてあのIS相手では分が悪いだらう。それに私とて元世界最強だらうと量産型のISでは厳しい。だから私がやるのだ。…早乙女！IS学園は入学試験時に必ず教師と模擬戦を行うのが決まりだ。遠慮はいらん。全力でこい。分かったな？」

正直アルトは急な展開についていけなかった。

（確か織斑先生は元世界最強って言っていたな。その最強と模擬戦闘？）

アルトは何も言えなかった。すると千冬は

「返事はどうした？それとも怖じけづいたか？」

基本的にこの早乙女アルト義理堅く面倒見の良い熱血漢的などころがある。そのため友人達とは喧嘩腰になるため、

「オレならやれる…やります！」

「よし。では山田先生には早乙女の管制をしてもらう。では30分後にな。」

「了解。」

30分後両者はISアリーナにて対峙する。

織村先生が使用しているISは「打鉄」。

第2世代と呼ばれる『後付武装によって、戦闘における用途の多様化に主眼が置かれた世代。現在最も多く実戦配備されているIS。』らしい。それをIS学園の教師用にカスタマイズされ、反応速度を上げた仕様である。武装は近接格闘用ブレードのみだが織村先生はかつて世界大会モンドグロッソにおいて刀一本で優勝したという。

第1世代機「暮桜」。

『兵器としてのISの完成を目指した機体。』

でその後のIS開発の基盤となった機体で最初のIS「白騎士」に次いで開発され、千冬が公の場で使用した第1世代型IS。刀剣型近接武器「雪片」のみを備え、単一仕様能力「零落白夜」

によって第1回モンド・グロッソを勝ち抜いたと。先程山田先生から聞かされた話だ。今回も刀一本であることから得意レンジはやはり近接格闘なのだろう。ロングレンジで戦えば多少なりとも勝機があるかもしれないが敢えてアルトは近接格闘を挑むことにした。理由は特にない。アルトはヴァルクリア・デュランダル格闘武装を展開する。アサルトロングブレイド『十束剣』を両手で持った。すると織斑先生から通信が入る。

『早乙女。準備はいいか？』

「何時でもどうぞ。」

『ふむ。ではいくぞ。』

世界最強と聖なる剣の鏖せり合いで模擬戦は幕を開けた。

第6話 入学……………試験？（後書き）

千冬ファンの皆様ごめんなさい。一度織斑千冬の戦闘シーンをだしてみたかったです。次の話は戦闘シーンです。

第7話 獅子座へレオVS千冬戦 (前書き)

書き方を少し変更しました。読み安くなっているといいのですが。

第7話 獅子座ヘレオ VS 千冬戦

アルトはブースターを全開にし千冬の懐一氣に飛び込み、アサルトブレイドを千冬のIS胴体部分目掛けて切り上げた。アルトの剣の腕では千冬相手に通じない。それは最初から分かっていたので戦闘開始直後の奇襲を試みたのだ。

しかし千冬はこれを避けもせずに格闘用ブレードで受け止めた。そして千冬が通信を入れてきた。

『そんな浅はかな奇襲が通じると思ったのか馬鹿者が。』

「まだまだ…これからだ。」

アルトは頭部機銃を至近距離から打ち込んだが一瞬の内に千冬は屈み込んでこれを避けた。

『浅はかだと言っただろう？』

千冬の下から切り上げた斬撃がアルトのシールドエネルギーを削った。防御兵装のピンポイントバリアを展開する間もなく攻撃を受けたのだ。奇襲に失敗したアルトは間合いを取るべく空中に退避した。

「さすがは世界最強。簡単にはいかないか」

『元世界最強だ。間違えるな。馬鹿者。』

「そうですね。ならこれならどうだ。」

アルトは空中からミサイルを16発千冬に目掛けて発射する。ミサ

イルは縦横無尽の動きをしながら排気煙を蜘蛛の巣のようにさせて飛んでいった。

（全て切り落とすことはできないはずだ。その隙を点く。）

発射と同時に地上に降り、千冬との間合いを詰めるべく移動した。

しかし千冬は無秩序の軌道を描くミサイルを半分切り落とし、空いた穴からISをロールさせながら物凄いスピードでアルト間合いに詰め寄った。

「なんだとっ。」

『この程度ではないだろう？早乙女。そのISとお前の力は。』

間合いを詰めた千冬は格闘用ブレードを大きく上から下へと振り下ろした。アルトは防御することが出来ず吹っ飛ばされ壁に激突した。

「がはっ…何だ。あのスピードは。」

態勢を立て直しながらアルトが呟くと通信が入る。管制室にいる山田真耶だ。

『早乙女君。大丈夫ですか？』

「あんまり大丈夫じゃないですね。大分シールドエネルギーを削られました。」アルトは空中に移動し、作戦を考えるべく、ミサイル、ビーム機銃を乱射する。千冬に近づかせないために空をジグザグに移動しながら山田先生に尋ねる。

「それより今の織斑先生の動きは何なんですか？」

『あれはイグニッション・ブースト（瞬時加速）です。ISの後部スラスタ翼からエネルギーを放出、その内部に一度取り込み、圧縮して放出することでその際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的な加速を産み出せるというものです。瞬時加速の速度は使用するエネルギーに比例します。』

この間千冬は、ミサイルをまたも叩き落とし、ビーム機銃をくるりとロールしたりバレルロールをしたりと鮮やかにかわしアルトに近づいて来る。（なるほど。自分のシールドエネルギーを使用して加速しているわけか。）

『ただし、使用中は加速に伴う空気抵抗や圧力の関係で軌道を変えることができず、直線的な動きになります。って早乙女君。聞いていますか？』

「はい。アドバイスありがとうございます。山田先生。」

アルトがそういつて微笑むと山田先生は顔を真っ赤にして俯いてしまった。

（風邪でも引いてるんだろうか？）

そんなことを考えていると今度は織斑先生のほうから通信が入る。

『早乙女。作戦は決まったか？』

「ええ。これからお見せしますよ。」

『面白い。期待しているぞ。』

アルトは体制を立て直し再度千冬と向き合う。

「では、行きます。」

『来い。早乙女アルト。』

アルトは頭部前面にフォロスクリーンを展開、マルチロックオンシステムで千冬に照準を合わせ、思考入力でアルトの指定した位置に照準を合わせ、ミサイル攻撃を仕掛ける。今度は32発同時に発射する。

『馬鹿の一つ覚えか。むっ？』

（ミサイルの軌道がおかしい。…そういうことか。面白い。）

そう、アルトは半分は先程と同じ軌道のミサイルを、もう半分は千冬とは別の方向に打ち、遅れて最初に発射した軌道に戻るようミサイルを調整した。

しかし千冬はこれを読んだのか、自分に向かって来るミサイルを切り落とし、イグニッション・ブーストを使わず、人並み外れた動きで残りのミサイルをかわしたり、ブレードで切り落としアルトに向かって再度イグニッション・ブーストを仕掛ける。

それを見たアルトは驚愕しながらもニヤツと微笑み、声を上げた。

「行くぜえ！」

アルトもまたIS内にためていたエネルギーでイグニッション・ブーストを使用し真っ正面から千冬に向かっていった。アルトのアサルトブレードと千冬の格闘用ブレードが激しくぶつかり合った。

『まさか、イグニッション・ブーストを使用するとは。驚いたぞ。しかしお前の望み通り真っ正面から来てやったぞ。次は何を見せてくれる？』

「切り札ならある！今お見せしますよ。」

そういったアルトは残りのエネルギーをブースターと拳に集中させた。アサルトブレードを量子変換し、右腕を振り上げる。

「うおおお！」

右手にピンポイントバリアを纏い攻撃する。アルトの切り札だ。

ミサイルをばらまき千冬の進行方向を限定させ正面からぶつかり合い、アルトが剣を引くことで出来た一瞬の隙をつきピンポイントバリアパンチで攻撃する。

「これで、終わりだ！」

アルトのピンポイントパンチが千冬のスカートアーマーに当たり千冬のシールドエネルギーが削られ、大地へ落下した。

『見事だ。早乙女アルト。しかしまだ終わりではないぞ。そちらのシールドエネルギーも残り少ないはずだ。』

確かにその通りだった。イグニッション・ブーストにピンポイントバリアパンチ。すでに風前の灯といったところだ。

「だけど1発当てました。まだチャンスはあります。」

そう言った次の瞬間千冬が視界から消えた。

アルトは何が起きたのかわからなかった。気づいた時にはまた壁に激突していた。

「ぐうう。い、一体何が起きたんだ。」

すると千冬はさっきまでアルトがいたところに浮かんでいた。その千冬から通信が入る。

「まだまだ甘いな。早乙女。」

「あんた一体何をしたんだ？」

「なに、簡単なことだイグニッション・ブーストを2回連続で行い、お前を吹っ飛ばしたただけだ。」

「なあ？」そう。千冬はイグニッション・ブーストをほぼ直角に使い物凄いスピードでアルトの正面まで行き、格闘用ブレードでアルトを吹っ飛ばしたのだ。

「そんな。イグニッション・ブーストの方向転換は出来ないんじゃない？」

「ふん。私を誰だと思っている？まあ少しだけ疲れたがな。」

「あんた化け物か…」

『馬鹿者。私は教師だ。それと織斑先生と呼べ。次は容赦しないぞ。』

「これがISの戦いか…」

とアルトが呟くとアルトのISが量子変換され、それと同時に気絶した。入学試験はこうして幕を閉じたのだった。

アルトは気づくと夕方の保健室にいた。どうやらあの後気絶したようだ。

「気が付いたか？」

そこには織斑先生と山田先生が立っていた。

「大丈夫ですか？」

山田先生が心配そうな顔で話し掛けてきた。

「あ、はい。大丈夫です。これくらいのケガならしょっちゅうしますから。」

「そうか。悪かったな。うむ、それでだ。明日以降のことだが学生寮で生活をし、学校に通ってもらおう。寮の部屋、設備等は後で山田先生に教えてもらえ。入学式後はすぐにクラスで授業となる。クラスは1年1組。担任は私で副担任は山田先生だ。何か質問はあるか？」

「いえ。ありません。」

「なら着替えて山田先生に案内してもらえ。私はこれから仕事があるのでまた明日な。」

「はい。ありがとうございました。」

アルトは軽く頭を下げ、礼を言った。

去り際に織斑先生はこんなことを言い出した。

「早乙女。元の世界に帰還したいのなら強くなれ。私を倒せる位にな。それが近道だ。」

そう言つて織斑先生は保健室から出ていった。

残された2人は

「どういう意味ですか？山田先生。」

「さあ？わかりません。」

考えていても仕方ないので着替えて山田先生の案内で寮に向かった。疲れきっていたので寮につき、自分の部屋に入りすぐに眠ってしまった。

こうして入学式を迎えることになる。

第7話 獅子座へレオ VS 千冬戦 (後書き)

はい。千冬ファンの皆さん申し訳ありません。

私の能力が至らないために駄文となってしまいました。

次回はようやく本編です。

第8話 クラスメイトは全員女（前書き）

セシリアの口調が少し悪くなっています。ファンの皆様申し訳ありません。

本編突入です。

第8話 クラスメイトは全員女

アルトは現在入学式を終え、IS学園1年1組の教室でSHRを受けていた。担当している先生は山田先生だ。

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRを始めますよー」

黒板の前でにつこり笑っている山田先生。なんていうか、

『子供が無理して大人の服をきました』

というイメージが強い。クラスメイト全員そう思ってるんじゃないかと考えてしまう。

「それでは皆さん、1年間よろしくお願いしますねー」

「……………」

けれど教室の中は変な緊張感に包まれていて誰からも返事がない。理由は容易に想像がつく。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

そう。理由はただ1つ。俺ともう1人以外のクラスメイトが全員女だからだ。

もう1人というのが名前は織斑一夏。世界で唯一ISを使える男として認識されている人物だ。そしてあの織斑先生の弟であるということだ。

彼はオレ以上にどうしたらいいのか分からない様子だった。ちらちらと窓側に座っているポニーテールの女子生徒に何かを訴えかけている様だったが相手にされていない。

すると、山田先生がちよつと大きな声で、

「……君。織斑一夏くんっ」

と呼んでいる。

彼も何かを考えていたのか、

「は、はいっ!？」

と裏返った声で返事をしていた。案の定周りの生徒からはくすくすと笑い声が聞こえてきた。これは落ち着かないだろう。

「あ、あのね。大声だしてごめんね。お、怒ってる?怒っているかな?自己紹介、『あ』から始まって『お』の織斑くんなんだよね?自己紹介してくれるかな?駄目かな?」

気が付くと山田先生はぺこぺこ頭を下げていた。教師なんだからもう少ししっかりとした方がいいよな。

「いや、あの、そんなに謝らないでください。……ってか、自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当? 本当ですか? 本当ですね? や、約束ですよ。絶対ですよ!」

かばつと顔を上げ、織斑一夏の手をとって熱心に詰め寄る山田先生。また注目を浴びている。山田先生、天然だなあ。

「えーっと・・・織斑一夏です。よろしくお願いします」

席を立ち、織斑一夏はそう言った。だがそれで終わらせてくれないのか。このクラスの女生徒達は、

『もつといろいろと聞きたいな』

というオーラ全開で織斑一夏の方を見ていて自己紹介が終われない状況になっている。再度ポニーテールの娘に視線を向けているが目を逸らされている。

「以上です」

何人かこけている女子生徒がいた。何を期待しているんだろうか？すると見慣れた顔の教師がやってきて、織斑一夏の頭をパンと叩いた。

「いつー！？」

そう叫び織斑一夏は恐る恐る後ろを見た。そこに立っていたのは昨日オレをボコボコにした教師である織斑千冬先生だ。おかげでオレは包帯姿だ。

「げえっ、関羽！？」

パンツ！と再び爽快な音が聞こえる。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「い、いえつ。副担任ですから、これくらいはしないと・・・」

おいおい、山田先生。先程とは変わって見えるのですが？なんで顔が紅いんですか？

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。」

私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

凄く矛盾した事を言っているぞ。織斑先生。

「キャ————！　千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！　北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

静かだった周りの女子生徒達が急に騒ぎ出した。さすがは元日本代表の世界最強といったところか。騒ぐ女子生徒達を見て織斑先生は

うんざりそうにこう言った。

「毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

「きゃあああああつ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躑をしてく！」

そういう趣味の方が混じっているらしい。オレは男なので無害だが。

「で？ 挨拶も満足に出来んのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は——」

パンツ！本日3度目。頭を叩くと脳細胞が5000個死ぬらしい。彼は15000個死んだ計算だ。

「織斑先生と呼べ」

「はい……織斑先生」

「え……？ 織斑くんってあの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、世界で唯一男で『IS』を使えるっていうのも、それが関係して……」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ」

それは無理だろ。ていうかほとんどの生徒が彼らが姉弟ということ
を知らなかったらしい。

そんな事を考えていると自己紹介の順番が回ってきた。

「早乙女アルトです。織斑一夏君の後でISが使えることが分かつ
たのでこのIS学園に入学しました。これから1年間よろしくお願
いします」

オレは前日に山田先生と相談して自己紹介を決めていたので簡単に
自己紹介を終わらせた。実際は他の生徒達より年上なのだが説明す
るのも面倒なので割愛した。
すると女子生徒達が再度騒ぎ出した。

「キヤー！2人目の男子生徒」

「しかも超美形」

「ああつ……女子だと思っていたのに。でもこれはこれで……」

おい3人目。さっきからおかしいぞ。
その後自己紹介はすんなりと終了した。

「さあ、SHRは終わりだ諸君には半年でISに関する基礎知識を
覚えてもらう。良いな、良いならば返事をしろ。良くなくても返事
をしろ！！」

かなり無茶苦茶だ。これから先が少々思いやられるな。織斑先生の
この発言でSHRは終了した。

1時間目のIS基礎理論授業が終了したが教室内の空気が妙だった。世界で2人しかいないISを使える男性を見るために教室の外まで女子生徒でいっぱいだ。教室内の視線もこっちに集中している。すると織斑一夏がオレに話かけてきた。

「よう。改めて俺は織斑一夏よろしくな」

「ああ。早乙女アルトだ。アルトって呼んでくれ」

「なら俺も一夏でいいぜ。名字だとややこしいだろ？」

確かに『織斑』なんて呼んで織斑先生が反応したら出席簿で叩かれてしまうからな。

「それよりもこれきつくないか？俺はもうくじけそうだ」

一夏が暗い顔をして聞いてきた。

「確かに視線が気になるな。まあ、オレは気にしないようにしてはいるが」

「ホントか？俺はもう逃げ出したい」

と一夏が歎いていると女子生徒が話かけてきた。

「……ちよつといいか」

「… 箒？」

やっぱり一夏の知り合いなのか。

「アルト。紹介するよ。こいつは篠ノ乃箒。6年ぶりにあつた俺の

幼なじみ。」

「早乙女アルトだ。よろしく」

「よろしく……」

篠ノ乃は随分不機嫌そうな顔だな？と思っていると

「廊下でいいか？」

「お、おう。悪いアルト。また後でな」

一夏は篠ノ乃に連れられて廊下にでていった。

2時間目が終了した。

「アルト。お前は今の授業理解できたか？」

「ああ。オレはお前みたいに参考書捨ててないからな」

授業内容を一夏は全く理解していないらしく、さらには入学前にもらった参考書を古い電話帳だと思って捨ててしまったらしい。さすがにこれには同情できない。

「マジか。後でノート貸してくれ！」

「いいぜ。そのかわりなんか奢れよ？」

そんなやり取りをしているとまた1人の女子生徒が話かけてきた。

「ちょっとよろしくて?」

「へ?」

「どうした?」

一夏がマヌケな声で返事をする、金髪の縦ロールのいかにも高貴なオーラをだした女子生徒が立っていた。

「訊いてます?お返事は?」

「ああ、訊いているけど……どういう用件だ?」

一夏がそう答えると目の前の女子はわざとらしく声をあげた。

「まあ! なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも栄光なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら?」

「……」

一夏が苦虫を噛んだような顔をしていた。それはそうだ。いきなりこんなふうにならなければ誰だってそうなる。実際、オレがシエリルに初めて（厳密に言えば初めてではないが）会った時は一夏のような顔をしていた筈だ。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

「わたくしを知らない?このセシリア・オルコットを?イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを!」

面倒くさいのに絡まれたな。正直そう思ったし、一夏もそうだろう。

「そちらの貴方はたくしの事を知っていますわよね？」

「いや、代表候補生の意味は分かるけど君の事は知らない」

「あの、質問いいか？」

一夏がオルコットとやらに尋ねる。

「ふん。下々のものの要求に答えるのも貴族の務めですわ。よろしくつてよ」

「代表候補生って何？」

「はははっ！」

一夏の質問に対しアルトは笑ってしまった。逆にオルコットはわなわな震えている。アルトは笑いながらオルコットの代わりに質問に答える。

「一夏。代表候補生っていうのはIS国家代表の候補生って事だ。わかりやすく言えばエリートだ」

一夏は手を顎にやって、

「なるほど」

と頷いた。

「で、そのエリートが何の用だ？」

一夏は再度、質問をした。

「そう。エリートなのですわ！」

人差し指をびしっと立て一夏の鼻先まで持ってきた。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とクラスを一緒にすることとは、奇跡そう幸運なのです。その現実を、しっかり理解していただけの？」

「そうか。それはラッキーだ」

「馬鹿にしていますの？」

アルトはまたも笑いだしそうになったがオルコットが睨んでくるので慌てて手を口にやって閉じた。

「大体ISについて何も知らないのによくこの学園に入れましたわね男でISを動かせるというから少しい知性を感じさせるかと思っただけ期待はずれですわ。まあ、わたくしは優秀ですからあなたが泣いて頼んできたら……教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「入試って、あれか？IS動かして戦うってやつ？」

「それ以外にありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官。アルトはどうだった？」

「俺は織斑先生相手だったから負けた。」

アルトは包帯を巻いてある右手を見せながら一夏に言った。

「げえ……お前千冬姉が相手だったのかよ？あの人容赦ねえし……よくそんな傷ですんだな」

「まあ、ある程度手加減してたみたいだしな。ああ、でも一矢報いたぜ。お前は織斑先生じゃなかったのか？」

「ああ。俺は山田先生だったよ」

「ち、ちよつと！」

オルコットが血相変えて急に話に入ってきた。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？それに貴方の相手が織斑先生？」

「女子だけってオチじゃないのか？」

「つ、つまりわたくしだけではないと……？」

キンコーンカーンコーン。

お、3時間目のチャイムが鳴った。

「くっ……、また後で。あなたがた逃げないことね！よくって!？」

オレと一夏は

（よくない）

と答えたかった。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

次は織斑先生が教壇に立っていた。眠ってしまわないように気をつけなければな。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出場するクラス代表を決めないといけないな」

ふと織斑先生が思い出したように告げた。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会などへの出席…まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差はないが競争は向上心を生む。一度決まると何か大事が無い限り一年は変わらないからそのつもりで」

面倒くさそうだ。絶対になりたくないな。アルトはそうかんがえていたが周りが許してくれなかった。

「はい！織斑君を推薦します」

「はい！私は早乙女君を推薦します」

こいつら男が少ないからってやりたい放題だな。

「では候補者は織斑一夏と早乙女アルト。以上でいいか？」

「待ってください。納得いきませんわ！」

「そのような選出認められません。大体男がクラス代表なんていい恥さらしですわ。このセシリア・オルコットにそのような屈辱を1年間味わえというのですか？」

何だと？恥さらし？屈辱？

「實力からいってわたくしがクラス代表になるのは当然。ISを動かせただけの極東の猿共がめずらしいからというだけの理由でクラス代表になるなんて言語道断ですわ」

猿だと？

「大体文化も後進的な国で暮らすこと自体わたくしにとっては苦痛でしかないですわ」

「カチン！カチン！」

2人の男がキレた。先頭を切ったのは一夏だ。

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ？世界一まずい料理で何年覇者だよ？」

続けてアルトが

「日本文化を侮辱してんじゃないよ。古いだけ取り柄の国だろ？」

「「ーあ」」

オレと一夏は顔を合わせてしまったという顔をしていた。

「なっ……？あつ、あなたたち！わたくしの祖国をバカにしますの？……決闘ですわ！！」

「ああいいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「オレも乗った！」

基本的にこの2人は似た者同士ということだ。

この後、ハンデをつける、つけないで話がこじれたがハンデは無しに決まった。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は来週の月曜。放課後第3アリーナで行う。3人なので総当たり戦だ。第1試合にオルコットと早乙女。第2試合に織斑と早乙女。第3試合がオルコットと織斑だ。各自用意をしておくように。さて授業を始める」

第8話 クラスメイトは全員女（後書き）

次はバトルです。

第9話 入学式放課後（前書き）

何時もこの小説を読んでくださいますありがとうございます。
お手数ですが、あとがきにて皆様にお願いがございます。

第9話 入学式放課後

↓放課後↓

一夏が机の上でぐったりとうな垂れている。まあ、これまたなんとなく理由を察したオレは一夏に尋ねる。

「おい、一夏。一応聞くが、大丈夫か？」

「アルトか。オルコットとの代表決定戦に向けて基礎だけでも、しっかり学んでおこうと思ったんだが……い、意味がわからん。なんで、こんなにややこしいんだ……？」

「やっぱりだ。あの分厚い参考書を今から渡されてもまずコイツは1週間では覚えられないだろう。織斑先生は1週間で覚えろと無理難題を一夏に押し付けていたが……。それに加えて、昼休みも放課後も女子生徒達から好奇の目を向けられていたことが、余程堪えたのだろう。」

「とりあえずだ。早く参考書を貰って頑張って覚えるしかないな。ただ、あれは覚える量が半端じゃないぞ。ノートなら何時でも貸してやる。お前の態度次第でな。」

すると、顔面蒼白でうなだれていた一夏の顔に少しでも笑顔が戻った。

「ありがとな。アルト。同じクラスにお前がいてくれてホントに良かったよ。お前こそ本当の心の友だ。」

心の友ってなんとなくだが古いイメージの言葉だなと思って、俺は苦笑いで返しておいた。すると、山田先生が放課後の教室に戻ってきた。

「ああ、織斑君まだ教室にいたんですね。良かったです。」

「はい？」

呼ばれて一夏が顔を上げると、山田先生は片手に書類を持って一夏のそばまでやってきた。

「えつとですね。織斑君の寮の部屋が決まりました。」

そういつて山田先生は一夏に部屋番号の紙とキーを渡していた。

「一夏は部屋どこだ？」

「えつと、1025号室。アルトは？」

「となりだ。1026号室。」

「ていうか、山田先生。俺の部屋って決まっていなじゃなかったんですか？前に聞いた話だと1週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な措置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。……織斑君、そのあたりのことって政府から聞いてます？」

なるほど。確か一夏の場合、今まで前例のない『男のIS操縦者』

という名目でニュース等で知れ渡っている。その場合、日本政府は保護と監視両方を付けるはずだ。そういったことも含めて寮にいるほうが安全というわけか。

「そういうわけで、政府特例もあって、とにかく寮に入れるのを最優先にしてみたいです。1ヶ月もすれば早乙女君のように個室を用意できますから、しばらくは相部屋で我慢してください」

「部屋はわかりましたけど、荷物は1回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰っていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら……」

「私が手配をしておいてやった。ありがたく思え。」

でした。実弟曰く『関羽』。やっぱり得体の知れない威圧感があるな。シスコン隊長……改め、オズマ隊長とはまた違った意味で最強なのだろう。

「早乙女。今回までは許すが、次は容赦しないぞ？」

「了解しました。」

心の内を読まれたよ……。読心術でも会得しているんだろうか？

「ど、どうもありがとうございます……」

突然現れた、織斑先生にビクビクしながら一夏はお礼をいった。そりゃあれだけ叩かれればそうなる。

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電機があればいいだろう」

織斑先生。いくらなんでも大雑把過ぎなのでは。まあ、オレは何も持っていなかったから、全部自分で揃えたがな。……倉持技研で金を借りて。やばい……どうやって返そう。

すると山田先生が、

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は6時から7時、寮の1年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、織斑君達は今のところ使えませんか。」

としどろもどろに説明をした。

それはそうだろう。オレはシャワーさえ使えばいいから特に問題はない。そう思っていると一夏は間の抜けた声で山田先生に質問した。

「え、なんでですか？」

「アホかお前は」

オレと織斑先生がハモツて一夏に対して言葉を向けた。つづけて、織斑先生がなんだか出来の悪い弟を見るような目で説明をした。織斑先生は間違っていない。今のは一夏が悪い。

「まさか、お前は同年代の女の子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

一夏。本当に気づいていなかったのか？オレは溜息をつくしかかった。

「おつ、織斑君。女子とお風呂に入りたいんですか！？　だっ、ダメですよ！」

「いや、入りたくないです」

「ええっ？女の子に興味がないんですか？そ、それはそれで問題のようない……」

うわあ、山田先生。話を飛躍しすぎじゃないですか？どうしたらそういう捉え方ができるのかオレには良くわからない。周りにそういう女子はいなかったからな。ていうか織斑先生。そんな顔してないで早くとめてください。今こそ読心術の出番です。

「山田君。そろそろ行くぞ」

「あ、はい。えっと、それじゃあ私達は会議があるので、これで織斑君、早乙女君、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃだめですよ」

おお。さすが織斑先生。きちんと読んでくれた。というか寮までの道のりは50メートルしかないので悪しからず。

「ふー……やっつと、1日が終わった。」

一夏が溜息混じりに立ち上がった。疲れたのはオレのほうだよ。さ
っさと部屋に戻って休もう。

第9話 入学式放課後（後書き）

アルトはツツコミだと思っています。

さて前書きにて書いた通り皆様に2点アンケートをお願い申し上げます。

全ては筆者の力の無さが原因で皆様にお伺いをたてることをお許しください。

1）ヒロインは誰？

この小説はマクロス主人公のお話です。そこでやはり、三角関係を題材としたいと思います。そこで皆様には下記から2名アルトのヒロインを選んで頂きたいと思っています。選ばれた2人で全力で書いていきたいと思っています。番号を2つお選びください。

？セシリア・オルコット

？鳳鈴音

？シャルロット・デュノア

？ラウラ・ボーデビッヒ

？織斑千冬

？山田真耶

？更識盾無

？布仏本音

？布仏虚

？更識簪

篠ノ乃姉妹は除外させて頂きます。

他にいれば名前を書いていただければやります。

お一人様2票とさせて頂きますのでご了承ください。

2) フロンティア船団のお話を番外編という形で執筆したいと考えています。なるべく現在執筆中のお話と連動というか関係のある話を書きたいのですが、その場合はこの話の中に作るのか、それとも新しく別の話として書いたほうがいいのか。お返事お願いいたします。

9月1日の午後12時までアンケート取りたいと思います。
お手数ですがよろしくお願い致します。

第10話 クラス代表選抜総当り戦！（前書き）

まず始めにアンケートに投票して頂いた読者の皆様に感謝したいと思います。皆様ありがとうございました。結果は後書きにてお伝えいたします。

申し訳ありません、アンケートの関係で戦闘シーンは次回に見送らせて頂きました。

第10話 クラス代表選抜総当り戦！

入学2日目

俺は一夏と篠ノ乃と共に朝食をとるために食堂にいた。なにやら篠ノ乃は非常に不機嫌そうな顔をして朝食を取っている。一夏と篠ノ乃は部屋が同じだったらしい。オレは学校終わったらシャワーを浴びて寝てしまった。どうやら一悶着あったらしいが……。

「なあ……」

「……………」

「なあつて、いつまで怒ってるんだよ」

「…………怒ってなどいない」

「顔が不機嫌そうじゃん」

「生れつきだ」

…………にべもない。さつきからずっとこの調子だ。朝なんだからもうちょっと爽やかにいこうぜ……。

なんでもブラジャーを一夏が見てしまったのがいけなかったとかそりゃ、年頃の女なら怒るだろうよ。女性は恥じらいってもんが美しいからな。オレなんか、シェリルが悪いのにあいつの服がはだけただけでグーで顔にパンチだぞ。

でも篠ノ乃も一夏は謝ってんだから許してやればいいのに……。
お、一夏が同じクラスの女子に絡まれてる。がんばれー。一夏。

「……織村。先に行くぞ。」

「お、おう。また後でな。」

すると一夏が不思議そうな顔でオレに尋ねた。

「なあ、アルト。今の流れの中で俺なにか籌を怒らせるようなことしたか？」

「さあ？オレにはわからないな。」

…本当に見当がつかない。オレと一夏が見合いながら首をかしげていると、

「いつまで食べている！食事は迅速に効率良くとれ！遅刻したらグラウンド10周させるぞ！」

おお、織斑先生。おはようございます。先生がそう言った瞬間、空気がビクリするくらい変わり、皆一生懸命食事している。IS学園のグラウンドは1周5キロメートルらしい。そりゃ、50キロメートルも走りたくはない。俺はお家柄、急いで食べるのは苦手だがこの時だけは急いで食べた。

2時間目が終わった……一夏はグロッキーだった。まるで屍のようだ……。

「予習したから単語の意味は解るんだが根本的に理解不能なことがある。アルト！！頼む。教えてくれ」
と一夏が泣きついてきた。

「オレもイマイチ分かってない所があるから無理だな。他の奴に教えてもらうんだな」

そう。バルキリーとは構造が全く違い、この世界は文化も技術も違う。一夏よりは分かってても専門的な知識は他の生徒よりも劣っている。だから、オレが教えるよりは他の生徒に教えてもらったほうがいいのだ。

「うーん。そうだな……、聞いてみるよ」

心あたりがあるのか、一夏は次の授業の準備に取り掛かる。おっと、オレも早く席に戻ろう。

「ISには意識に似たようなものがあり、お互いの対話——つまり、一緒に過ごした時間で分かり合うというか、操縦時間に比例して、IS側も操縦者の特性を理解しようとしています。それによって相互的に理解し、より性能を引き出せることになるわけです。ISは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください」

なるほど、操縦時間により操縦者のクセとか、技術に合わせ自律進化するというわけか。なんて技術だ。ルカが聞いたらもの凄い笑顔で喜ぶだろうなと思う。全く、篠ノ乃博士という天才はなんてものを作ったんだ。本来、宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォームスーツ。それが本来の目的ではなく飛行パワードスーツとして軍事転用されたのには理由があるらしいが……。ん……篠ノ乃？

「ところで、織斑。お前のISだが準備まで時間がかかる。」

「へ？」

「予備機がない。だから少しまで。学園で専用機を用意するそうだから。」

考え事をしていると織斑先生が一夏に話かけていた。一夏はまったく意味が分からない様子で、織斑先生が溜息まじりにつぶやいた。

「教科書6ページ。音読しろ。」

「え、えーと……」『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されたいません。現在世界中にあるIS467機、その全てのコアは篠ノ乃博士が作成したもので、ブラックボックスと化しており、いまだ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第7項に抵触し、全ての状況下で禁止されています』……」

「つまりそういうことだ。本来ならIS専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられないが、が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか？」

要約すると篠ノ乃博士が用意したISのコアは467機でそれ以上はコアがブラックボックス化していて作ることができない。さらに、アラスカ条約により専用機は国家などに所属する人間しか与えられない。ただし、一夏の場合は特例として学園が用意する……ということらしい。アラスカ条約は国家間で決められたISに関する条約

である。一夏にもなんとか理解はできたらしく、

「な、なんとなく」

と発言していた。すると織斑先生に女子生徒から質問が飛んできた。

「あの、先生、篠ノ乃さんって、もしかして篠ノ乃博士の関係者なんでしょうか……？」

すると織斑先生は溜息まじりに、

「そうだ、篠ノ乃はあいつの妹だ」

と言った。丁度オレが考えていたことだ。なんでも篠ノ乃博士は現在、あらゆる国家が指名手配しているらしい。

コアの作り方がわからないとなれば、国家・企業が血眼になって探すのも理解できる。彼女を国家が迎えることができれば、他国に対してイニシアチブ、さらには戦争を起こして世界征服なんてこともできる。国家、政治家なんてどの世界でも考えることは一緒だ。ホント、反吐がでる。

「ええええーっ！す、すごいっ！このクラス有名人の身内が2人もいる！」

「ねえねえ、篠ノ乃博士ってどんな人？やっぱり天才なの？」

「篠ノ乃さんも天才だったりする？今度IS操縦教えてよ！」

皆ミィハーなのだろうか？またもギャアギャア騒ぎ出した。おおやツクデカルチャーってか？

「あの人は関係ない！」

教室中に篠ノ乃の声が響いた。騒いでいた女子達もその声にビックリしたのか静かになっていた。一夏はなんだか心配そうに篠ノ乃を見つめていた。

「……突然大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられることなどなにも無い。」

そういつて篠ノ乃は黙り、つらそうに窓の外を眺めていた。

「山田先生、授業の続きを」

そういつて授業は再開された。

休み時間セシリア・オルコットが早速一夏とオレのところに来た。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど。まあ？一応勝負は見えていますけど？さすがにフエアではありませんものね」

「？なんで？」

「あら、ご存知ないのね。いいですわ、庶民のあなたに教えてさしあげますわ。このわたかし、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生……つまり、現時点で専用機をもっていますの」

「へー」

「……馬鹿にしていますの？」

「いや、すげーなと思ったただけだ。どうすげーのかはわからないが」

「それを一般的に馬鹿にしていると言っでしよう？」

一夏……それは火に油を注ぐ行為だと思うぞ。

「そういえばあなたはどうか？やはり訓練機でわたくしと戦うつもりですか？その場合はしっかりとハンデを差し上げますわ」

一夏とは話にならないと思ったのだろうか。オルコットはオレに話しかけてきた。なんでオルコットはこんなにも男を差別化するのだろうか……いくら女尊男卑の世界といっても限度つてもんがあるだろう。後で調べてみるか……おっと質問に答えないと。

「オレは専用機をもっている。これでも一応倉持技研所属のテストパイロットだ。一夏より後に発覚したんだが……倉持が隠していたため報道なんかはされていないがな。もともとはあそこで親が働いていたんだがその関係でISを触らせてもらったら起動したんだ。今、親は海外に出向していていないけどな」

これも以前、先生達と話合い決めたでっち上げの情報だ。こう言っておけば周りは納得してくれる。

「え、そうなの？」

「ああ。言わなかったか？」

「聞いてねえよ！」

「聞かれなかったからな」

すると、オルコットがオレと一夏の話に割り込んできた。

「……ごほん！さっき授業でも言っていたでしょう。世界でISは467機。つまり、その中でも専用機を持つものは全人類60億の中でもエリート中のエリートなのですわ。一部あなたたちのような例外があつたとしてもそれは変わりませんわ」

「そうなのか……」

「そうですわ」

「人類つて60億超えてたのか……」

「そこは重要ではないでしょう！？あなた！本当に馬鹿にしていますの？」

「いやそんなことはない」

「だったらなぜ棒読みなのかしら……？」

「なんでだろうなアルト？」

馬鹿。オレに振るな。余計こじれるだろう？空気を読めよ……。

「まあ、どちらにしてもこのクラス代表にふさわしいのはわたくし、セシリア・オルコットであるというのはお忘れなく」

ばさっと髪を手で払ってきれいに回れ右、そのまま立ち去っていく

た。貴族様らしい振る舞い方だ。

オレは一夏、篠ノ乃ともに食堂で昼食をとっていた。3人とも日替わり定食を食べていた。焼き鯖の定食なのだが絶妙の塩加減だ。これはうまい、是非レシピを教えていただきたい。

すると一夏が篠ノ乃に話しかける。

「そっぴやさあ、ISのこと教えてくれなか？このままじゃ来週の勝負で何も出来ずに負けそっだ。」

「くだらない挑発に乗るからだ、馬鹿者め」

オレも耳が痛い……。

「それをなんとか、頼む」

必死に懇願する一夏、しかし完全に無視されている。めげずに一夏が頼んでいると、

「ねえ、君って噂の子でしょ？」

いきなり、隣から一夏が女子に話しかけられる。三年生らしく一夏に興味深々で話かけている。

「代表候補生のこと勝負するって聞いたけど、ほんと？」

「はい、そうですけど……？」

すごいな、学園中に噂が広がっている。女てのは噂好きっていうのは事実らしいな。

「でも君、素人だよね？IS稼働時間ていくつくらい？」

「いくつって……20分くらいだと思いますけど」

「それじゃ無理よ。ISって稼働時間がものをいうの。その対戦相手、代表候補生なんですよ？だったら軽く300時間はやってるわよ」

なるほど。練習がモノをいう世界だ。

「でさ、私が教えてあげようか？ISについて」

おお、一夏教えてもらえ。篠ノ乃は駄目そうだしな。一夏が返事をしようとしたその瞬間、隣で食事していた篠ノ乃が、

「結構です。私が教えることになっていますので」

あれ？篠ノ乃さっきまで一夏の頼みを完全に無視していたのになんでだ？

「あなたも1年でしょ？私のほうがうまく教えられると思うなあ」

「私は篠ノ乃東の妹ですから」

「篠ノ乃って……ええ!？」

「ですので、結構です」

「そ、そう、それなら仕方ないわね……」

あれ??さっきまで篠ノ乃東博士の名前までだすのいやがってたのになんでだ?

「一夏、今日の放課後剣道場に来い。一度、腕がなまっていらないか見てやる。」

「いや、俺はISのことをー」

「見てやる」

「……わかったよ」

一夏は渋々頷いた。なんだ、篠ノ乃のヤツいきなりやる気になって……あの女子生徒が何かいやなことだったのか?わからん……。

「アルトはどうする?一緒にやるか?」

その瞬間凄まじいまでの殺気を一夏の隣から感じた。篠ノ乃だ、鬼といわんばかりの形相でオレのことを睨んでいた。理由が全く分からないが、身の危険を感じたオレは、

「い、いや、オレは遠慮しておくよ。どっちみち放課後は倉持技研に何度かいくことになっているからな」

そう。どのみちアルトは倉持での訓練とISの調査で来週まで行くように言われている。オレの最終目的は元いた世界に帰ることだからな。そのためなら調査でもなんでもやってやるさ。篠ノ乃の顔が元に戻ったのは言うまでもないな。

翌週の月曜。

セシリア・オルコットとの対決の日。

「ーなあ、篤」

「なんだ、一夏」

「気のせいかも知れないんだが」

「そうか。気のせいだろう」

「ISのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

「……………」

「目をそらすな」

そう、何でも一夏はこの6日間、剣道の稽古しかしておらず、ISのことを何ひとつ学んでいないという。一夏曰く、最初の日に篠ノ乃に剣道で負けたことで、篠ノ乃が怒り、放課後ひたすら剣道の稽古しかしなかったという。……篠ノ乃さん。あんた自分で教えるというておいてそれはないだろう。

「まあ、一夏。そんなに気にするな。ようは勝てばいいんだろ？オレが最初にオルコットと戦闘するんだから良く見て対策をねろ。それで十分だ」

そう、最初はオレとオルコットの対決だ。オレは倉持での訓練時間があつたおかげで一夏よりはまともに練習ができた。射撃訓練・格闘訓練・高速機動訓練・武装展開訓練などをすっかり行った。それと、未完成だったマルチロックオンシステムも完成した。試験稼動・織斑先生との戦いでは全て手動でしか使用できなかったが、自動で捕捉・追尾・軌道設定などなど、できるようになった。

訓練自体は上手くいつていたのだが、一つだけ気になったことがあつた。同じIS学園の生徒が、倉持技研に来ていたのだがその子に睨まれたのだ。

水色のセミロングの髪で毛先がクルツと内側を向いたメガネをかけた女の子だった。研究員と話していたその女の子は話が終わるや否やこちらの方を向いてオレを睨みつけてきた。理由が全くわからないからどうしようもないのだが……確かリボンが1年の物をしていたはずだ。今度会ったら理由を聞いてみよう。そんなことを考えていると管制室の織斑先生からアナウンスが入る。

「早乙女。準備はいいか？」

「何時でもどうぞ」

「よし、ならばISを展開し、アリーナへ迎え。対戦相手がお待ちだ」

「了解。デュランダル、展開！」

赤と白のコントラストをしたISを身に纏いオレはランチャーカタパルトへ向かう。「それがアルトのISか？」

「ああ。ヴァルキュリア・デュランダルっていうんだけど……性
能は試合中に見せるさ」

「わかった。勝ってこいよ！」

「まかせろ」

オレは一夏と軽くやり取りをした。その後篠ノ乃が

「早乙女、が、がんばれ」

と言ってきたではないか。ちょっとびっくりしたがせっかく応援し
てくれたんだ、と思い、

「ありがとう、篠ノ乃」

と笑顔で返しランチャーカタパルトを接続する。

「ランチャーカタパルト接続完了。早乙女アルト、テイクオフ！」

こうしてオレは青き狙撃手と戦うべく空を舞った。

第10話 クラス代表選抜総当り戦！ （後書き）

前書きにてお伝えしたとおりアンケートの結果発表です。アンケートの結果ヒロインは更織盾無・簪の姉妹とさせて頂きます。

次にこの2名、原作では登場遅めなのですが（簪は特に）、前倒しさせて頂きます。どの場面ですかは検討中です。

さらにお知らせです。まだ構想段階ですがこの二人を完全メインヒロインというかスポットというかオリジナルの話を考えています。盾無の「ロシア代表編」、簪の「日本代表候補生編」です。何時載せられるかわかりませんが気長に待っていただけると幸いです。

さらに、マクロスF陣をメインとした話もこの小説内で発表させて頂きます。アルトのいない世界で彼らがどのような気持ちで過ごしているのかを書かせていただきます。

以上でお知らせとヒロイン決定の報告とさせて頂きます。何時も読んでくださってありがとうございます。

第11話 射手座へサジタリウス《VSセシリア戦（前書き）

タイトルと本文は全く関係がありません。感想お待ちしております。
武器名称をなくしました。

戦闘パートは3人称でいきます

第11話 射手座へサジタリウス VS セシリア戦

——「戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。ISネーム『ブルー・ティアーズ』戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り」——

デュランダル
ISから無機質な声で告知される。それと同時にカタパルトから発進。そのまま空中へと飛び、ピタツと静止して先に待っていたセシリアと対峙する。するとセシリアはアルトに通信を入れてきた。

『あら、逃げずに来ましたのね』

アルトが答えるとセシリアはビシツと人差し指を突き出した状態に向けてきて。オレに再度通信を入れた。

『最後のチャンスをあげますわ』

「ん？」

『わたくしが一方的に勝つのは自明の理、今ここで謝ると言つのなら許してあげない事もなくつてよ？』

そういつて目を笑みに細める。——警戒。敵ISの左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認。そうISが告知してきた。

（戦う気マンマンじゃねえか……）

そうアルトは思っていた。なので逆に軽く挑発してみるか、と考え

両手を軽く上にあげ『やれやれ』といった感じで話す。

「何を言っているんだ。挑発してきたのはそっちだろ？お前が謝るんだったらオレも謝るさ。確かにあの時はオレも大人げなかったかな」

するとセシリアは、

「そう？残念ですわ。それなら――」

「警告！敵IS射撃体制に移行。トリガー確認、初弾装填完了」

「お別れですわね！」

キュインツと耳をつんざくような音。それと同時に放たれた青い閃光がアルトを襲う。

しかしアルトはセシリアの放った初弾をスラスターを調整し、後ろ宙返りでかわした。それを見たセシリアは驚愕したような顔だったがそれでも気持ちを入れ替えアルトに引き続きライフル《スターライトMK-?》で

「ふっ、まぐれですわ。次いきますわよ」

セシリアは2発、3発と連続でアルトに狙い撃つ。しかしアルトは全てを鮮やかに、そして美しくかわして見せた。最初はロール、次は逆ロールといった感じに……流石にセシリアは驚愕の顔を隠せなくなったようだ。

それに対してアルトは

(狙い・行動予測・狙撃時の位置取り全てをとっても相棒には劣っている)

そう。ここだという相棒とはミハエル・ブラン……通称ミシエルと呼ばれる少年である。彼も青い機体で狙撃手だったのがバルキリーでの模擬戦闘で完全にアルトが負け越したあの女好きの親友よりもセシリアは完全に劣っている。だからアルトは余裕をもってかわせるのだ。

「悪いがその程度で当たってやることはできない。もっと技術の上な親友がいるんでな」

『な、なんですって？このわたくしをそ、その程度とおっしゃたのですか？たかだかビームを数回かわしただけで』

「自分の技術《芸》をたかだかなんていうやつにはもっと当たってやれないがな」

今のアルト自分の《芸》に誇りを持っている。腕が立っても心がともわなければそれは中途半端になる。親友のミシエルやアルトがライバルとしているヤツにも言われたことだ。

「そうですか……ならばこれはいかがかしら？ティアーズ！」

セシリアのISは外見が特徴的で4つのフィンアーマーを背にかえている。そのフィンアーマーからフィン状のパーツが排出され、アルトの方に一目散に向かって来る。

「なんだ？ミサイルか？」

アルトが呟くと4つのパーツがアルトの正面・後方・右・左と方向を変え、アルトを囲んだ。

『さあ、踊りなさい！わたくしとブルー・ティアーズの奏でる円舞^{ワル}曲で！』

そうセシリアがいった瞬間、パーツ全てからビーム攻撃が放たれた。よく見ると銃口が付いていることにアルトは気がついた。正面のビームをISを下方向にロールさせ回避。左右から同時くるビームは急速上昇しかわしたが背後からのビームは若干反応が遅れて、右肩にダメージを喰らった。

——バリア貫通。実体ダメージ レベル低——

ISから情報が送られてくる。

（しまった……油断した。だかこのくらいなら！）

とアルトが悔やんでいるとセシリアから通信がはいる。

『いがかしら？わたくしのブルー・ティアーズ達は？これがわたくしのブルー・ティアーズの特殊装備ですわ！』

セシリアは『ブルー・ティアーズ』達をなでながらそう言った。

『そうか。ならオレからも良いことを教えてやるよ』

セシリアの脳に直接声が響いた。プライベートチャンネルだ。これは個人秘匿通信と呼ばれるもので直接相手の脳に語りかけるも

のである。

『？——なぜわざわざプライベートチャンネルを使用したのですか？直接言えればいいものを』

とセシリアが返事をしてきた。

『なーに、この試合は一夏も見てるからな。さすがに弱点を一夏にわざわざ教えてやるのもフェアじゃないからな』

とアルトはセシリアよりも上空に昇りながら答える。

『な、弱点ですって？フン？別に言っても構いませんわよ！』

『一夏をなめてるとひどい目にあうぞ？』

『逆にあわせてみせてほしいですわ』

『まあ今はオレとの戦いに集中しろ。それと弱点というかあれなんだがそのブル・ーティアーズとかいう自立稼動兵器とやらはお前が指示しないと動けないだろ？』

それを聞いた瞬間セシリアの表情が険しいものとなった。

（な、なんですって？一度見ただけで看破したというの！？）

「図星か？オルコット？」

アルトは核心をついたと自負していた。なぜならティアーズを囲にしてライフルで攻撃を仕掛ければさらにアルトのISはダメージを

受けていたはずだからだ。アルトは通常回線に戻して問い掛けた。

『それがわかったからといってどうなるのです。いきなさい！ティ
アーズたち！』

通常回線でセシリアが返答してからまたティアーズたちが動きだした。

「すごいですね、早乙女君。一度攻撃を喰らった後は全て攻撃をかわしていますね」

「さすがといった所だな」

管制室で見ていた織斑千冬と山田真耶の両教師は素直な感想を述べていた。

「さすがは織斑先生に一矢報いただけはありますね。ああ、でも先程プライベートチャンネルで何か話していたと思いますが何を話していたんでしょうね？」

と真耶は千冬に問い掛けた。すると千冬は

「おそらくは、ブルー・ティアーズの欠点だろう。アレはオルコットが命令しないと攻撃できない上にその感はオルコット自身攻撃が出来ないからな」

「な、なるほど。さすがですね」

「それにしても何を考えているのだろうな早乙女は。アイツ一度も

攻撃をしていない。今のオルコットくらいならもう撃墜されていてもおかしくはないはずだ」

千冬は本心でそう思っていた。一度戦ったことのある千冬はだからこそ今アルトが狙っていることがわからなかった。

（早乙女。見せてもらうぞ。お前がなにをしでかすかをな）

千冬は心の中でそう呟いた。

「すげえ……これがIS同士の戦いなんだな、箒」

「あ、ああ」

一夏と箒はピットのスクリーンで観戦していた。一夏の専用機はまだ届いていないので集中してアルトとセシリアの戦いを眺めていた。

（それにしても、アルトの奴。あんなに操縦上手いなんて……圧倒的だな。今の俺には参考にならねえ）

一夏はそう考えていた。箒も似たようなことを考えているだろう。2人共武道をかじっている身でなんとなく直感的に理解しているのだ。傍目からはセシリアが圧倒しているかのように見えるが、アルトはそれを軽くかわしている。

（だが、俺も戦い方次第で勝つことができるはずだ）

アルトが見せている可能性。それをさらに吸収するべくしっかりと

試合の行方を一夏は見ていた。

セシリアは焦っていた。どうして攻撃がいつも簡単にかわされるのか、どうして相手の男は攻撃してこないのか、全く理由がつかないからだ。

『あなた！どうして攻撃してこないのですか？』

セシリアは声を荒げながら通信をいれた。当然だ。この男はセシリアよりも戦闘に慣れている。おそらく簡単にセシリアを倒すことが出来る實力を持ちながら敢えてそれをしないアルトに対して怒りがわくのも当然だ。

アルトがまたもプライベートチャンネルで話しかけてきた。

『聞きたいことがあるからな』

『聞きたいことですって！？』

セシリアは《スターライトMK-？》を連射しながらアルトに対して返答した。

アルトはそれをスピードだけで右から左へと一気にかわしながらプライベートチャンネルで話を続ける。

『お前は どうしてそこまで男を差別するんだ？ISが使えないからって訳でもないだろう？』

『！？……そんなの貴方には関係ありませんわ！！』

セシリアは《ブルー・ティアーズ》を放ちながら答える。

『いいから答えろよ。両親が事故で亡くなったからか？』

『……！』

セシリアは《ブルー・ティアーズ》を4機同時にアルトに接近させながらこう返した。

『そんなこと……、決まっていますわ！男性が弱いからですわ！』

『弱い……だと？』

4機の《ブルー・ティアーズ》がXの字を描くようにアルトに接近してくる。至近距離から4発同時に打ち込むことを予想したアルトはひたすらティアーズたちとおっかけこをすることを決めた。ティアーズたちから凄スピードで逃げていく。

『そうですね！わたくしの父親は弱い人でした。父は、母の顔色を伺うばかり、さらにはISが発表されてからはますます父親の態度は弱くなっていきましたわ！そんな父を母は話すことすら嫌うようになっていた。そんな父の姿を見ながらすこしてきたわたくしには男は弱いとは思えませんわ。逆に母はいくつもの会社を経営し、成功を収めてきた強い人でしたわ。』

ティアーズのビームを連射させながら逃げるアルトを視線で追いながらセシリアは答えた。アルトはビームをISを回転させながら避け、ただ直線的に逃げるのではなく、多様な曲線を描きながら同じように猛スピードでティアーズから逃げていく。

『そして両親は事故で帰らぬ人となりましたわ。手元には両親がのこした遺産が残り、汚い大人たちから守るために、強くなると決めたのですわ！』

（なるほど。セシリア・オルコット……それがお前が演じている《役》か……）

アルトの脳裏には上官の言葉が浮かんた。

『……生きてりや、いろんな役が振りかかってくる。兄貴の役、隊長の役、兵士の役、恋人の役……。だが、それがすべてオレで、オレはそのすべてだ。自分だけが呪われた人間だ、みたいなことをぬかしてんじゃねえ！演じてない人間なんかいねんだよ！……だからよく、自分に問え。これから、何の、役を演じるのかを、な』

超時空シンデレラのランカの義兄、アルトが所属していたスカル小队隊長のオズマ・リーがアルトに向けた言葉だ。アルトはこれを聞いたからこそ、演じることにわだかまりを持たなくなった。この言葉のおかげでバジユラともわかりあえたといっても過言ではない。

（なら、教えてやる！セシリア・オルコット……お前の父親が何を思っで生きてきたのか……。父親の役になりきって教えてやる！）

そう言っでアルトは右腕にガンポットを展開して今まで執拗におつてきたティアーズたちをガンポットで打ち落とすべく振り返る。ティアーズは方向を変え、上下左右と展開し、俺を撃つべく向かってきたがアルトはすべて打ち落とす1秒後にティアーズは青い稲妻を走らせ爆発した。

『な……？』

セシリアは驚愕した。さらにアルトは言葉を続ける。

『セシリア・オルコット教えてやる。そしてお前が演じている役をおれが壊してやる。だから……』

(シェリル……歌^{げい}を借りるぜ)

アルトはガンポットを右肩に載せ、左半身を一步前に出し、左手をガンポットに添え、セシリアの方に視線を向けた。歌舞伎特有の女性のポーズだ。

「俺の舞^{げい}を見る！」

そういつてアルトはセシリアに攻撃を仕掛ける。アルトはマイクロミサイルランチャーから4発ミサイルを発射する。ミサイルは錐揉み状の軌道を描きセシリアに向かって飛翔した。セシリアは4発のミサイルに対して『スターライトmk-?』を打ち落とすべく発射したが、2発までは打ち落とせたものの残り2発は打ち落とせなかった。無秩序の軌道をミサイルが取っているため狙いが定まらなかったのだ。

「くっ！やっかいですわね。ならばこれで！」

セシリアは両腰にマウントされていた、2基の『ブルー・ティアーズ』の弾道型で打ち落とすことに成功したが、アルトはすでに別の場所へ移動していた。セシリアのハイパーセンサーが警告を鳴らす。

- - 警告！敵IS後方にて射撃体勢に移行 - -

「なんですって！？ぐっ！」

セシリアが後ろを向こうとした瞬間アルトがガンポットのトリガーを引く。アルトはミサイルを発射したと同時に急上昇し、セシリアの視界から外れ、超高速機動でセシリアの後方へ回ったのだ。ガンポットの弾丸が高速連射され、セシリアのシールドエネルギーを大幅に減らした。その瞬間、アルトから通信が入る。

「セシリア、聞いてくれ。お前の親父さんはなにも好きで母親の顔を伺ってたんじゃない。お前のためにも母親に頭を下げてでも生きていくと思っていたはずなんだ。オレには分かる！」

「な、何をいつていますの？」

「オレも親父が嫌いだったんだ。傲慢で自分のことしか考えてなくて……例えお前が親父さんのような人間が嫌いだったとしても、世の中全ての人間が親父さんのような人間だけじゃない。それにオレは今オレの親父がいつていたことも理解できる。今なら尊敬もできる。それに親父さんみたいな人も立派な人だと思っている。愛した女でも嫌いな奴でももしかつりと頭を下げられる。そういう人間は立派なんだ」

「だからどうだつていいますか？」

「だからお前も色々な人に目を向けてみる。そうだな、まずは一夏のことをよく見てみる。まだ出会って1週間足らずだが、アイツは強い人間だ。これから先、目を向けておいても絶対損はしない。そして色々な人を見た上で改めて親父さんのことを考えてみる。きっとそのときには親父さんに対する考えが変わっているはずさ」

「……あの方を？」

「ああ。アイツと戦う時にでもな。取り合えず、今回はオレが勝たせてもらうぜ。セシリア・オルコット。これがオレの舞^{げい}だ。」

猛スピードでアルトはセシリア浮いているアーマーの上に足を置きアーマー目掛けて上から下へとガンポットの銃弾で打ち抜いた。少しは感じるものがセシリアにはあったのか彼女は笑っていたように見えた。そして銃弾がセシリアに届いたその瞬間、決着をつけるブザーが鳴り響いた。

「試合終了。勝者――早乙女アルト」

第11話 射手座へサジタリウス VS セシリア戦（後書き）

歌舞伎のポーズ＝原作4話の模擬戦闘。

決着のシーン＝同上

なんだかんだテレビ版を交えた話になっています。

戦闘描写があまりにも少なく、心理描写が多くなってしまいました。
やっぱり板○サーカスを小説で描写するのはできませんね。

アルトの芸になっていたのか微妙だ。感想ありましたらお願いします
す

第12話 蠍座へスコピオン VS 一夏戦（前書き）

一夏対アルトの対決です！

第12話 蠍座へスコピオン V S 一夏戦

アルトがセシリアとの戦いを勝利した所で千冬はアルトに通信を
繋いだ。

『早乙女、機体の方は問題ないか？』

そう、このあとはアルトと一夏の対戦である。そのため千冬はアルトのISの状態を確認するために通信を入れたのだ。するとアルトは
「問題ありません。すぐにでもいけます」
と答えた。セシリアとの対戦では殆どダメージを受けていないので
すぐにでも戦える状態にある。

すると千冬は

『織斑のISが今到着した所だ。今から準備をさせてアリーナに向
かわせる。だからアリーナの中央で待機している』

と言って通信を終えた。

（一夏、見せてもらうぞおまえの戦い《げい》を……）

『織斑くん織斑くん織斑君！』

山田先生があわてふためいて一夏に駆け寄る。

「来ました！織斑くんの専用IS！」

「えっ？」

「織斑、すぐに準備しろ。アリーナの使用出来る時間は限られているからな。ぶつつけ本番でものにしろ」

「ええっ??」

「この程度の障害、男子たるもの簡単に乗り越えて見せる一夏」

「はい!？」

「「早く!」「」

「はい…」

山田先生、織斑先生、箒の声が重なった。

ごこんつ、と鈍い音がして、ピット搬入口が開く。斜めに噛み合うタイプの防壁扉は、重い駆動音を響かせながらゆっくりとその向こう側をさらしてゆく。

ーそこに、『白』がいたー

白。真っ白。飾り気のない無の色。眩しいほどの純白を纏ったISが、その装甲を開放して操縦者を待っていた。

「これが……」

「はい！織斑君の専用IS『白式』です！」

真っ白なそれ。無機質なそれはまるで一夏を待っていたかの様に

見えた。そう。こうなることをずっと前からまたのぞんでいたかのように一夏には感じられたのだ。

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットセッティングは実践でやれ。できなければ負けるだけだ。」

千冬に急かされた一夏は白式に手を触れた。

「あれ……？」

一夏は以前とは違う違和感を覚えた。

（馴染む。理解できる。これが何なのか。これが何のためにあるのか。――理解できる）

「背中を預けるように、ああそつだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化をする」

千冬に言われたとおりにISを装着する一夏。言葉通り白式に体を任せる。受け止めるような感覚がしてから、すぐに一夏の体に合わせて装甲が閉じた。

かしゅっ、かしゅっ、という空気を抜く音が響く。そして、生まれたときから我が身だったかのような一体感。融和するように、最初から一夏のためだけにあつらえたかのように、白式が、一夏と繋がる。

解像度を一気に上げたかのようなクリアな感覚が視界を中心に広がって、全身に行き渡る。各種センサーが告げてくる値はどれも普段からみているかのように一夏は理解できた。授業内容などほとんど理解していなかったにも関わらずだ。

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

「大丈夫、千冬姉。いける」

「そうか……一夏、早乙女は強いぞ？本物の戦士だ。しっかり戦ってこい。後1つだけ助言をしてやる。武器特性に気をつける。今は分からなくても構わん。だが、覚えておけ」

（千冬姉が心配してくれてる。だからこそ無様な戦いはできないな）

「わかった。ありがとう千冬姉」

千冬にお礼をいうと一夏は箒のほうに視線を向ける。そして箒の名前を呟く。

「箒」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

たった数秒の会話だが箒にはそれがとても遅しく見えた。そして一夏に言葉を投げ返す。

「あ……ああ。勝って来い」

その言葉に一夏は首肯で答えて、ピットのランチャーカタパルトに白式を接続する。クリアーな意識の裏側では白式が膨大な情報量フィッティングを処理していた。一夏の体に合わせて最適化処理を行う、その前段フォーマットの初期化を行っていた。今、こうしている間にも白式は表面装甲

を変化・形成させている。中身と外見の両方を一斉に書き換えている。

ともあれ、今はそれを気にしている場合ではないと一夏は思った。アリーナの中央に『友人』を待たせているのだから。

「織斑一夏、白式でるぞ！」

「おとつとと、アルト、待たせたな」

一夏は飛行に慣れていないので不安定ながらも停止してアルトと対峙する。

「かまわないさ。友人を待つくらいな。さあ、やろうか！」

アルトは微笑みながらアサルトブレードをその手に展開して答えた。アルトのISは遠中距離戦タイプのISだがあえて一夏の得意分野である接近戦を中心に仕掛けると決めていた。ずっと一夏は剣道の練習しかしていなかったと聞いているからだ。例え、一夏のISが中距離タイプだとしても。

それに一夏も笑顔で答える。

「おお！装備は……一個しかないんだが？」

白式に装備は何かと尋ねると『近接ブレード』と書かれた装備しか表示されない。片刃のブレード。渡り1・6メートルはある長大な『刀』が一夏の武器だった。そのみだ。それを聞いた瞬間、アルトは目を丸くして笑い出した。

「く、あははははは。一夏、それは拡張領域が全部その刀で一杯バスのロットなんだろうよ。ISは拡張領域の分、武器を使用できるからな……」

よかったじゃないか。ライフル1本とかよりはぜんぜんマシだろう？」

「笑うな！見てろ、これ1本で目にモノをみせてやるさ！」

一夏は展開した近接ブレード両手で持ち再度アルトと対峙する。

「それじゃあ、勝負だ、一夏！」

「おうー！」

アリーナ中央にて、激しく刀と刀がぶつかり合う。アルトは、自分のISのスラスターを全開にしつつ、これからどうやりあうかを考えていた。一夏は無意識なのか、口角をあげてニヤニヤ笑っている。なんだ、一夏楽しそうだなとアルトは思った。

「楽しそうだな？一夏？」

「ああ、これからは守られているだけじゃなく俺も誰かを守れるようになると考えたらちよつと嬉しくてな」

「そうか……だがもつと強くないとな」

アルトは鎧迫り合いをしながらも、頭部についているビーム機銃を倒し一夏に銃口を向けた。一夏は危険だと察知したのか鎧迫り合いをやめて後方へジャンプするように下がった。――警告音――。アルトのビーム機銃2基は一夏が下がるのを予想していたかのように一夏が停止した場所へ打ち込まれ、これを一夏は防ぐことができずダメージを負った。

「くっ、まだまだー！」

一夏には近接戦しか戦う方法がない。一夏は白式の状態を確認しつつ、どう斬りあうか考えた。接近して斬りあってもビームが飛んでくる、かといって他の攻撃方法はない。刀を握っている右手に力が入る。答えは1つしかない。後ろに引くのではなく前に進むしかないと思った。

「こないならこちらから行くぞ！一夏！」

アルトは肩と足のミサイルランチャーから4発のミサイルを先ほどのセシリア戦と同様に打ち出した。ミサイル2発は一直線に一夏のもとに、残りの2発はそれぞれ左右を大きく迂回してジグザグに一夏のもとへ向かっていく。一夏はこれを全力で振り切るべくスラスターを全開にして避けた。

しかしミサイルの機動は方向を変え獲物を見つけた鷹のように一夏を追った。

「そのミサイルは当たるか、壊れるまでお前を追い続けるぞ」

「自動追尾型のミサイルかよ！随分趣味が悪いな！アルト！」

「ほっとけ！それよりこれからどうする織斑くん？」

「ナゼに苗字？ええい！全て叩き落とす！」

一夏はミサイルを叩き落とすべく、背後から追ってくるミサイル2発を横一文字に切り付けた。ミサイルは青い閃光を放ち爆散した。さらに左右から来るミサイルも右、左と切り落とすすべてのミサイルが爆散した。

「やるじゃないか、一夏。戦闘経験皆無の素人の動きには見えない

ぞ。」

「ほつとけ！それよりアルト！続きをやるうぜ！次からは本気で行くからな！」

「ぬかせ。見せてみるよ一夏！」

そう言うってお互いスピードを上げて接近した。

「回避運動を取りつつ、接近！攻撃！」

「狙い撃つ！」

直線的な動きで接近し攻撃を曲線的にかわし、攻撃を行う、一夏。今度は距離を取ってガンポットを展開し射撃主体の攻撃で攻めるアルト。お互い楽しそうに戦闘していた。

「か、彼等は遊んでいるように見えるのですが……お、織斑先生？」
「ふん。早乙女は大方、一次移行を待ちながら戦っているのだろう。アイツは先程のオルコットとの戦いでも何かを待ちながら戦っている節があったからな。織斑の方は力を手に入れて浮かれているようだ。先程から奴の左手が開いたり閉じたりしている。あれはあいつの昔からのクセだ。あれがでるときは大抵簡単なミスをする。馬鹿者共が」

真耶がしどろもどろに千冬に尋ねて千冬はうんざりそうに答えた。

「へええええ……さすがご姉弟ですね。そんな細かいところまでわ

かるなんて」

なんとなくそういった真耶に対して、千冬は顔をほんのり紅くしてそっぽを向いた。

「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな……」

「あー。照れてるんですかー？照れてるんですねー？」

「……………」

その瞬間、真耶の頭にヘッドロックが炸裂した！

「いたたたた！」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「はっ、はい！わかりました！わかりましたから、離しーあうううー！」

ちなみにその様子は真耶が痛みに悶え暴れた際に通信機のスイッチが入ってしまい、アルトと一夏につつぬけだった。

官制室でそんなやり取りが行われているとは知らず、ピットでは二人の女子生徒が険しい顔で試合の写るモニターを眺めていた。一人は篠ノ乃箒。彼女は一夏の応援をしているわけだが声にだして応援したりしない。ただ胸の内に言葉を秘めながらじつーとモニターを覗き込んでいた。

（一夏……）

今日まで一夏の特訓相手をしていた筈だが、今一夏が苦戦しているのは剣道の練習しか課さなかった自分のせいでもあるのではないかとは思っている。しかし、彼女は一夏を信じている。一夏は私なんかよりずっと強い男なのだと。苦戦している一夏に思っことはただ一つしかない。

（勝て！一夏）

もう一つのピットではセシリア・オルコットがこちらも複雑な顔で戦っている両者を見ていた。

（どうしてあの方はあんなことを……）

セシリアがアルトから言われた言葉。『織斑一夏を見る』という言葉が頭の中で反芻されていた。それが何故か心に響いているのだ。

（次の試合はわたくしと織斑一夏。そこで見極めなくては……あの方が言っていた言葉の意味を）

先程アルトに破壊されたティアーズはすべて予備パーツをインストールしてある。そのため一夏とは万全の体制で戦いに臨むことができる。

（次こそは勝ってみせますわ！）

セシリアは決意を新たに観戦を続けた。

「なあ、一夏？さっき山田先生の変な叫びが聞こえなかったか？」

「ああ、聞こえたな。どうせ山田先生が千冬姉をからかってヘッドロックを喰らった……てところだろ？」

「一夏よくそこまで詳細にわかるな？もしかしてお前もシスコンか？」

「……」

「否定しないのかよ……！」

現在も試合中なのだが緊張感のない会話の応酬がなされていた。一夏の白式には殆どシールドエネルギーは残されておらず、逆にアルトのデュランダルは余力があるというよりほぼノーダメージだ。

「そろそろ決着をつけようか？アルト？」

「臨むところだ！一夏！」

一夏はアルトに向けて突進する。それは一夏の最後の策だった。これが失敗すれば確実に負ける……そう思うと額から汗が流れた。

――敵ISから射撃照準確認―― 白式から警告音。

「これ待っていたぜ！アルト！」

「何だと？」

一夏が猛スピードでアルトに突っ込み、孤を描きながら迫る8発のミサイルが来るのをバレルロールでかわしアルトの後方に回る。そしてさらにスピードを上げてアルトの背後を取る。そうしてる間に

もミサイルたちは一夏を追尾している。

「おまえ！？かなり無茶苦茶しやがって！」

「むかし何かの漫画で読んでな。やってみたが上手くいきそうだな、アルト？」

そう。一夏の取った策は追尾してくるミサイルをアルトに食らわせるといふなんとも無謀な策だった。一夏はアルトの両脇をがっしりと掴んで離さない。ISの力で全力で抑えた。デュランダルの中身の隠頭式連装ビーム砲はピッタリと一夏が抑えつけていて照準が付けられない。撃っても暴発してしまうだけ。しかしアルトは一夏に對して溜息をついた。

「一夏、お前俺のISの頭部になにかがついているか忘れたのか？」

そう、デュランダルの頭部には2基のビーム機銃が付いている。そこからビームを放ち、アルトは軽々とミサイルを撃墜して見せた。さらに足のミサイルランチャーからもミサイルを放ち相殺した。

「反則だろう？そんなの！」

一夏が悔しがっている隙にアルトはバーニアの噴射で一夏を吹き飛ばして背中の中身の隠頭式連装ビーム砲と頭部のビーム機銃から計4本のビームで一夏を打ち抜いた。それと同時に赤い爆炎が上がった。

「一夏っ……！」

モニターを見つめていた筈は思わず声をあげた
さつきまで騒いでいた千冬と真耶も、爆発と黒煙に埋まった画面
を真剣な面持ちで注視する。

「ーふん。機体に救われたな。馬鹿者め」

まだ微かに残っていた煙が晴れ、そしてその中心にはあの純白の機
体があった。

そう、真の姿でー。

「やっと終わったか……待ってたぞ、一夏」

一夏のISは先程までのダメージが消え、そこには中世の鎧を思わ
せるデザインに変わっている。一夏の白式は一次形成ファーストシフトを終えて、よ
うやく一夏の専用ISになったのだ。

そして変わったのは外見だけでなく、その武器もだ。

「ー近接特化ブレード『雪片式型』ー」

一夏は武器名を見ながら感慨深く笑った。『雪片』は千冬が振るっ
ていた専用ISの装備。その後継武装。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

と一夏は呟き思い返す。

（3年前も6年前もそして恐らく15年前もあの人は俺の姉だ。け
どそろそろ守られるだけの関係は終わりにしよう）

「これからは俺も俺の家族を守る。とりあえず千冬姉の名前を守る

！
」

一夏は『雪片式型』を両手で持ち、戦闘態勢に移行する。

アルトはそれを見て、通信を一夏と繋げる。

「一夏、最後は剣だけで勝負しよう……俺はこれからは一切射撃は使わない。だけど全力で行かせてもらっからな？」

「アルト……あくまで対等にか？」

「ああ！」

そして不破の聖剣デュランダルと白き騎士の世界最強の刀《白式》が再びぶつかり合う。

それはさながら彗星と流星が競い合うかのようにISアリーナを舞っていた。お互い離れずに高速で移動しながら動いているため遠目からはそう見えるのだ。

しかし、高速機動戦闘の勝負ではアルトに分があり、一夏は押されていた。

そんなとき、一夏の白式のウィンドウに表示が現れた。それには、
『ワンオフアビリティ 単一能力』『零落白夜』使用可能。 武器特性：バリア無効化攻撃
――

と表示されている。（確か千冬姉が武器特性に気をつけろって言うていたな）

だが迷っている暇は一夏にはなかった。既にシールドエネルギーを半分以上消耗していた。このままでは負けてしまう。

「アルト、次の一撃で決着をつけるぞ！」

「分かった。」

「行くぞ！白式！『零落白夜』発動！」

一夏の刀『雪片式型』の刀身が二つに別れてエネルギーの刃が出現した。

「凄いエネルギーをハイパーセンサーが感じている。まだそんな隠し玉を持っていたのか……うけてたつぜ。一夏！」

アルトもまたアサルトブレードの刀身にピンポイントバリアを展開した。そして決着を付けるべく二人は同時に前に飛び出した。

決着はついた。

2人のバリア無効化攻撃同士の打ち合いは一夏の勝利で幕を閉じた。一夏の『雪片式型』が少しだけ早くアルトのISに当たり急速にシールドエネルギーを削り0となった。かくいう一夏の方もシールドエネルギーの値が1となっていた。まさに薄氷の勝利である。

「一夏、見せてもらったよ。お前の強さ」

「アルト……いや、まぐれだよ。運が良かっただけさ」

「運も実力の内っていうだろ？ほら、ピットに戻るぞ」

「ああ！」

こうして一夏とアルトの試合は終了した。次は一夏とセシリアの対決だ。

（一夏、その強さをセシリア・オルコットに見せ付けてやれ）

とアルトは心の中でひっそりと呟いた。

第12話 蠍座へスコピオン VS 一夏戦（後書き）

拙い文章をいつも読んで下さってありがとうございます。次回、セシリアと一夏の対決とその後です。

第13話 決着！一夏VSセシリア（前書き）

一夏とセシリアの対決です。

第13話 決着！一夏VSセシリア

アルトと一夏は揃ってピットに戻り、ISを待機状態に戻す。アルトはイヤリング、一夏は白のガントレットに。すると出迎えたのは先程まで管制室にいた千冬、真耶、箒、そして反対側のピットにいるはずのセシリアだった。

「どうしたんですか？これから一夏とオルコットの対戦でしょう…」

アルトと一夏は千冬たちの元へ向かう。

「うむ、そのことだがアリーナの使用時間がギリギリだな。それに織斑の白式のシールドエネルギーの残量も殆どない。そのため、第3試合を明日の放課後に変更することになった。異論はないな？」

もう既に決定事項だといわんばかりの態度で一夏とアルトに向けて千冬は告げた。

「わかりました」

「はい、異論はありません」

「よし、それでは早乙女以外は解散。早乙女は少し話があるから残れ」

アルト以外、山田先生も含め皆その場から去っていった。残っているのは当然アルトと千冬だけだ。

「それでだ、まずは質問だ。どうして本気で戦闘を行わなかった？」

見抜かれていた。というよりはバレバレだったのだろう……千冬の戦いで使用した瞬間加速もミサイルも僅かにしか使用していない。アルトが全力で戦った千冬には今日の戦いが全力でないことがわかるし、それは千冬のISでの戦闘経験からも簡単にわかることだった。

「彼らの意思を知りたかった……からです」

アルトが自嘲気味に話始めた。これが自身のエゴであることはアルトも理解していた。だが目の前の大人には隠していても仕方がないと考えた。

「オレがいたフロンティア船団でオレが戦争をしていたことはご存知ですよ？」

「ああ」

「オレたちが戦っていたのはバジユラと呼ばれる、いわゆる異星生命体で……乱暴に言えば化け物たちだったんです。そいつらとオレたちは何も知らずに戦っていたんです。あいつらはオレたちの仲間を殺した化け物だ。だからバジユラを全滅させないとオレたちは生きていけないと勘違いしていたんです」

「勘違い……だと？」

「ええ、彼等はフォールド細菌と呼ばれる細菌でネットワークを構築していたんです。つまりはバジユラと呼ばれるすべての固体が1つにつながっていて、そのネットワークによってコミュニケーションを取る生物だったんです。だからオレたちは知らず知らずとは言えコミュニケーションを取っている生物を殺してきたんです」

アルトは辛そうに話を続ける。自分たちが殺してきた生物に心があればだれだって辛くなる。千冬には理解は出来ても実際に殺したことはないから上手く想像が出来なかった。

「フロンティア船団の上層部……一部の政治家たちなんですが、それを知りながらバジユラたちを殺してあるものを得るために、正確にはバジユラの体内にある貴重な石のためだけにバジユラたちの本星まで侵略に行ったんです。」

「あるものとは何だ？」

「先生も名前は知っています。フォールドクオーツですよ」

千冬は驚愕するしかなかった。あの宝石の価値なんてものは全く聞いてなかったし、それがISと融合を果たしたことは大丈夫だったのかとさえ、考えた。

「あれは以前お話した通りオレたちの間では『賢者の石』と呼ばれるくらい貴重な物だったんです。細かい話はまたいつかお話するので割愛しますが……それがあれば銀河どころか全宇宙を支配することが出来るってね」

「そのために戦争が起きたのか？」

「まあ、オレたちが理解したのは終戦前でしたからね。話を戻しますが、オレたちにはそんなこと出来るわけなかったのでフロンティア上層部と決別して戦争を止めるためにバジユラたちの惑星に向かったんです。オレたちにはまだ希望がありましたからね」

「希望？」

「フォールド細菌です。あれは人体に有毒な細菌なんです。2人だけオレ達の仲間にいたんです。体内に宿した人間です。2人は歌手でその歌声にはフォールド細菌に干渉する力があつたんです。その2人の歌声でバジュラとコミュニケーションを取り、わかりあうことが出来て戦争を終わらせることが出来たんです。上層部の野望は元々はギャラクシー船団っていう同じ移民船団の野望で横取りした形だつたんですけどね。上層部がどうなつたかは分かりませんが」

「そうか……」

「だから分かりあいたいと思っています。バジュラたちとも分かりあうことが出来たんだ。それを人間であるオレたちが出来ないわけないでしょう？」

「ふつ、確かにその通りだ」

千冬は静かに微笑みアルトの意見に賛同してくれた。

「だからまずは相手の事を知りたいと思って戦いました……戦いの中でしか分かりあえないのなら、オレは迷わず戦います。それに次、彼等と戦うことがあるなら全力で戦います。それが戦いの礼節だと思います」

「分かった。すまなかつたな、辛い話をさせてしまつて……」

千冬は申し訳なさそうな顔でアルトに伝えた。そういつてくれるだけでもアルトの心には込み上げてくるものがあつた。

「それと、今度は頼みなんだが……」

「はい？」

「一夏を鍛えてやってくれないか？」

千冬は先程よりもさらに申し訳なさそうな顔で告げた。身内のことだからだろうか、少し顔が紅いような気がした。

「オレが？ですか？」

「ああ、経験は申し分ないし、それに一夏自体それを望んでいる節があつてな。模擬戦だけでも構わない」

「それは構いませんが……織斑先生の方がいいと思いますが？」

千冬は第1世代機『暮桜』の操縦者で専用武器『雪片』と単一能力『零落白夜』で第1回モンド・グロッソで優勝するほどの操縦者だ。そして一夏のISも同じ武器・単一能力を使用する。確実に千冬が教えた方がいいのは誰がみてもわかることだ。

「教師が身内贔屓をする訳にはいかない」

なるほど……それなら仕方なく了承せざるを得ないだろう。

「分かりました。出来る範囲で頑張ります」

「ああ、頼む。それでは帰宅してくれ。時間を取らせてすまなかったな」

「いえ、それでは失礼します」

アルトは更衣室に向かったが千冬はその場に残っていた。

（あいつの強さが何なのか少し分かったような気がしたな）

そんな事を考えながら千冬は本日の模擬戦レポートと明日のアーリー申請をするために職員室へ向かった。

アルトが部屋に戻り、一夏と篠ノ乃を夕飯に誘うべく、部屋をノックしたが返事はなく、先に食堂に向かったかもしれないと思ったアルトは足を食堂に向けた。

相変わらず、名前も知らない他の生徒たちが好奇心旺盛な目でオレを見ていた。今日の試合で目立ってしまったから仕方のないことかもしれないな、と思っている。

すると食堂の前でったり、今日たたかったセシリア・オルコットと鉢合わせした。これは何のいたずらだ、と考えるしかなかったが、丁度話してみたかったので話しかけてみることにした。

「よう、オルコット、お前もいまから食事か？一緒にたべるか？」

「アルトさん……？ええ、是非」

「そうか……」

（ん？いま、オレのことを名前で読んだか？）

2人は食券を購入し、空いてる席に適当に座り、食事を開始す

る。ちなみにアルトは焼き鮭定食、セシリアはパスタとサラダのセットだ。その食べ方一つをとっても貴族のイメージにそぐわない。しっかりと演じているなとアルトは感心した。

「アルトさんは、倉持技研でテストパイロットをされる前は何をしていたのですか？とてもISの稼働時間が少ないとは思えない技量でしたので」

「軍人……かな。最近までは民間軍事会社の戦闘機の訓練生だった」

「まあ、戦闘機の？どうしてわざわざ軍人に？」

「空を飛びたかったからだな……空を飛ぶことがオレの夢みたいなものだったからな」

「空を？」

「ああ。今はISがあるから思う存分空を飛べるけどISがなかったらきつとまだ戦闘機のパイロット候補生をやっていたと思う」

アルトの言葉に偽りはないようにセシリアは感じていた。いや、実際は偽りだらけなのだが、そう感じさせないためにアルトが演技していたため、セシリアには真実だと思うより他なかった。

「それとオルコット、こないだはカツとなって悪かったな」

「いえ、アルトさんわたくしにも非がありましたのでお互い様ですわ。それとお願いなのですが……わたくしのことはセシリアと読んでくださいますか？」

「わかったよ、セシリア」

そう言ってアルトは笑顔でセシリアに言葉を返した。その笑顔はこの世で一番美しいとさえ思える笑顔だとセシリアはその時思ったことをアルトは知らない。

「ん……ゴホン。それと織斑さんにも伝えていただけますか？明日の勝負、お互いに全力を尽くしましょうと」

「分かった。それじゃあ、また明日。おやすみセシリア」

「おやすみなさい、アルトさん」

そういつて先に食堂を出たアルトは一夏に伝えてとつと眠りにつこうと考えたのだが一夏が見当たらず、携帯にメールを入れてすぐに眠りについた。

翌日の放課後、一夏とセシリアの対決が始まるうとしていた。アルトは一夏のピットにおり、

「まあ、頑張れ一夏。昨日メールした通り、今日のセシリアは本気だ。浮かれていると簡単にやられるぞ？」

「ああ、行ってくる！」

アリーナ中央でセシリアのブルー・ティアーズと一夏の白式が対峙する。

先に仕掛けたのはセシリアだった。

「踊りなさい！わたくしとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

セシリアは最初からティアーズたちを展開した。ただ相手に向かって展開するのではなく、セシリアのISの周囲に展開させ、固定砲台のようにそのビームを発射させた。『スターライトMK-?』と『ブルー・ティアーズ』のビームを交互、または連射し、一夏に攻撃パターンを読まれないよう攻撃していく。

昨日とは違う戦法を取られた一夏は戸惑っており、セシリアのビーム攻撃はじわじわと一夏のシールドエネルギーを削っていく。

「クソッ、このままじゃやられるのを待つだけだ」

（この程度ですか？織斑一夏……？）

「こうなったら、全力で突っ込むのみ！」

一夏は放たれるビームを全力でかわしつつ、前進する。一夏の飛行能力ではかわしきれないビームもあり、さらにシールドエネルギーを削っていくが、それでも一夏は前に進んだ。

「かかりましたわね！」

「何？」

腰のスカートアーマーに付いているティアーズの弾道型^{ミサイル}を完全に失念していた一夏は驚愕する。

「遅いですわ！」

「クッ！」

ブルー・ティアーズのミサイル2基は白い噴射煙を排煙口から伸ばし、さながらロケット花火のように、それでも狙いをつけ一夏を追う。

「また、ミサイルかよ！なら叩き落とす！」

一夏は『雪片式型』を持つ右手を握りしめ、ミサイルをそれぞれ、縦・横に一刀両断し、一夏に着弾するまえに爆発した。

「甘いすわ！」

しかしさらにセシリアはこれを読んでおり、一夏に向けて『スタライトMK-?』のビーム攻撃を放った。

一夏の態勢はまだミサイルを切り落とした態勢のままだったので、今からセシリアの攻撃をかわすことが出来ない。

（絶体絶命か……）

――単一能力『零落白夜』使用可能――

ISのウィンドウに表示された刹那、一夏は『零落白夜』を発動させ、セシリアのビーム攻撃を“斬って”防いだ。

「なんですって？」

「いける、これなら！やっぱり、俺の姉さんは最高の姉さんだ！」

一夏は攻撃を防いだあと一直線にセシリアに向かって加速する。これに対して、セシリアはビーム攻撃で打ち落とそうとするが、『零

落白夜』のエネルギー刃により防がれてしまう。

「セシリア！これで終わりだ！」

セシリアの懷に潜り込んだ一夏は下段から上段への逆袈裟払いを放った。

ーが、その斬撃が当たる直前に決着をつけるブザーが鳴り響いた。

「試合終了。勝者ーセシリア・オルコット」

「大馬鹿者」

「バカ」

「愚か者」

ピットに帰った一夏を待ち受けていたのは辛辣な言葉のみだった。

「よくもまあ持ち上げてくれたものだな。それでこの結果か、大馬鹿者」

「武器の特性を考えずむやみやたらにつかつかうなる。明日から、訓練に励め。暇があればISを展開しろ。いいな？」

「はい……」

もはや一夏には頷くしか道は残されていなかった。

「えっと、ISの使用にも規則があります。ちゃんと読んでおいてくださいね。はい、これ」

（『IS起動におけるルールブック』？何このタワー〇ペー〇？無理だー！）

一夏の顔がさらにどんより曇っていった。これから先の学園生活も心配になってくる。

「何にしても今日はこれでおしまいだ。帰って休め」

第13話 決着！一夏VSセシリア（後書き）

ご愛読ありがとうございます。まず一夏が勝利すると思っていた皆様には申し訳ありません（へ）後半の話の関係上、一夏には負けて頂かないといけなかったのが理由です。原作の零落白夜の使用で負けるのは同じで中身だけ少し変更しました。

感想・ご意見・ダメ出し等ありましたら気軽に申しつけ下さい。

第14話 クラス代表決定！水瓶座へアクエリアスとの出会い（前書き）

篤さんがKUUKIさんになってしまいました。ファンの皆様申し訳ありません。

第14話 クラス代表決定！水瓶座へアクエリアスとの出会い

翌日、朝のSHR。一夏にとってはありえないことが起きていた。

「では、1年1組代表は織斑一夏君に決定です。あ、一つながりでいい感じですね！」

「先生、質問です。」

「はい、織斑君」

「なぜ、全員1勝1敗で並んでいたはずなのに、なぜ、そんなふうになんと決まりましたか？みたいな感じで話が進んでいるのでしょうか？」

一夏には納得いつていないらしい。だが一夏の周りの空気は『既に決まっているのだからゴタゴタぬかすな』的な空気が漂っているのだが……。

「それは――」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

「あ、一夏悪い……オレも辞退させてもらった」

「ほう、2人とも理由を聞こうではないか？」

当然、一夏には納得がいかない様子で憤慨していた。一夏はクラス代表になりたくて戦ったわけではないのだから……。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかし、それは当然の事！

なにせ、わたくしセシリア・オルコットが相手だったのだから。仕方のない事ですわ!」

やたら上機嫌に腰に手を当てて話すセシリア。一昨日くらいまでの険悪なムードは何処へいったのかというくらい、テンションが高くなっている。一夏から見たら、あれだけ熱望していたクラス代表を辞退したこと自体が不思議で仕方がないのは言うまでもない。

その背景には、簡単に言えば一夏の事を認めたということがある。さらにぶっちゃけるとセシリアは一夏に好意を持ったという事だ。アルト以上に集中して望んだ一夏戦はIS稼働時間1時間にも満たない男にあわや負ける寸前まで追い詰められたということ、織斑一夏の強さとは一体なんなのか知りたいとさえ、思えるくらい考えを改めた事がセシリアのクラス代表辞退に繋がっているのだ。一夏は勿論、アルトさえ、そんな事情はわからないのだが……。

「それで、まあ、わたくしも大人げなかったことを反省しまして、“一夏さんに”クラス代表を譲ることにいたしましたわ。やはりIS操縦には実践がなによりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの」

一夏にしてみれば有難迷惑以外の何物でもないのだが……。

「それで、アルト。お前は？」

「……めんどくさいから」

「アルト!てめえ!」

「まあ、まで、一夏。オレは倉持のテストパイロットだ。放課後も倉持に顔を出さなきゃならない日もあるし、オレは何だかんだ忙

しいんだ。だから、頑張れ」

「ただやりたくないからだろ？」

「……そうとも言っな」

「アルト!!」

一夏はさらに憤慨し立ち上がったがそれは轟拳に寄って遮られた。織斑先生だ。彼女の放った拳は一夏の後頭部を直撃、一夏は机とのキスをするはめになった。

「いつてえ……何するんだよ!千冬姉」

続けて2撃目が入った。

「織斑先生だ。何度言えば解るんだ?貴様は」

「申し訳ありません。オリムラセンセイ……」

もはや謝るしか手段が残されていなかった。一夏は追い詰められるのが趣味なのだろうかとアルトは本気で思った。

そしてセシリアは言葉を続けた。

「コホン、それですね、わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差しあげればもうみるみるうちに成長を遂げー」

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。“私が”直接頼まれたからな」

何故か篠ノ乃まで立ち上がり、セシリアに反論していた。クラス

の生徒達が全員引いてしまふ程の殺気を放ちながら。

「あら、あなたはISランクCの篠ノ乃さん。Aのわたくしに何かごようかしら？」

「ら、ランクは関係ない！頼まれたのは私だ。い、一夏がどうしてもと懇願するからだ！」

おそらくしていない。昨日は一緒に寮に帰宅し、食事をしたがそんな話は聞いている限りではでていなかったはずだ……アルトはなんとなく確認しようと一夏の方に視線を向ける。首を横に振って否定していた。

「座れ、馬鹿ども」

すたすたと歩いて行ってセシリア、篠ノ乃の頭をぱしんと叩いた千冬が低い声で告げる。

「お前たちのランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣をつけようとするな」

さすがのセシリアも反論の余地はないらしい。何かいいたそうな顔をしていたが、結局言葉を飲み込んだ。

「代表候補生でも1から勉強してもらうつと前にいったらう。くだらん揉め事は10代の特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重しろ。クラス代表は織班一夏。異論はないな？」

「はい」

クラス全員……一夏以外の生徒全員が返事をした。

（頑張れ、一夏。お前の平穩を祈ってやるよ）

そう思ってる奴が1人くらいいてもいいだろうとアルトは心の底からそう思った。

「では、これよりISの基本的な飛行訓練を開始する。早乙女、織斑、オルコット試しに飛んで見せる」

4月下旬、生徒達がIS学園にも慣れ、実習の授業が増えてきた今日このごろ。1組は千冬の指導のもと飛行訓練を始める。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで1秒とかからないぞ」

それぞれ集中を始め、ISを展開した。

「よし、飛べ」

アルト、セシリア、一夏の順で飛行する。飛行するスピードも一夏が一番遅かった。

「何をやっている。スペック上の出力はブルー・ティーズより白式の方が上だぞ」

一夏は千冬から早速お叱りを受けてしまった。一夏の飛行はまだまだ未熟で空をとぶプロのアルトや、IS稼動時間の多いセシリアに比べると不安定に見える。

「自分の前方に角錐を展開するイメージって言われてもよくわからないんだよな」

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法をさがす方が建設的ですよ」

「そういわれてもなあ。大体、空を飛ぶこと自体が曖昧なんだよ。大体なんで浮いてるんだ？」

「説明しても構いませんが、長いですよ？反重力翼と流動波干涉の話になりますの」

「わかった。説明してくれなくていい」

「そう。残念ですわ。フッフ」

一夏は自分のぼやきながら首を横に振ってセシリアの説明を拒んだ。自分の知識では絶対わかりないということを理解してるからだ。

その一方でアルトは空を飛ぶことがまるで生き甲斐とでも言うような顔で一夏とセシリアの会話なんて耳に入らないくらい浮かれていた。

（何度飛んでも飽きない！この青い空、どこまでも続く地平線！やっぱり本物の空は最高だ！）

死んだ母が夢にまで見た空、父親に勘当されてまでアルトが望んだ本物の空、本物の雲、本物の空気、その一つ一つにアルトはこの星に降り立ってから約1ヶ月ずっと感動していた。

「おい、アルト、聞いているか？」

「んっ、どうした？」

「どうしたって、千冬姉が急降下と急停止をやってみせろってよ。セシリアはもう降りてるぜ？目標は地表から10センチだってさ」

「ああ……すまない」

「気にすんなよ」

完全に授業の事を忘れていたアルトは出席簿もしくは拳骨で殴られやしないかとヒヤヒヤしたが千冬からは今のところ何も言っていない。

「じゃあ、一夏先に行くぜ？」

「ああ」

そう言つてアルトは急降下を開始すし、地表10センチぴつたりで急停止する。アルトの降下、停止のイメージは可変戦闘機だ。バルキリーまずは、スロットルを一杯に入れてスラスターの推力を上げ、そのまま一気に目標にストレートに移動し、ガウオークに変形し、逆噴射の調節をして急停止、といった具合だ。これが一番イメージしやすくデュランダルもそれに応えてくれていた。

（上手いもんだな……セシリアも凄かったけど）

一夏には不思議で仕方がなかった。

知識はアルトの方があるのだがISの稼動時間はそれほど一夏とアルトに差はないはずだと。――実際は一夏とアルトには戦闘経験の差というものが明確に存在するのだが、一夏にはそんなことは分からない。

「織斑。何をぼけつとしている。早くしろ」

おっと危ない。千冬姉の授業は集中して取り組まないと痛い目を見てしまうと考えた一夏は急降下をするためのイメージをする。背中の翼状のロケットファイアーが噴出しているイメージを描く。それを傾けて一気に地上へ。

……白い流星が地面に落ちた。それがクラスメイト達の率直な感想だったらしい。後で聞いた話だ。一夏が急停止が出来ずに地面に突っ込んだのだ。

「馬鹿者、誰が地面に激突しろといった？グラウンドに穴をあけてどうする」

「……すみません」

一夏は姿勢制御をして上昇、穴の開いた地面から離れる。そんな一夏を心配してか箒とセシリアが一夏に話かける。最初はお互い一夏を心配していたのだがなぜかどんどん喧嘩腰の会話になっていった。一夏がアルトに視線を送るが2人して『さあ？』って顔をするしかなかった。

見兼ねた千冬が2人を押しのけ一夏の前に来て次の指令をだした。

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになっただろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はい」

「よし、では始めろ」

いつもどおりの姉弟のやり取りをした後、一夏は武装の展開を始め、数秒でその右腕には『雪片式型』が握られていた。

「遅い、0.5秒で出せるようになれ」

一夏は自分のイメージが上手くいって満足そうだったが一瞬で俯き加減になった。一週間で自在に展開可能になって満足していたのに一瞬で、しかも実姉に完全に否定されるのはつらい。さすがにこれにはクラスメイトもアルトも同情した。

「早乙女、オルコットおまえ達も武装を展開しろ」

「「はい」」

一夏のように数秒かかることなく一瞬光ったと思ったら既に2人も武器を展開していた。アルトはガンポットを、セシリアはスターライトMK-?をその手に握っていた。

「ふむ、さすがだな。しかしオルコット、そのポーズはやめろ。横に向かって銃身を展開して誰に向かって撃つ気だ。正面に展開しろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な」

「」

「直せ。いいな」

「――、……はい」

反論したそうな顔をセシリアはしていたが千冬が睨むだけで会話が終わる。どこの軍隊なんだかとアルトと一夏は顔を合わせてため息をついた。

「早乙女、オルコット。近接用の武装を展開しろ」

「はい」

「えっ。あつ、はい」

アルトが返事をしやや遅れてセシリアが返事をする。先程と同じ様に一瞬光ってアルトの左手にアサルトブレードが展開された。しかし、セシリアは未だ展開できておらず先程の一夏よりも遅い。

「まだか？」

「す、すぐです。――ああ、もう『インターセプター』！」

ようやく展開できたが名前を呼んで展開するのは初心者的手段らしく、代表候補生であるセシリアにとっては屈辱らしく、セシリアの顔が若干歪んでいた。

「……何秒かかっている。お前は実戦でも相手に待ってもらうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません。ですから、問題ありませんわ！」

「ほう。その素人2人に実戦で簡単に懷を許していた様に見えるが？」

「あ、あれは、その……」

セシリアの言葉の齒切れが悪い。これは八つ当たりされそうだなと男2人が考えているとプライベート・チャンネルで通信が入る。

『あなた方のせいですわよ！』

（（なんでだよ……））

『あなた方が懷に飛び込んでくるから』

（（仕方ないだろ……））

『責任を取っていただきますわ！』

（（何のだよ……））

男子生徒2人は案の定八つ当たりされた。声にだして応えてはいないが思った事は全く同じことだった。

「時間だな。今日の授業はこれまでだ。織斑。グラウンドを片付けておけよ」

「はい……」

アルトは颯爽と逃げだそうとしたが一夏に捕まってしまった。

「アルト……テツダツテクレマスヨネ？」

「何で片言なんだよ……わかったよ」

「さすが、アルト！ありがとう」

さつさと終わらせるべく土を探して入れていく。その途中で一夏が頼み事をしてきた。

「なあ、アルト。今日の放課後、飛行訓練したいんだけど教えてくれないか？お前が一番上手く飛べるみたいだしさ」

「ああ、そんなことが。良いぜ。ただし貸し1つな？」

「わかったよ……」

二人はなんとか穴を埋め終わり、教室に戻った。

放課後……アルトたちは第6アリーナにいた。アルトが昼休みに冬のところに行つて、

『一夏を鍛えるので第6アリーナの使用許可を下さい』

と言つたらすぐに許可が降りた。ちょうど他の生徒が使用する予定がなかったので丁度良かった。今この場にいるのはアルト、一夏、セシリアの3人だ。第6アリーナの訓練用IS使用許可を取っていないかったので今回はお休みだ。

「アルトさん、この第6アリーナは確か高速機動実習で使うアリーナですよ？わたくしたちまだそこまで授業は進んでませんし、高速機動パッケージもありませんが……？」

そう。このアリーナは中央タワーと繋がっていて高速起動戦闘が可能なアリーナだ。普段のアリーナよりは広い造りになっている。

「ああ、問題ない。別に高速機動戦闘をする訳じゃないしな。その前に一夏。お前瞬間加速イグニッションブーストは使えるか？」

「ああ。ちよつと前に千冬姉に教えてもらったけど……それがどうかしたのか？」

「セシリアは？」

「わたくしは遠・中距離射撃型なので覚えていませんが……」

「わかった。セシリア、これはあくまで一夏の飛行訓練だから無理して参加しなくても良い。必要ないと思ったら自分の特訓をして構わないからな」

「は、はい」

「よし、ならISを展開して始めるぞ。ISによる鬼ゴツコを！」

「……鬼ゴツコ？」

「ああ。一夏は雪片式型を使用せず通常飛行と瞬間加速イグニッションブーストを使って、セシリアは武器を使って構わない。一夏のサポートでもな。オレを捕まえたら終了だ。ちなみにオレも武器を使わない。ルールは理解

したか？」

「アルト……本気で鬼ゴツコを？」

「もちろんだ。一夏お前に武器を使わせないのはすぐにガス欠になるからだ。ちなみにオレも瞬時加速を使用するからな。本気でやらないと捕まえられるぞ」

一夏とセシリアは余り納得がいていないようだったが渋々用意を始める。本当に鬼ゴツコなんて遊びで訓練になるのかと疑問に思っているようだ。

「10秒後に開始するぞ。いいな2人共？」

「お、おう」

「は、はい」

「3・2・1・0……鬼ゴツコの開始だ」

一夏は上昇して逃げるアルトを通常飛行で追った。けれども、一夏とアルトの差は開くばかりだ。アルトはタワーの頂上を目指して飛行している。

「クソ、なんて加速だよ！瞬時加速を使ってるわけでもないのに！」

「一夏、しっかりとついて来い！俺のケツから離れるなよ！」

「わかってるよ！すぐに捕まえてやる」

「その意気だ！」

アルトはタワーの頂上付近に着くとインメルマントーン（縦方向のUターン）を使用し背面で一夏とすれ違う。

「一夏、そこで急停止しないとオレにおいつけなくなるぞ！」

「わかってるよ！」

一夏は完全とは言えないが急停止を行い、振り向いてアルトを追う。二人は上空でタワーの周りをぐるぐると回り、アルトは引き離すべくタワー下部へと向かう。

しかし、下ではセシリアがスターライトMK-?を構えて待ち伏せしていた。

「お待ちしてましたわ。アルトさん。狙い撃ちですわ！」

スターライトMK-?からアルトに向けて4連続でビームを放った。

これをアルトは連続のループでかわし、セシリアの前にでる。そして背部の翼に付いているノズルを進行方向と逆方向に回転させ急停止してセシリアの上を飛び越え抜き去った。

「残念だったな？セシリア。このスピードのオレに攻撃を当てられないなら、これから先、オレには勝てなくなるぞ？」

「余りなめてもらっては困りますわ！」

セシリアのフィンアーマーから放たれたティアーズたちはアル

トを追い掛ける。一夏はセシリアに通信を入れる。

「セシリア、お前はブルーティアーズでアルトを牽制してくれ。その隙に俺が瞬時加速で捕まえる。」

「わかりましたわ。必ずアルトさんを捕まえてくださいね。ティアーズ達！行きなさい！」

「任せろ！セシリア！」

アルトを追い掛けていた一夏が少し遅れてセシリアの元に到着し、再度追い掛け始める。

アルトはセシリアのティアーズの攻撃を楽々とかわしていたが、ハイパーセンサーがアルトの背後に回っていた一夏の存在を警告した。

「もらったっ！」

「甘い！」

背後から瞬時加速を使用して一夏が鬼を捕まえるべく突進してきたが、アルトはティアーズの間を瞬時加速ですり抜けて回避した。突進してきた一夏はさすがに急停止が出来ずに、前のめりに倒れてしまった。

「ちくしょう……あのスピードでさらに瞬時加速でスピードが上がるのかよ」

「一夏、お前の動きは直線的すぎるんだ。雪片式型しか装備がない

お前はいかに被弾せずに相手の懷に飛び込むかが鍵になる。瞬時加速も読まれたら避けられてしまうし、お前の場合多様すればすぐにシールドエネルギーが空になる」

「悔しいがその通りだな……」

「ただセシリアと協力してオレを捕まえるってのはいいことだ。自分の未熟さを理解してるってことだからな……さあ続けようぜ！セシリアと相談して良く考えて動くことだな！」

「ああ！今度こそ！行こうセシリア！」

「はいですわ！」

結果から言うと一夏とセシリアはアルトを捕まえることが出来なかった。アルトの変幻自在の動きについていけず、瞬時加速の使いすぎで一夏のエネルギー切れで鬼ゴッコは終了した。それでも燃費最悪の白式で約1時間強ずっと鬼ゴッコが出来たのだからマシである。

「畜生、結局2人ががりでも捕まえることが出来なかった！」

「ええ、完敗ですわ……」

「おいおい、そんなにへこむ必要はないだろう？特に一夏は通常飛行はやる前より良くなったぞ。それにセシリアも良いサポートだったよ。後はどれだけ戦闘経験を積むかだな」

「そうか？」

「実戦に勝る修業はないんだよ。何度も失敗して力つてのはつくもんだろ？オレも最初は誰かの後ろについていくだけでやっとだったからな。最初から最強なんてのは稀だぞ？」

「んー練習頑張るか。クラス対抗戦もあるしな」

「そ、そうですね。わたくしも特訓のお相手をしますわ！ぜ、ぜひ！」

「ん、そうかありがとうな、セシリア」

「いえ……当然のことを申し上げているだけですわ」

セシリアは顔を真っ赤にして一夏と話していた。仲睦まじいことで……

現在、夕食後の自由時間なのだが、クラスの皆は『織斑一夏クラス代表就任パーティー』なるものを企画し食堂で開いていた。アルトは新聞部副部長なる薫子さんと軽く挨拶を交わして、トイレに行くと言ってパーティーを抜け出していた。現在アルトは寮の屋上で寝転びながら空を見上げていた。本物の星空を見ながらフロンティアのことを思い出していた。

「フロンティアの皆元気かな……シェリル、ランカ……」

アルトは寂しそうな顔で遠くを見つめていた。

「随分遠いところまで来ちまったな……」

決して今の生活に不満があるわけではない。織斑一夏という友人ができた事や、ISに出会ったこと、それらとの出会い自体は幸運なことだ。しかし、故郷を忘れることなどアルトには出来る訳もなく、まして初めて愛した女性が今元気に生きているのかすらわからない事がアルトを不安にさせていた。

「また生きてあいつらに会える日がいつかくるのか？」

「生き別れた人でもいるのかな？早乙女アルト君？」

「誰だ！？」

アルトは立ち上がって辺りを見回した。よく見ると屋上の入口に人影が見えた。青い髪で2年のリボンをしている女性だ。青い髪――どこかで会ったことがあるような気がしたが思い出せないので考えることを辞め問いたです。

「誰だ、あんたは？」

「私の名前は更識盾無。君たち生徒の長だよ、早乙女アルト君」

更識盾無は魅力的な笑顔で自己紹介をしてきた。これが、アルトとIS学園生徒会長との初顔合わせだった。

第14話 クラス代表決定！水瓶座へアクエリ阿斯との出会い（後書き）

ようやくヒロインの一角生徒会長更識盾無を出すことができました。
ちよつと早すぎるかな？

飛行訓練といったらアルトでしょう。なんとなく物語を作る前から
鬼ゴツコはやってみたいと思っていたのでやってみました。

アルトのキャラが少しずつ違ってきてしまってるような気がします
ので感想・ご意見のある方何時でもお待ちしております。

タイトルはインパクトあるほうがいいと思います今回タイトルが2つに
なっています。あまり変わらないかも。

第15話 転校生はセカンド幼なじみ (前書き)

書き方変更しました。これで最後です。これからはこの書き方で統一します。独自解釈及びオリキャラが出ます。ご了承ください。

第15話 転校生はセカンド幼なじみ

「織斑君、早乙女君、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

『織斑一夏クラス代表就任パーティ』とアルトが生徒会長更織楯無と出会った次の日の朝、クラスの席につくなりクラスメイトから話し掛けられた。入学から数週間、昨日のパーティーもあり、それなりに女子とも会話ができるようになっていた。ちなみに更織生徒会長とやらは、

『それじゃまた会いましょう。クラス対抗戦が終わった頃にでも。じゃあね、早乙女アルト君』

といつてすぐに何処かに言ってしまった。特に会話もせず一方的な自己紹介だけで終わったので誰かに話す必要もないだろうと思いいアルトは一夏にも話さなかった。

クラスメイトとの会話に戻る。4月のこの時期に入学ではなく転入……IS学園の転入試験は厳しくさらには国家の推薦がないと試験すら受けられない。ということは――。

「そう、何でも中国の代表候補生なんだってさ」
「つてことになる。IS学園に入学する生徒で国家から推薦を受けれるのは代表候補生くらいなものだ。」

その噂を聞き付けてか、一夏の周りには箒、セシリアを中心に話の輪が出来ていた。

「あら、わたくしの存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら」

とセシリアが、

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐ程のことではあるまい」

と箒が続けて会話に入ってきた。思春期真っ最中の女子、噂話が好きなのは何処の文化圏でも変わらないということなのだろうか？

そして話は来月のクラス対抗戦へと変わっていった。クラス対抗戦とは文字通りクラス代表によるリーグマッチで、その目的は本

格的なIS学習が始まる前のスタート時点での実力指標を計るとい
うものだ。

そしてこの対抗戦、クラス単位での交流及びクラスの団結を高
めるというイベント的側面を持っており、一位のクラスには優勝商
品として学食デザートの半年フリーパスが配られる。女子生徒達は
これの獲得のため闘志を燃やしている。まあ戦うのはクラス代表で
ある一夏なのだが。

「織斑君、頑張つてね」

「フリーパスのためにもね」

「今のところ専用機を持つているのは1組と4組だけだから、余裕
だよ」

女子生徒たちは一夏にひたすらプレッシャーをかけている。君
達、専用機が量産機に勝てないって決め付けるのはだめだぞ。「一
」その情報、古いよ」

とドアのところにいた誰かが喋った。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝で
きないから」

その女は腕を組み、片膝を立てドアによりかかりながら喋っていた。
すると一夏は懐かしいものを発見したといわんばかりに、

「鈴……？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、ファンリンイン鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわ
け」

「何格好付けているんだ？すげえ似合わないぞ？」

「んなつ……？なんてこと言うのよ、アンタは？」

一夏……お前の知り合いはIS関係者ばかりなのか？とツツコミを
入りたい気分だよ。まあ姉が姉で幼なじみが幼なじみだから仕方な
いのかもしれないがな。おっ、噂をすれば……。

「おい」

「なによ！？」

えっと、鳳だっけ？それはアウトだろ。

聞き返した鳳に伝家の宝刀『出席簿アタック』が炸裂した。そう、織斑先生の登場である。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん」

「織斑先生と呼べ。さつさと戻れ、そして入口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません」

ビクビクしながらドアから離れた。一夏と知り合いなんだから先生とも知り合いなのか？

「またあとでくるからね！逃げないでよ！一夏！」

「さつさと戻れ」

「は、はい！」

鬼教官織斑千冬によって鳳鈴音はその姿に戦慄しながら自分のクラスに戻っていった。

「……っていうか鈴の奴、IS操縦者だったのか。初めて知った」

一夏がそう呟くと例の如く、女性武士と英国淑女様が一夏を包囲する。

「……一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん！？あの子とはどういう関係で！？」

その他クラスメイトから質問集中砲火。29名全員アウト（ヘーポー風に）っていう声がどこから響いて、鬼が得物を振り上げる。バシンバシンバシンバシン！

その様はまるでフロンティアにあるゲームセンターのモグラ叩き（統合戦争時代のレアモノ）のようだったとアルトは語った。

「席に着け。馬鹿者ども」

出席簿でクラス全部を静めた千冬だった

（しかし何で一夏の知り合いってだけであんなに騒ぐんだ？）

アルトには理解不能な現象らしい。後にこのクラスの男2人は鈍感王子（一夏）と鈍感姫と呼ばれたとか呼ばれなかったとか。

そして今日も授業が始まる。午前中、箒とセシリアがずーっと呆けた態度で授業に望んでいたため担任、副担任に制裁、注意を頻

発に受けていた。

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

昼休み開口一番に一夏に文句をいいにきた篤とセシリアがまくし立てる。

「なんでだよ……」

一夏は本気で困っていた。このままでは昼食の時間が少なくなると危惧したアルトが子供を諫めるように拳骨で痛くない程度で女子2人の頭を小突いた。

「あのなあ、2人とも。何を考えてたか知らないが鬼教官の前でぼーっとしてる奴が悪いんだよ」

「早乙女！邪魔をするな！」

「アルトさん！ここは退けませんわ！」

アルトがたしなめようとしたら一蹴されたよ。

「そうかよ。ならオレはメシにいくぞ。昼飯食べるのが遅くなって鬼教官に叩かれるのはゴメンだからな。一夏は？」

「ああ、オレも行くよ。ほら話はメシ食いながら聞くから、とりあえず学食行こうぜ」

「む……ま、まあお前がそういうのならいいだろう」

「そ、そうですわね、行つて差し上げないこともないですわよ」

（なんだ……この妙な敗北感は）

一夏の言うことには素直に聞いた女子2人をみてなんとなく一夏を殴ってみた。

「い、いてっ！何すんだよ！」

「なんとなく……だ」

「なんだよ……それ」

「待つてたわよ、一夏！」

学食に到着していきなり噂の転校生鳳鈴音が一夏に話かけてきた。手に持つてるのはお盆の上に乗せたラーメン。昼休みに入ってからここですつと一夏を待つていたようだ。少し麺が伸び始めている。

「まあ、とりあえずそこどいてくれ。食券だせないし、普通に通行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

「ラーメン伸びるぞ」

「わ、わかってるわよ！大体アンタを待つていたんでしょうが！なんで早くこないのよ！」

（一夏の周りつてやかましい女しかないよな……。久々にラーメンにしよう。娘々の銀河ラーメンとどっちがうまいかな）

アルトが食券を購入している最中も箒とセシリアが一夏を睨み付けている。そんなことお構いなしに一夏と鳳が話を続ける。「鈴、お前いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにISつかってるのよ。ニュースで見たときビックリしたじゃない」

質問攻めをする一夏を見て遂に箒、セシリアが行動に移した。

「一夏、そろそろどういう関係か教えて欲しいのだが」

「そうですわ！一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってらっしゃるの！？」

2人は随分と刺々しい視線を一夏に送りながら嫌味ばく質問をしている。他の生徒達も気になっているようだ。

「べ、べつに付き合ってるわけじゃ……」「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼なじみだよ」

その瞬間、鳳のローキックが一夏のふくらはぎを直撃した。
「ぐっつ！」

「フン！」

鳳がそっぽを向いてしまった。一夏はなんで蹴られたのか理解していない。

（というより、篠ノ乃とセシリアは一夏のことが好きなのか？ いや……いつも喧嘩してるからそんなことはないか）

アルトは的ハズレな意見を思い浮かべながらラーメンを啜っている。
インセンティブ・ブレイ・プリンセス
鈍感姫は伊達ではなかった。

「えっと、だから…… 箒が転校した後、入れ替わりに転入して来たのが鈴なんだ。いくなればそう、箒は（ファースト幼なじみ）で、鈴は（セカンド幼なじみ）ってところか？」

一夏の2人への説明はまだ続いていた。ファースト・セカンド幼なじみって何だよという声が周りから発せられるが一夏説明できたことが満足そうだった。

「ふうん、そうなんだ。改めて鳳鈴音。これかれよろしくね」

「篠ノ乃箒だ。こちらこそよろしく」

二人は握手を交わす。内心お互い火花を散らせながら攻防が行われていたことを一夏は知らない。

「ンンンッ！ わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生鳳鈴音さん？」

「……誰？」

「なっ！？ わ、わたくしはイギリス代表候補生のセシリア・オルコットですよ！？ まさかご存知ないの？」

「うん、あたし他の国とか興味ないし」

こちらでも火花を散らせて睨み合っている。女性が強いのも考えものだなとアルトがスープを飲みながら感じていると、

「それで、その青い髪のロングの女は？ 男子の制服着てるけどなんだ？」

「……あ……」

一夏、セシリア、箒を筆頭に周りのクラスメイトも合わせてしまったという顔をした。

「……早乙女アルト。オレは男だ……」

アルトの機嫌が一気に悪くなった。アルトの顔は学年1位の美貌といっても差し支えない顔をしているため、1年1組以外の生徒たちは皆揃って『女の子』と聞いてくるのだがその度にキレている。さすがにその事に慣れ、怒鳴ることは少なくなっただがこういう時のアルトは危険だと一夏達は直感で理解していた。そんなことを知らない鈴は、

「うつそ!? 男? そんなお姫様みたいな顔をして?」

「姫って呼ぶな!!」

「そんなに怒らないでよ。ひゅめ?」

「デメエ!」

とアルトをからかっていた。一発殴りたい衝動に刈られていたアルトだが、流石に女性を殴ることは出来ずに我慢していた。

「……一夏。たまたま今日は篠ノ乃用に打鉄うちがねを借りてあるんだがお前が装着しろ。ISのパワーを切ってアリーナ10周な」

「ヒイヒイヒイヒイ!」

アルトの呟きに一夏は泡を吹いて倒れそうになっていた。これ以上アルトを怒らせたら生命の危険を感じる一夏は鈴に話題を変えるぞとジェスチャーを送った。

「そ、そういえば昔良く鈴の実家の中華料理屋で良く食べさせてもらってたよな? 親父さん元気か? まあ、あの人こそ病気とは無縁だよな」

「あ……うん。元氣ーだと思っ」

その微妙な表情と雰囲気で一夏は何か疑問に思ったようだったが鈴は話題をそらす。「そ、それよりさ、今日の放課後って時間あるよね? あるよね?」

「ーあいにくだが、一夏は私とISの特訓をするのだ。放課後は埋まっている」

確かにその通りではあるのだが筈が決めたような話になっていることに一夏は戸惑いを覚えたような顔になっている。

「その通りですわ。クラス対抗戦にむけて特訓が必要ですもの。特にわたくしは専用機持ちですから？ええ、一夏さんの特訓には欠かせない存在ですから」

（お前達一夏より自分の訓練の心配をしろよ）

アルトの悲痛なツツコミも届くわけなく一夏の周りはガヤガヤ言い合っている。

「じゃあそれが終わったらいくから空けておいてね。じゃあね、一夏、姫」

「姫って言うなっついていったる！」

そういつて鈴は食堂からでていった。

「一夏……」

「何だよ、アルト？」

「今日オレ倉持技研にいつてくるからお前20周しとけ。後で篠ノ乃とセシリアに確認するからな」

「ガアアアアアアア！アルトの鬼！」

「黙れ！精々、2人にしごかれる！」

ここに一夏の全身筋肉痛が決定した。

放課後、タクシーでアルトは倉持技研に来ていた。ちなみにタクシー代は自分もちだ。ヴァルキュリア・デュランダルデータを開示しているのでそれに見合った給料を倉持から貰っているからだ。ちなみに金額は代表候補生が支給される補助金と同じくらいだ。ちなみにデータを開示といってもコアと4ヶ所のフォールドクォーツに至ってはブラックボックスとなっているので手が出せないらしい。今日倉持技研に来たのはデュランダルの換装^{パッケージ}装備の製作の進行確認をするためだ。5月には届けると言っただけ何の音沙汰もないので自ら確認にきたのだ。

しかし、正直余り来たくない場所だ。なんせ担当者が変人だから

らだ。話をしていると調子が狂うアルトだった。
ともかくラボに向かうアルトだった。

「ちわー。フローラ博士いますか？」

「あらあら、早乙女アルト様ではございませんか？」

「出た……」

「わたしの名前を読んでおいてそれはないんでございませんでしょ
うか？」

「あんたがちゃんと日本語喋ってくれるなら態度を改める」

「失礼極まりませんことですわ」

この女性は南部フローラ博士。イタリアかどこかの人と日本人の
ハーフらしい。自己紹介でそう言われたのでフローラ博士と読んで
いる。

フローラ博士は火器管制システムや武装開発の権威でいわゆる
天才という奴だ。篠ノ乃東博士には敵わないらしいが16ヶ国語を
話し、12の博士号をとった32歳独身。しかし見た目は18歳く
らいと異様に若く見える。

何が苦手ってこの人の喋り方がアルトには耳障りで仕方ないの
で苦手なのである。

「それで本日のご用件はなんでございましたか？」

「換装装備の確認なんだが……電話でも話たる？」

「そうでございましたか？それではお茶をいれますのでこちらにど
うぞ」

話が噛み合わない。これが天才と呼ばれているのだからさらにわ
からない。

「それで、換装装備はどのくらいまで進んでるんだ？5月には完成
するっていつてたよな？」

アルトが換装装備を熱望するのはデュランダルにはファイター・

ガウオークといった変形機構がない。そのためバルキリーの戦い方に慣れてしまってるアルトには実は戦い辛い。その差を換装装備で埋めようと考えているのだ。本当の戦いには行きたくはないし、空を戦争で汚したくはないが、もし何かあつてからでは遅いからだ。

「ええと、ハッキリ申しますとまだ何も出来ていませんわよ？」

「は？」

「ですから、何も出来上がってはいませんでございますわ。今からですと7月頃になりますですね」

「どうしてだ？」

「白式の完成、データ収集を急いだためですわ。アレのおかげで何人か倒れてしまい人手が足りないのです。さらには打鉄式式の方にも人様を割いていますので尚更でございますわ」

紅茶をすすりながらフローラ博士は言う。「一夏の白式か……まあ理由が分かったから仕方ないとは思うが。ん？打鉄式式？」「はい。日本のIS代表候補生更織簪様の専用ISでございますわ。打鉄の後継機で第2世代機ではありますが第3世代の技術を用いて建造中のIS。これが中々進展しないので困っているのです。でございますわよ（更織？昨日会った生徒会長もそんな名前だったな。偶然か？）」

「第3世代の技術ってなんだ？」

「はい。あなた様も使用しているマルチロックオンシステムでございますわよ」

「ー？ならオレのデータを回してやればいいだろ？そうすれば完成も早まるだろ？」

「あなた様の言う通りなんです……デュランダル様のデータでは性能が良すぎて参考にならないのでございますわよ。あなた様のはAIが非常に良いのであれ程のロックオンが可能で。式式は最高48発までですしAIも打鉄と共通の物を使用しますのでAIの調整が不可欠なのですが。さらにはご自身で完成させると言い張っておりますので……」

「自分でISを作るって？」

「はい……理由はおっしゃってはいただけませんでございましたのでわかりませんが」

「そうか。まあ人にはそれぞれ理由があるからな。取り合えずフロ―ラ博士、デュランダルロックオンシステムのデータをその更織さんに送ってやれ。デュランダルだとわからないようにしてな。多少は参考になるだろ？」

「はあ、良いのですか？」

「良いも悪いもないさ。近い技術を使っているんだ。そのくらい構わないさ。ただ悪用するとなれば話は別だが」

「畏まりましたでございますわ」

「それで換装装備の件だが……」

かれこれ2時間程話合いをしてアルトは帰路についた。

アルトが倉持技研から戻り寮の自分の部屋の前に着いた時に隣の一夏たちの部屋から大声が聞こえてきた。

「最ッ低！女の子との約束を忘れるなんて、男の風上にも置けないヤツツ！犬に噛まれて死ね！！」

と転校生鳳鈴音がボストンバッグを持って寮の廊下を走っていった。
一夏の部屋を覗き込むと頬を真っ赤に腫らした一夏とご立腹の箒の姿が見える。

「一夏」

「おう、なんだ箒？」

「馬に蹴られて死ね」

箒はそれだけ言って布団に潜ってしまった。

「一夏何があつた？」

「よくわからんが、鈴を怒らせてしまったらしい」

「早く謝っておけよ？」

「ああ」

一夏も分かっていなかったようだが起きていても仕方がないと思つたのか布団に入ってしまった。

しかし先程の鈴が泣いていたのがアルトには分かってしまった。鈴のほんの少しかすれた声、走り方からも泣いていることは容易に分かった。役者でもあつたアルトには顔が見えなくても動きでなんとなく理解してしまうのだ。

「ほうつておくわけにもいかないか……」

アルトは鈴が走つていった方向に足を向けた。

鈴は屋上で体育座りで泣いていた。余程ショックだったのかまだ泣き続けている。「おい、鳳^{ファン}」

アルトが呼び掛けると目を擦りながら鈴は顔をアルトに向けた。

「なんだ姫か……一夏かと思つた」「悪かつたな。それと姫はやめる。何があつた？」

「別に……ただの喧嘩よ」

そう言つて鈴はアルトから目を逸らした。

「ただの喧嘩でそこまで泣くのか？お前は？約束を一夏に忘れられて悔しいから泣いてるんだろ？」

「なんだ、聞いてるじゃない……」

「内容までは知らないが、あれだけ大きな声で叫べば聞こえるさ」

アルトは鈴の隣に腰を降ろした。

「なあ、鳳。お前一夏の事が好きなのか？」

「は、は、はい？なんでそ、それを？」

「そうなのか？あてずっぽうで聞いたんだがまさか、肯定されるとは思つていなかったが」

本当にアルト自身は分かっていなかった。今、鳳鈴音という少女が何をどう考えて悲しんでいるのか、“その役”に成り切つて考えただけに過ぎないのだが。

「そうか……人を好きになるっていうのは大変だよな」

「なによ……アンタ好きな娘なんているの？」

「いる……いや、いたかな。今は会うことが出来ないし、これから先会えるかもわからない女だな」

「えっ？」

鈴は困惑していた。アルトの好きな娘はどこか遠い所に行ってしまったのか、それとももう本当に“居ない”のか分からないからだ。「オレの話で悪いが、そいつとは……不思議な縁でな。ガキの頃一度出会って、成長してまた出会った。良い女だった。でも愛してるさえ言えなかった。いや……言ったつもりだが届いていたか分からないって方が正しいな。そしてオレたちは離れ離れになった……」

鈴は黙って話を聞いていた。アルトの顔が以前の自分と同じ顔になっていたからだ。一夏と離れ離れになった時の自分の顔と。

「だからお前たちにはそうなって欲しくはないと思ってる。それが誰であつてもな。だからもう一度一夏と話して見る。素直な自分をさらけ出せ。お互いをわかりあうっていうのは簡単なようで難しい。だからこそわかりあう努力をしなくてはいけないんだ。オレ達人間は」

鈴は真面目な顔で頷いた。

「んーわかった。やってみるけど……出来るかな？アタシに」

その時、アルトの脳裏にはある少女の顔がうかんだ。グリフィスパークの丘で歌っていた少女に。アルトはその少女に伝えた言葉をもう一度言う。

「無理だな」

「えっ!？」

「そうやってできたらとかできるかなっていている内はな……絶対にな!」

「もう、姫の意地悪!」

「だから姫っていうなって何度言えばー」

急に鈴がアルトの肩にもたれ掛かってきた。

「お、おい鳳！」

「素直になれっていったのはアンタでしょ！？こうしたいからしたのよ！文句あるならぶっ飛ばすわよ？それと今度からアタシの事は鈴と呼びなさい！良いわね？」

「たく……分かったよ鈴、好きにしろよ。ただし今だけだからな？」

「わかってるわよ。アタシが好きなのは一夏なんだから。」

「はいはい」

「アルト……ありがとう」「ん？なんか言ったか？」

「なんでもないわよ！バカ姫！」

「おまえなあ……」

第15話 転校生はセカンド幼なじみ（後書き）

これからイロイロと忙しくなるので投稿が不安定になります。さてあとがきに入ります。

まずオリキャラですが簪との共通点というか橋として出しました。簪との絡みの関係です。

そして今回の話のヒロインの鈴ですがあくまで一夏のヒロインです。あくまで友情での出来事なのでアルトにフラグは立つ事はありません。なお、傷心の鈴はランカに似ているかなと思いき最後の話を作りました。初めてアクセス解析を見たのですが12万アクセス、1万2千ユニーク感謝致します。本当にありがとうございます。何か意見・質問等ありましたら気軽に尋ねてください。

第16話 蟹座へキャンサーへー夏VS鈴 亡霊との再会 (前書き)

内容はほぼ原作通りです。

第16話 蟹座へキャンサー〜一夏VS鈴 亡霊との再会

鈴との一件後の翌日、生徒玄関廊下に大きく張り出された紙があった。

表題は『クラス対抗戦日程表』。

一夏の1回戦の相手は2組 - - 鈴だった。

一夏と鈴の喧嘩後、鈴はなかなか話を切り出せずにいた。さらに鈴は不器用にも一夏に会いに行こうともせず、一夏とも顔を合わせようとはしなかった。

これでは、一夏が『鈴はまだ怒っている、機嫌が悪い』と思っても仕方がない話である。鈴はこれをどうにかするべく、アルトに相談していた。

「ねえ、姫……アタシどうしたらいい？」

「知るか！お前が行かなきゃどうしようもないだろうが！」

「いや、それはそうかもしれないんだけど、何か行きにくいし。しかも負けた感じがするじゃない？」

「そんな意地になってどうするつもりだ？そして一々呼び出されるオレの身にもなってみろ！クラスメイト他が『早乙女君が2組の鳳鈴音さんを口説き落としたいって』って噂してるんだけどオマエは責任取ってくれるのか？」

「責任って、アタシはあんたとは付き合えないわよ？ゴメンナサイ！」

両手を合わせて謝罪する鈴に対し遂にアルトが限界を迎えた。

「よし、わかった。オレが一夏に話をつけてくる。鈴が『将来、結婚してください』と言っているから返事してやれと。そうすればオレが一々隣のクラスまで行く必要がなくなる。ああ、そうしよう。じゃあな、鈴！」

すかさず鈴がIS『甲龍』《シェンロン》の右腕を部分展開してアルトの肩を掴む。

「そんなことをしたら わ かる わ よ ね ?」

「知らん！お前も悪いんだ！さっさと行け。そしてISを解除しろ。肩が痛い！」

丁度良いタイミングで次の授業開始を告げるチャイムが鳴った。

「離せ！鈴！次は織斑先生の授業だ！オレはまだ死にたくない！」

「わ、わかったわよ！余計なこと言うんじゃないわよ？」

1組に駆け込むと先生方はまだ来ていなかった。

「ふう、間に合った」

「よう、アルト。お前最近休み時間になると2組に行くよな？鈴になんか弱みでも握られているのか？」

「貴様のせいだよ……」

「は？」

「何でもない」

丁度、話し終えたタイミングで担任、副担任が教室に入ってきた。

「授業をはじめますよー」

授業中がもつとも心が休まるアルトであった。

放課後何時ものメンツでIS訓練である。一夏、アルト、箒、セシリアは第3アリーナに集合していた。クラス対抗戦まであとわずか、アリーナは明日以降、試合用の設定に調整されるらしく、実質特訓は最終日である。

「IS操縦もようやく様になってきたな。今度こそ……」

「まあ、わたくしが特訓に付き合っているんですもの。このくらいは出来て当然、できないほうが不自然というものですわ」

「ふん、中距離射撃型の戦闘^{メンツ}法が役に立つものか。第一、一夏のISには射撃装備がない」

今日もまさに何時も通り、箒とセシリアの言い争いという名のバトルが繰り広げられる。

ちなみに一夏のISについておさらいしておくと、普通ISというのは機体毎に専用装備いわゆる『初期装備』『プリセット』を持っているものだが、基本的に『初期装備』だけでは戦闘に不十分な

ので『後付装備』

《イコライザ》というものを別に装備して使用するのが基本である。セシリアのISでは初期装備はブルー・ティアーズ。後付装備がライフルと近接用ナイフということになる。

そして、ISにはこの後付装備のために『拡張領域』《バススロット》が設けられている。装備できる量は各機のスペックにもよるが最低でも2つは後付けできるようになっているのが一般的なISだ。

しかし、一夏のISは拡張領域がゼロになっている。そのため、初期装備である雪片式型のみで戦うことになる。逆にアルトのISはその装備全てが初期装備で拡張領域の値が大きい。そこで拡張領域を有効利用するためにも現在換装用パックの開発が倉持技研で進められているということになる。

現在も箒とセシリアの口論が続いている中、アルトと一夏はアリーナに入場するための指紋・静脈認証を済ませアリーナに入っていた。

「待ってたわよ、一夏」

ピットにいたのは鈴だった。腕組みをしてふふんと不適な笑みを浮かべている。

「貴様、どうやってここにー」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ！」

例によって箒とセシリアが鈴に向けて威嚇を始めた。お前らしい加減仲良くできないのかと男2人はしみじみ感じていたが彼女たちにそんなことは全く関係ないようだ。

「あたしは関係者よ。一夏とアルトの関係者。だから問題なしね」

「オレを巻き込むな！」

とばつちりを食らいそうな予感がしたアルトは鈴に文句を垂れるがすべて右から左である。

女性陣の口論がひとまず終わりを向かえ鈴は一夏に話しかける。

「……で、一夏。反省した？」

「へ？なにが？」

（はあ？）

「だ、か、らっ！アタシを怒らせて申し訳なかったなーとか、仲直りしたいなーとかあるでしょうが？」

「いや、そう言われても……鈴が避けてたんじゃねえか？」

（おい、鈴、一夏？）

「あんたねえ……じゃあなに、女の子が放っておいてって言ったら放っておくわけ！？」

「おう。なんか変か？」

（いやいやいや……君達？）

「変かって……ああ、もう！謝りなさいよ！」

（お前らバカか！？）

「だから、なんでだよ！約束覚えてただろうが！」

「あつきた。まだそんな寝言言ってるの！？約束の意味が違うのよ！意味が！」

（もう勝手にやってろ……）

「あつたまきた。どうあつても謝らないっていう訳ね！？」

「だから、説明してくれりゃ謝るっつーの！」

「せ、説明したくないからこうして来てるんでしようが……」

（……………）

「じゃあこうしましょう！来週のクラス対抗戦、そこで勝った方が負けた方に何でも1つ言うことを聞かせられるってことでいいわね？」

「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明してもらうつからな？」

（……どうしてこうなったあ？）

「せ、説明は、その……」

「なんだ？やめるならやめてもいいぞ？」

「誰がやめるのよ！あんたこそ、あたしに謝る練習しておきなさいよ！」

「なんでだよ、馬鹿」

「馬鹿とは何よ馬鹿とは！この朴念仁！間抜け！アホ！馬鹿はアンタよ！」

「うるさい貧乳」

（あっ！）

一夏とアルトがやばいと思った瞬間、ピット内に爆音が響いた。もちろん鈴の仕業だ。

「い、言ったわね……言つてはならないことを言ったわね！」

「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」

「今の『は』！？今の『も』よ！いつだってアンタが悪いのよ！ちよつとは手加減してあげようかと思っただけど、どうやら死にたいらしいわね……。いいわよ、希望通りにしてあげる。――全力で、叩きのめしてあげる」

鈴は一夏にも見せたことのない鋭い視線を一夏に送ってから、鈴はピットを出て行った。

壁をちらりと見ると。直径30センチほどのクレーターが出来ていた。特殊合金製の壁をへこますくらいの威力が鈴のISにはあるのだろう。

「まずは一夏、鈴に土下座決定だな」

「土下座かよ！」

ていうか鈴はこの間の素直さをわすれてしまったのかとアルトはため息をつくしかなかった。

試合当日、第2アリーナ第1試合が一夏と鈴の組み合わせだ。鈴との『○乳事件』から1週間が立ったが当然2人は仲直りしておらず、間に入っていたアルトを苦しめた。鈴はアルトの説教など全く聞き耳もたずにいた。後はなるようにしかないので放っておいたのだが。

ちなみに代表候補生と男子学生のこの1戦は全校生徒が興味あ

るらしく、観客席は人で埋め尽くされている。現在、千冬、真耶、箒、セシリアは管制室で今始まるうとししてる対決を見守っていた。

「あれ？アルトさんはどちらに？」

「そういえば、姿が見えないな……」

セシリアと箒がクラス代表の初陣を見に来ていない男子に軽く憤慨していると千冬が口を開いた。

「あいつなら私が頼み事をしたんでな。この学園の何処かにはいるはずなのでどこかで見ているハズだ。心配するな」

「はあ、そうのですか」

セシリアが返事をする。試合開始5分前のアナウンスが流れた。

一夏は現在、中国のIS第3世代機『甲龍』を纏った鈴とアリナ中央で対峙していた。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛め付けるレベルを下げてもいいわよ」

「雀の涙くらいだろ？そんなのいらん。全力でかかってこい」

「一応言っておくけどISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

それは本当のことだ。IS操縦者に直接ダメージを与えるための装備が存在するらしい。それはアラスカ条約で禁じられているのだが。一夏の零落白夜も悪用すればそういう武器として見なされかねないのは一夏にも感ることが出来ていた。

『それでは両者、試合を開始して下さい』

試合開始の合図と同時に両者激突を開始した。

一夏が雪片式型を展開し今日までの特訓を思い返しながら鈴目掛けて加速した。アルトとの鬼ごっこを始めとする、急加速停止や基礎移動技能、回避能力の向上など全ての特訓は相手に接近するための特訓だ。

「うおおおお！」

「はああああ！」

雪片式型が何か物理的な衝撃によって弾き返される。一夏はセシリアにならったクロスグリッドターンを使用してどうにか鈴を正面に捉える。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けどー」

鈴が手にしているのは異形の青竜刀『双天牙月』を鈴は新体操のバトンを扱うようにクルクルと回している。

それは縦横斜めと鈴の手によって自在に角度を変えながら切り込んで来る。これを防ぐさばくのも苦勞する。

（まずい、このままだと消耗戦になるだけだ。一度距離を取ってー）

「ー甘いー!!」

一夏が視線を鈴にむけたまま後退しようとする、鈴の肩アーマーが開き、中心の球体が光った瞬間、一夏は見えない衝撃に吹き飛ばされた。

一度ブラックアウトしかけた意識を慌てて取り戻す。けれど当然ながら鈴の攻撃は止むことはない。

「今のはジャブだからね？」鈴はにやりと不敵に笑い、再度攻撃を一夏に仕掛ける。

「ぐあっ！」

目に見えない攻撃によって一夏は地表に勢い良く打ち付けられた。

「何だあれは…？」

管制室のモニター見る筈が呟く。それに答えたのは隣にいたセシリアだった。

「衝撃砲ですわね。空間自体に圧力をかけ、砲身を形成、余剰で生じる衝撃自体を砲弾として撃ち出す、ブルー・ティアーズと同じ第三世代型兵器ですわね」

筈は最後まで聞いていないようであたまた激しい戦闘で一夏にケガ

がないよう祈るだけだった。

「よくかわすじゃない。衝撃砲『龍咆』は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに」

そう、その通りだ。砲弾が目に見えないのはまだしも砲身が見えないのでタイミングが掴めない。さらには砲身斜角がほぼ制限なしで撃てるようだ。砲弾はあくまで一直線の弾道なのだか鈴の高い能力と相まって一夏は反撃の糸口する見つけられない。

どこかで手を打たねばやられる。一夏は自分が何が出来るとかを整理する。

（バリア無効化攻撃……と瞬間加速。いけるか？）
イグニッションブースト

先週アルト達だけでなく千冬にも特訓を受けた一夏。その時千冬はこう話していた。

『私も第1回モンドグロッソで雪片一振りで優勝した。それに1つの事を極める方がお前には向いている。なにせ私の弟だからな』

そう。一夏の『白式』は千冬のIS『暮桜』の後継機と言っても差し支えないだろう。なにせ武器までも同じなのだから。

更にアルトにはこう教えられた。

『白式の起動力はスペック上ならオレのデュランダルとそう変わらない。だからエネルギーの使い方をいかに誤らず、瞬間加速を使ってバリア無効化攻撃を当てられるかが課題になってくる。オレのISが一撃離脱したらお前のISは一撃必殺型ともいえる』

一撃必殺……これしかないのなら極めるまでとことんやってやると一夏は考えた。それに気持ちで負けたら勝てるものも勝てなくなる。

一夏は鈴に通信を入れる。

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

「な、なによ……そんなことあたりまえじゃない……。と、とにかく格の違いってのを見せ付けてやるわよ！」

一夏は瞬時加速に入るべく態勢を整えた。瞬時加速による奇襲、零落白夜によるバリア無効化攻撃、このコンボで勝てなければ終わりだ。

「うおおおおお！」

ズドオオオオン……！！

「……！？」

一夏の奇襲が成功し鈴に刃が届く直前、突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った。鈴の衝撃砲ではない——範囲も威力も桁違いだ。しかもアリーナ中央では煙が上がっている。どうやらアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきた衝撃波らしい。

「な、なんだ？何が起こって……」

「一夏、試合は中止よ！ピットに戻って！」

——緊急警告——

——ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされています。——

「なっ——」

アリーナの遮断シールドはISと同じもので作られている。それを貫通するだけの攻撃力を持った機体が乱入、一夏をロックしている。

「一夏、早く！」

「お前はどつするんだよ！？」

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！」

「逃げるって……女を置いてそんなことができるか！」

「馬鹿！アンタの方が弱いんだから仕方ないでしょうが！……別にアタシも最後までやり合うつもりはないわよ。こんな異常事態、すぐに学園の先生たちがやって来て事態を収拾——」

「あぶねえ……！！」

突如として煙の中心から鈴に向けて熱線による砲撃が行われた。これを間一髪、鈴を抱き抱えて一夏は回避した。

「ビーム兵器かよ……しかもセシリアのISより出力が上だ」

ハイパーセンサーによる解析が終了しそのデータをみて一夏は悪寒を感じていた。

「ちよつ、ちよつと、馬鹿！離しなさいよ！」

「おつ、おい、暴れるな！ーって馬鹿！殴るな！」

「う、うるさいうるさいうるさい！」

今の鈴の体勢は俗にいう『お姫様抱っこ』されている状態で鈴は恥ずかしいのを隠すために一夏の顔面めかけてISを纏ったままパンチを繰り出している。危険極まりない事である。

「！来るぞ！」

煙を晴らすかのように敵機からビームの連射が放たれた。そこにいたのは異形の形をしたISだった。

異様に長くビーム砲口が左右合計4門装備されている腕。頭部には剥き出しのセンサーレンズが不規則に並び、体の各所には姿勢制御用のスラスタがついている。

なにより異形なのはその『全身装甲』《フルスキン》だった。

本来ISはシールドエネルギーで防御行動を行うため、装甲を全身に装備する必要がない。物理シールドも存在するが肌が全く露出していないのはおかしいものだった。

「お前は何者だ？何の目的でここに来た？」

一夏がアンノウンに通信を送るが返答はなし。そのかわりといわんばかりに管制室の真耶から一夏たちに通信が入る。

『織斑君！鳳さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがISで制圧に向かいます！』

心なしかいつもより緊張した声だった。

「ーいや、先生たちが来るまで俺たちで食い止めます」

一夏はここで逃げてしまったら観客席の生徒にまで被害が及ぶ可能性を考えていた。なぜならあのアンノウンの攻撃はアリーナの

遮断シールドを破ることが出来るからだ。もしもその攻撃が観客席に向けて放たれたら確実に被害がでしてしまうからだ。

「いいな、鈴？」

「だ、誰にいつてんのよ。そ、それより離しなさいってば！動けないじゃない！」

「ああ、悪い」

鈴はようやくお姫様抱っこから解放された。心なしか顔を真っ赤にして一夏を睨みつけた。

『お、織斑君！ダメですよ！もし生徒さんにもしものことがあったらー』

一夏たちは言葉をそこまでしか聞けなかった。アンノウンのISが突進してきたからだ。一夏たちはこれをかわして臨戦体勢をとる。

「ふん、向こうはやる気満々みたいね」

「みたいだな」

「一夏、アタシが衝撃砲で援護するから突っ込みなさいよ。武器それしかないんでしょ？」

「その通りだ。じゃあ、それで行くか」

キンツと一夏と鈴は互いの武器の切っ先を当てる。それが合図。

一夏と鈴はコンビネーションによる攻撃を開始した。

「もしもし、織斑君、鳳さん、聞いていますか？もしもしー」

必死に呼びかける真耶だったが無残にもその声は一夏達には届かなかった。

「本人達がやるといつているんだからやらせてみてもいいだろう」

「お、織斑先生！何をのんきなことを言っているんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

「……あの、先生。それ塩ですけど……」

「……………」

ピタリとコーヒーに運んでいたスプーンを止め、白い粒子を容器にもどす。

「何故塩があるんだ？」

「さ、さあ……？でも、大きく『塩』って書いてありますけど……」

「……………」

「あっ！やっぱり弟さんが心配なんですね！？だからそんなミスを――」

「……………」

やってしまった。千冬はからかわれるのが何より嫌いだ。真耶も焦っていたのかそのことを完全に忘れていた。妙な気配が管制室に充滿している。真耶はなんとか話をそらそうと試みる。

「あ、あのですねー」

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「へ？あ、あの、それ塩が入ってるやつじゃ……」

「どうぞ」

完全に断れない空気であつた。

「い、いただきます」

「熱いので一気に飲むといい」

その瞬間管制室に通信コールがかかった。真耶はコーヒーを飲む寸前で口を含むのを止めタッチパネルを操作する。

「通信者照合……ヴァルキュリア・デュランダル！？先生、早乙女君からの通信です！」

「管制室の扉をロック。通信を開いてくれ」

「はっ、はい！」

千冬の言う通りにしてアルトとの通信を開いた。

『こちら早乙女。すまない、アンノウンの侵入を許してしまった』

「起きてしまったことは仕方がない。それでお前は何をしている？」

『現在、アンノウンが放ったと思われる遠隔操作式戦闘機3機と交

戦中…… といつてもこの世界に有るはずがない機体だが」

「……？ どういうことだ？」

『詳細は後で説明するがあの3機はオレのいた世界の無人戦闘機…

…ゴーストV9だ』

「何！？ 山田先生、映像をだしてくれ」

「は、はい」

アルトの映像を確認する千冬。そこで見たのはありえない速度で移動を繰り返す赤く塗装されたISより一回り小さい戦闘機だった。

『こいつらを落とした後、一夏たちの救援に回る。一夏たちにも伝えてくれ』

そういつてアルトは通信を切った。

アルトは千冬の命令でアリーナの上空200メートル付近で哨戒活動を行っていた。そこでゴーストV9による奇襲を受け、その隙にISがアリーナのシールドを破壊、侵入を許したのだ。

「やれやれ。嫌な予感が当たってしまったな」千冬はそういつて肩をすくめた。当たって欲しくなかったのは言うまでもない。

「政府に救援の要請、並びに教師部隊の突入を用意させる」

「は、はい」

「それと山田先生……」

「はい？」

「コーヒーは熱いうちに飲んでくれ」

「は、はい……」

結局、塩入りコーヒーを飲まされた真耶であった。

そして2ヶ所でアンノウンとの戦闘が開始された。

第16話 蟹座へキャンサー〜一夏VS鈴 亡霊との再会（後書き）

本来1話で投稿しようと思いましたがきりが悪いので2話に分けることにしました。ゴレムVS一夏・鈴、ゴースト3機VSアルトの本格的な戦いは次の話になります。もしかしたら他にも敵がでてくるかも……？感想並びにご意見お待ちしております。

第17話 決着！そして新たな謎（前書き）

やっと投稿できた……プライベートがしんどくて更新が遅れ気味になります。

第17話 決着！そして新たな謎

アルトは現在も上空でゴーストV9の3機編隊と戦いの真つ最中だ。『ゴースト』……それは生命を排除することによって、機械的限界までポテンシャルを追求した、より高次元な戦闘を実現する無人戦闘機だ。中でもV9は、2050年代における最高性能を追求した完全自立型であり、0-MAX-0の急加速、急停止が可能でその軌道は鋭角を描く程だ。アルトは改めてその機動力が凄まじいものだと畏怖していた。

「クソッ！何だよ、この動きは！？」

アルトは以前にもゴーストV9と戦ったことがある。バジユラを操っていたマクロスギヤラクシー船団のパイロット、ブレラ・スターンのYF-27Yルシファーがゴーストを3機を率いてアルトに襲いかかってきた時だ。この時YF-29デュランダルを駆るアルトはゴーストからの攻撃を全て回避して全機撃墜したのだ。

しかし、今回襲撃してきたゴーストたちは以前とは全く別物だった。ヴァルキュリア・デュランダルを超える機動力を用いてアルトを苦戦させていた。

（機体が小さい分、スピードがあるのは理解できるが……そもそも、なんでこの惑星にこいつらが存在しているんだ？）

アルトは戦いを続けながら様々な可能性を考えていた。

（ギヤラクシーの生き残りがこの惑星にたどりついたか、それとも何億光年も先にいる誰かと交信が可能なので製造方法を聞きだしたのか、それともオレの様にこの惑星に誰か飛ばされてきたのか……チッ！考えても埒があかない！今は学園を守らないと……）

下のアリーナでは一夏達が今も謎のISと戦闘中だ。謎を考えるのは後で良い、そう考えたアルトは臨戦態勢に移行する。ガンポットを展開し、^{オープン}ゴーストに向けてガンポットをかまえる。

「行くぞ！亡霊ども」

アルトの戦いが始まる。

一方、アリーナでは一夏と鈴が謎のISに苦戦を強いられていた。一夏達は鈴の衝撃砲による援護攻撃を受け、雪片式型のバリア無効化攻撃で相手をしとめる作戦で攻撃を繰り返すが、敵ISの機動力が普通のISとは比べ物にならない。そのため、簡単に攻撃を回避されてしまうのだ。

「一夏っ、馬鹿！ちゃんと狙いなさいよ！」

「狙ってるっつーの！」

一夏も馬鹿ではない。普通ならかわせるはずのない速度と角度で攻撃しているにもかかわらず回避されてしまう。さらに、砲身も砲弾も見えないはずの鈴の衝撃砲が敵の腕によって叩き落とされてしまう。おそらく敵のISには衝撃砲の対策が出来ているのだろう。そうでなければこれほど簡単に衝撃砲を防ぐことはできないはずだ。一夏は冷静に分析していた。

それに上空で戦っているアルトとミニチュア戦闘機も気にしていた。ハイパーセンサーの警告でアルトとアンノウンが戦闘中なのは知っていた。通信を開くことも出来るがアルトの戦いを邪魔してはならないし、一夏たちの方でも余裕はなかった。

「なあ、鈴。上のアンノウンはIS……ではないよな？」

「知るわけないでしょ！……姫の心配をするより自分の心配をなさいよ！」

「それもそうか」

しかしこのまま戦い続けても一夏たちが倒されるのも時間の問題であつた。

「……鈴、あとエネルギーはどれくらい残ってる？」

「180ってところね」

「俺は60しかない。バリア無効化攻撃はあと1回が限度だな。」

雪片式型』の仕様がきつすぎる」

「ちよつと厳しいわね……。現在の火力でアイツのシールドを突破して機能停止させるのは確率的に一桁台つてとこじゃない？」

鈴は正直に一夏に告げる。事実、こちらの攻撃は全て防がれていて敵のシールドエネルギーは健在なのだ。さすがにここから巻き返しを計るのは厳しいのだ、と鈴が代表候補生として培ってきた直感がそう告げている。

「ゼロじゃなきゃいいさ」

そんな鈴の心配など関係ないといわんばかりに一夏は答える。

「あつきた。確率はデカイほどいいに決まってるじゃない。 안타って良くわかんないところで健康第一っていうかジジくさいけど、根本的には宝くじ買うタイプよね？」

「うつせーな」

大物かただの馬鹿にしか思えない発言に鈴は顔をしかめる。

「・・・で、どうすんの？」

「逃げたけりや逃げてもいいぜ」

「なっ！？馬鹿にしないでくれる！？あたしはこれでも代表候補生よ。それが尻尾をまいて退散なんて、笑い話にもならないわ」

代表候補生としてのプライドが、それとも女の意地か。鈴ははっきりと逃げることを拒絶した。

「そうか。じゃあ、お前の背中くらいは守ってみせるさ」

「え？あ。う、うん……。ありがー」

鈴が言葉を言い終える前に敵から数本のビームが放たれた。

「集中しろ！」

「わかってるわよ！」

管制室で2つの戦場を見つめていた千冬の耳に扉をノックする音が飛び込んでくる。真耶に目を向けお互いコクリと頷く。真耶が扉

のロックを解除するとそこには筈とセシリアがいた。

「先生！わたくしにIS使用許可を！すぐに出撃できますわ！」

「そうしたいところだが、――これを見る」

「遮断シールドがレベル4に設定……？しかも、扉が全てロックされて――あのISの仕業ですの！？」

「そのようだ。これでは避難することも救援に向かうこともできないな」

セシリアの出撃は認められない。

「で、でしたら！緊急事態として政府に助勢を――」

「やっている。現在も3年の精鋭たちがシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除できればすぐに、部隊を突入させる」

「はああ……結局待っていることだけしかできないのですね……」

「何、どちらにしてもお前は突入隊に入れないから安心しろ」

千冬の言葉に対しセシリアは反論する。

「な、なんですって！？」

「お前のISの装備は1対多向きだ。多対1ではむしろ邪魔になる」

「そんなことはありませんわ！わたくしが邪魔だなど――」

「では連携訓練はしたか？その時のお前の役割は？ビットをどのよう使う？味方の構成は？敵はどのレベルを想定してある？連続稼働時間――」

「わ、わかりました！もう結構です」

「ふん。わかればいい」

セシリアが降参です、といわんばかりに両手を揺らして千冬の言葉を止めた。ふと隣りにいた筈がマルチディスプレイに目を向けるともう1箇所戦闘が行われている。

「早乙女？」

「アルトさん？」

セシリアも続けて目を向けた。姿が見当たらないと思ったらアリーナ上空で戦闘中ではないか、と筈とセシリアが驚愕の目でディスプレイを見つめていた。アルトが駆るデュランダルと画面がらすぐに

消えてしまう程の高速起動を行っている戦闘機が見えた。

「先生、何故アルトさんが……？それにあの赤い戦闘機は？」

「アンノウンだ。おそらく一夏たちと戦っているISと関係しているのだろう。早乙女が何故あんなところにいるかは……そのうち分かる」

「はあ……なんだか納得がいきませんが。どちらにしても見ていることしかできないなんて……あら？篠ノ之さんはどこへ？」

先ほどまで自分の隣にいた筈の姿が見えない。どこへいったのだろうか？

現在もアルトとゴーストとの戦いは続いていた。ミサイルの嵐、ゴーストの雷のような動き、それらをかわしながら反撃のチャンスを探す。アルトはガンポットによる牽制を行いつつ、ミサイルによる攻撃を仕掛けるがチャフをばら撒かれ、ミサイルたちは目標を見失い、着弾前に爆散していく。「随分と高性能なAIを積んでいるようだ……勝負はこれからだ！」

ゴーストが撒いたチャフの効果範囲は直径50メートル。その範囲ならゴーストにもミサイルは使えない。アルトは現在その中心点におり、ゴーストたちがアルトを撃墜するには接近してビーム砲で攻撃しなければならぬ。アルトはアサルブレード、ナイフを展開しピンポイントバリアを刀身に収束。ゴーストとのドックファイトに臨む。

一機のゴーストがアルトに接近してきた。アルトはアサルトナイフを逆手にもち目をつむり深呼吸した。ゴーストの機動は鋭角にジグザグな軌道で飛行することでアルトに的をしぼらせないためである。しかしアルトは近づいてきたゴーストを宙返りでかわし、逆手に持ったナイフで宙返りの態勢のまま装甲にナイフを突き立てそのまま態勢を戻す勢いで一気に切り裂いた。

「1つ目！」

撃墜後アルトはチャフから脱出するべく上空へ飛翔する。当然ゴーストはアルトに狙いを定めているので一目散に追ってくる。これをアルトは背部ビーム砲を180度回転させ、下から追ってくるゴーストに向けて発射する。もちろんゴーストの進行方向、軌道計算を行い狙いをつけたため、ゴーストは自らビームに飛び込むように動きそのままビームがゴーストを貫く。

「2つ目！」

残りは1機。飛翔を続けるアルトはチャフから脱出したゴーストからの攻撃が火を吹いた。ミサイルとビームの暴風雨がアルトを襲う。これをアルトはターン、ハーフターン、の連続マニューバでかわす。ISの限界速度で上昇しているため避けきれないミサイルもあったがアルトはピンポイントバリアを機体に纏い防御する。高度2キロメートルに達したあたりだろうか。まわりには風が心地よく吹いている。

（一度やってみたかったマニューバを試してやる！大気のある惑星でしかないとおきをな！）

そういつてアルトはISの出力を全カット。そのまま風に乗り滑るように飛行する。急に出力を切ったためゴーストは一瞬だが確かに止まった。おそらくアルトを見失ったのだらう。実際はすぐそばにいたのだが。

アルトは予めハイパーセンサーで周辺の大気の状態を確認。風の強い場所までゴーストを誘導した。その上で過去のエースパイロットが披露したマニューバ『竜鳥飛び』でゴーストのレーダーをかく乱したのだ。

「これが無人機の限界だ！落ちろ！」

アルトのガンポットを展開、連続で打ち込まれた弾丸がゴーストを射抜き最後の1機も爆散した。

アルトの戦いが終了する直前一夏はある疑問を鈴に投げかけた。

「なあ……鈴。あいつの動きって機械じみてないか？」

「なにいつてるのよ。ISは機械よ」「そうじゃなくてだな……あれって本当に人が乗っているのか？」

「は？人が乗らなきゃISは動かなー」

とそこまで言って鈴の言葉が止まる。

「ーそういえばアレ、さっきからあたしたちが会話してるときってあんまり攻撃してこないわね。まるで興味があるみたいに聞いているような」

思い返すように鈴が今までの戦闘を振り返る。その顔はいつになく真剣だ。

「うつん、でも無人機なんてありえない。ISは人が乗らないと絶対に動かない。そういうものだもの」

ISの基本は人が乗らないと絶対に動かない。これが前提だ。しかし、本当にそうなのだろうかと一夏は考えていた。それも、今最先端の研究でそれが不可能かどうかはわからない。なにせ、そのことを黙っているだけでいいのだから。それは上で戦っている無人戦闘機を見ても容易に想像がつく。

「仮に、仮にだ。無人機だったらどうだ？」

「なに？無人機だったら勝てるっていうの？」

「ああ。人が乗ってないなら全力で攻撃しても大丈夫だしな」

一夏は話を続けた。

「雪片式型の威力は零落白夜も含めておそらく高すぎるんだ。訓練や学内対戦で全力を使うわけにはいかないが、無人機なら最悪の事態を想定しなくてもいいからな」

「全力も何もその攻撃自体が当たらないじゃない」

「次は当てる」

「言い切ったわね。じゃあ、そんなこと絶対にありえないけどアレが無人機だと仮定して攻めましようか」

一夏に策があると知ってか、鈴はにやりと不敵に笑った。

「一夏」

「ん？」

「どうしたらいい？」

「俺が合図したらアイツに向かって衝撃砲を撃ってくれ。最大威力で」

「？いいけど、当たらないわよ」

「いいんだよ、当たらなくても。考えがあるんだから。じゃあ、早速――」

一夏が突撃姿勢に入ろうとした瞬間アリーナのスピーカーから大声が響いた。

「一夏あつ！」

箒の声だった。その大声にびっくりしながら辺りを見回すと中継室からだった。

「な、なにしてるんだ、お前……」

中継室の中を覗くと審判とナレーターがのびていた。箒に一撃食らって倒れているようだ。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

「……………」

「まずい！箒、逃げー」

気がつくとも敵ISは今の館内放送、その発信者に興味を持ったようだ。一夏たちからセンサーレンズをそらしてじつと箒の方を見ている。今からでは間に合わないと思った一夏は鈴に叫んだ。

「鈴、やれ！」

「わ、わかったわよ」

鈴は両腕を下げ、肩を押し出すような格好で衝撃砲を構える。最大出力砲撃を行うため、補佐用の力場展開翼が後部に広がった。

そして一夏は、その射線上に躍り出た。

「ちょ、ちよつと馬鹿！何してるのよ！？どきなさいよ！」

「いいから撃て！」

「ああもとう……！どうなっても知らないわよ！」
高エネルギー反応を背中に受け、一夏は『瞬時加速』を作動させる。

『瞬時加速』の原理はこうだ。後部スラスター翼からエネルギーを放出、それを内部に一度取り込み、圧縮して放出する。その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する。

それはつまり外部からのエネルギーでもいいということになる。

『瞬時加速』の速度は使用するエネルギー量に比例する。

――『零落白夜』使用可能。エネルギー転換率90%オーバー。（

俺は……千冬姉を、箒を、鈴を、関わる人すべてを――守る！）

一夏の渾身の一撃は相手の右腕を切断した。

しかし残った左拳で反撃を受け、さらに接触面から熱源反応。ゼロ距離射撃を行おうとしている。

「一夏！」

幼馴染2人の声が重なる。しかし一夏は不敵に笑っていた。

「大丈夫、考えがあるっていったらどう？……狙いは？」

『完璧ですわ！』

刹那、客席からブルー・ティアーズの4機同時狙撃が敵ISを打ち抜いた。一夏の攻撃により遮断シールドは破壊されている。シールドバリアーがない状態でブルー・ティアーズのビーム攻撃を一斉に浴びればひとたまりもないだろう。敵ISは小さな爆発を起こしながら地に墜ちた。「セシリア！決める！」

「了解ですわ！」

セシリアのスターライトMK-？が敵の装甲を貫いた。

人間には予測できても無人機には予測できない発想の自由さ。アルトも一夏も機械には真似できない発想で裏をかいた。

『ギリギリのタイミングでしたわ』

『セシリアならやれると思っていました』

一夏は確信じみた口調で答えた。今の会話はプライベートチャンネルによる会話なので2人以外には聞こえていない。

『そ、そうですの……。……。とつ、当然ですわね！何せわたくしはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生なのですから！』
「ふう。何にしてもこれで終わりー」

ー敵ISの再起動を確認。ロックされていますー

「！？」 爆発の余波で粉塵が巻き起こっていたが敵の残った左腕がこちらを向いている。最大出力で一夏たちを撃つつもりだ。熱源反応が先ほどの戦いよりも巨大な反応だった。

「くっそおお！」

一夏は残り少ないエネルギーで敵ISに向けて突進する。このまま敵に撃たれたら誰かが重症を負ってしまう、そんなことはさせないと一夏は雪片式型を振り上げた。

その刹那、一夏に通信が入る。彼の友人からだった。

『やれやれ。詰めが甘いぞ、一夏』

「アルトっ！？」

上空およそ1キロメートルにいたアルトからの通信。そして狙撃が敢行された。敵ISが攻撃を行なう前に1発の弾丸が左腕を破壊した。今度こそ攻撃手段を完全に失った敵ISはそのまま地面に伏して動かなくなったのだった。

『ドラグノフ・アンチ・マテリアル・スナイパーライフル』……精密射撃時には専用のスタビライザーフィンを展開させ、射撃精度をあげる事が可能なスナイパーライフル。アルトの親友であるミハエル・ブラン、通称ミシエルのVF-25Gの専用武器。アルトは狙撃に関してはミシエルには敵わない。なにせミシエルは夜空に写る星々を1万個以上数えることができる程、目が良い。そんな目を持たないアルトはISに装備されていた精密狙撃用フォオスクリーンを展開。バイザーのように目の周りを覆ったそれが狙撃の補助をしてくれる。そのおかげで寸分狂わず敵の左腕を破壊することができた。

一夏の元にアルトが降りてきた。そして一発一夏の頭を右腕で殴る。

「――アホウ！皆のためだろうと、そんな戦い方があるか！」

「い、いつてえ……」

アルトは本気で怒っていた。

「死にたかったのか？」

「いやー。そうしなければならぬ、と思ったただけだ」

「そうか」

――警告。後方より巨大な熱源反応――

「チッ！？まだくるのかよ！！」

「えっ？」

「全員下がれ！クソッ……間に合わないか！ピンポイントバリアを機体前面に広域展開！出力全開！」

紫色のビームが襲い掛かる。機体の反応はない。ハイパーセンサーが反応しない距離からの射撃かステルス類の使用しているのかわからないが。アルトは全員の前に出て両手を前にかざしてピンポイントバリアで皆を守った。

緑色の球状のバリアがビームを遮るが相手の出力が高すぎる。

「グウッ！これは荷電粒子砲いや……このデータは重量子ビーム砲かよ！」

ISの解析が告げているが今の状況では防御する以外手は残されていない。さらにはシールドエネルギーも一気に減っていく。

「チッ、チックショウ……」

そのまま大きな音を立てながら、アルトの周囲は大爆発につつまれた。

第17話 決着！そして新たな謎（後書き）

今回のアルトはミシエル役です。無理をしたアルトを諫めるのがミシエルの役割だ！と思ってます。

一夏はこと戦闘に関しては天才的ですよ（笑）論理飛躍はなはだしいですからね（笑）

第18話 生徒会との出会い！そして……（前書き）

日常回はすらすら書けるんだけどそれ以外は物凄く時間がかかります。

第18話 生徒会との出会い！そして……

目が覚めると保健室だった。辺りはもう夕方。結構な時間気絶していたのだ。

「ここは……」

「目が覚めたか？」

「お、織斑先生？」

「まずは礼を言う。弟や生徒を守ってくれて。それとすまなかったな」

明らかに申し訳なさそうな表情で千冬はそう告げた。

「何故謝っているんだ？オレはできることをしただけだ。それより…… あいつらは？」

「皆無事だ。お前以外はな。一夏は衝撃砲をまともにうけたおかげで全身打撲だ。隣で寝ている。それとお前のISがダメージレベルCを超えている。しばらくは修復に費やさなければならない」

「そうか…… あのISは？」

「現在調査中だ。それとお前にも話を聞く必要がある」

「わかった。いこう」

そういつてアルトは体を起こした。

「おい。無理をするな。今すぐ来いとは言っていないぞ？」

千冬はアルトの体を支える。

「ここにいと見舞い客が五月蠅くて休んでいられないからな」

「……なんだ。少しは気づいていたのか？」

「あれだけ見せられるとな。なんとなくは分かるさ」

「フン…… まあ分からないでもないがな」

「なんだ？千冬さんも一夏が好きなのか？」

「な！？貴様！何を馬鹿な…… あれは私の弟だぞ！？」

「？そんなに顔真つ赤にして言われても説得力ないぞ……」

「ええい！それだけ減らず口が聞けるならとつとこい！」

「はいはい……」

「『はい』は一回だ……」

「はい。わかりました……」

急に教師の顔に戻りごまかす千冬だった。明らかにバレバレなのだが……。

千冬に連れられアルトは学園の地下50メートル、レベル4の権限をもつものしか入ることが許されない隠された空間に来ていた。今回は事情が事情だけに千冬の権限でアルトの入室を許可したのだ。

機能停止したISもここに運びこまれ現在教師陣による解析が続けられていた。

「さて、早乙女。あのアンノウンについて話してもらうぞ」

「ああ。あれはゴーストV9と言ってー」 アルトは可能な限り説明した。

「ーふむ。なるほどな。ではあのISの方にもそのゴーストのA Iが参考にされている可能性もあるということか。」

千冬は冷静な顔で話を聞き納得してくれたようだった。

「なあ、織斑先生。アンタ何か知っているんじゃないか？オレに哨戒活動の命令を下したのも襲撃を知っていたからか？」

そう。アルトは千冬の命令でアリーナ上空の警備をしていたのだ。

「今は何も分からない。今はな……」

なるほど少しだけ心当たりがあるということかとアルトは溜息混じりに納得した。

「では次の質問だ。最後のビーム攻撃については心当たりがあるのか？通信記録で『量子ビーム』という言葉をおまえは呟いていたな？」

千冬が再びアルトに質問をする。確かに心当たりはアルトにある。ただし途方もなく低い可能性な心当たりだが。

「『量子ビーム』は本来、量子…… フォールド機関や反応炉で

のみ生成される、巨大な質量を持った特殊な量子だ。オレたちの世界では特に兵器としての利用がされている。つまりはオレたちの世界にしか存在しないはずのビーム兵器だ」

「ということはお前以外の誰かがもたらした技術だということか？」

「それはわからない。あの時クイーンと共にフォールドしたのはオレだけだったはずだ」

アルトの頭にはある男の姿が浮かんでいたがすぐに振り払った。

あの男が無意味な戦争を推奨するはずがないと今のアルトは信じているからだ。だから千冬には話さなかった。

「オレが話せるのはこれくらいだ」

「分かった、ご苦労だったな。それからこの事件に関しては箱口令を出す。万が一外部に漏らしたら監視付きの生活を送ることになる」

「分かりました……それでは失礼します」　アルトはお辞儀をしてその場を後にした。

「心当たりを隠しているのはお互い様か……」

誰にも聞こえないくらいの小さな声で千冬は呟いたのだった。

（誰かにつけられている？オレが？）

アルトはなんとなくそう思った。思い違いならそれでいいが、もしそうなら早急に誰か突き止めなければならない。今のアルトは戦えない状態だからなおさらだ。

「誰だ？オレに何か用か？」

アルトは意を決して後ろの方にいる何物かに話かける。

「あら、バレてたのね。さすがね早乙女アルト君」

そこにいたのは以前屋上で会った生徒会長こと更織楯無だった。彼女はどこから取り出したのか扇子を広げ口元へ持って行った。その扇子には『参上』と書かれていた。

「もう一度自己紹介しておく私の名前は更織楯無、君たち生徒の

「長よ。よろしくね」

「……………」

アルトは無言で楯無の方を見ていた。いきなり尾行しておいて自己紹介ってありえないだろ、と思うしかなかった。

「ん？どうして無言なのかな？」

「そりゃ尾行されてればそうなる」

「あは。そういえばどうして気づいたのかな？私、尾行得意なのに」
「尾行が特技ってなんなんだよ……あんたの足運びとか所作というか普通の人と明らかに違ったからなんとなく。ポツカリ穴が空いたみたい感じだったから不思議にも思うだろ？」

そう言ったアルトに対して楯無は軽く微笑んでいた。

「ふふふ。聞いていたとおり面白い人ね。歌舞伎役者で戦闘機のパイロットをしているとそういう感性が生まれるのかしら？」

「何でそのことを知っているんだ？」

アルトの素性を完全に知っているのは千冬くらいのはず……そのことは一夏たち友人にも話していないはずなのに。

「織斑先生に聞いたのよ。君のフォローを任されているからね」

「フォロー？」

「そう。手助けをしてやれってこと」

「？生徒会長だからか？」

「まあ、それもあるけど……私は暗部の家系だから」

暗部――表にできることのない裏の実行部隊、更織楯無はIS学園の裏の顔を知る人物であるということだ。

「なるほどな……」

「まあ、積もる話もあるしこれから生徒会室に行きましょう？食事前のティータイムということだ」

「拒否権はなさそうだな………わかった。行くよ」

「ん、素直な子は好きよ。といっても実年齢は私と同じか。同年代の男子と話すの久しぶりね」

「……そうか」

なんとなく強引なところがシェリルそっくりだと思っアルトだった。

「……いつまでぼんやりしてるの」

「変わらない世界はいやなんだ！むにやむにや……」

「いつまで寝ぼけてるのしやんとしなさい」

「エゴだよ！それは……むにや」

「いい加減にしなさい！」

「任務了解……はっ！」

そんな言葉がドアの向こう側から聞こえる。一人はクラスメイトの声に似ている。「なあ、会長。オレ帰るぞ？」

「あら？私の事は楯無かたちちゃんって呼んでくれる？」

目の前の美少女はアルトの帰るといふ言葉を完全にスルーしている。アルトの心に諦めるという文字が浮かんできた。

そうして楯無は生徒会室のドアを開いた。

「ただいま」

「おかえりなさい、会長」

出迎えたのは3年生の女子で眼鏡をかけたキャリアウーマンみたいな女性だった。アルトの顔見知りの中ではシェリルのマネージャー、グレイスに似ている。

さらにその奥には見知った顔がいた。

「わー……あるんだ」……」

「の、布仏本音？」

のほしけほんね

布仏本音。通称のほほんさん（一夏命名）。間延びした喋り方が特徴であだ名で人の事を呼ぶ。さらには普段着がピ○チュウというアニメキャラの着ぐるみ。変人が多いIS学園でもトップクラスの変人だ。

「あるん……いましつれいなこといった……」

「何いってんだ？」

アルトは何にも知らないという顔をした。こういう時は役者の技術が役に立つ。

「こら本音。いつまでタラタラしてるの？お客様よ」

「わかったよーお姉ちゃん」

「お姉ちゃん？」

「ええ。私は布のほとけうつほ仏虚。妹は本音です」

「むかーしから、更織家のお手伝いさんなんだよー。うちは代々姉と妹でここまで性格が違うものなのかとアルトには軽いカルチャーショックだった。

虚さんが紅茶を出してくれた。とても香りの良い紅茶で彼女の技量が伺い知れた。「さて早乙女アルト君。生徒会へようこそ。この二人もある程度事情は知っています。その上で君に提案なんだけど……」

「生徒会には入らないぞ？」

「うんうん。君にこの学園の暗部として働いて欲しいの……というより織斑一夏君の護衛って言う方が正しいかな」

「どういう意味だ？」

「そのままの意味よ。今の織斑一夏君は弱い。自分の身を自分で守ることが出来ない。彼はこれから今日みたいに刺客を送られ続けることが予想されるわ」

楯無は真剣な面持ちで話す。暗部としての顔なのだろう。

「だから君に彼を守って欲しいのよ。もちろん私もいずれ彼に接触するわ。彼を鍛えるためにね。それに貴方のISを完成させて元の世界に戻るよう生徒会は協力するわ。暗部の情報網は表よりも広いしね」

確かにこの提案は魅力的に聞こえる。今日みたいな事件の全容を知ることが出来るかもしれない。他人に任せるよりは自分でなんとかしたい。ただなんとなく気乗りしなかった。

「ならお前がすぐにも接触してやればいいだろ？」

「それはできないわ。わたしは生徒会長として学園全体を守らなければならぬ。今はアンノウンの対策も練らなければならぬしね。貴方のいた世界の兵器も投入されていたみたいだし。下手したら戦争に発展しかねないほどの状況なのよ。自由国籍権を取得しているとはいえ私も一応はISロシア代表だしね」

「……ん？今何て言った？代表候補生の間違いだろ？」

「うんうん。現役ロシア代表よ。ああ、君は知らなかったのね。IS学園の生徒会長になる方法の一つだけ。生徒会長は……」
そういつてまたも扇子を取り出し開いて口元によせる。

「最強であれ」

扇子には『我最強』と書かれていた。いったいどうやって扇子を用意してるんだと不思議にアルトは思う。

「なるほどね……話は理解したよ」

「理解が早くて助かるわ」

「オレが戦うのは誰かを守りたいからだ。そういう意味ではオレもあんたも同じはずだ。だからオレは戦う。ただし敵とわかりあうことが出来るならオレはわかりあうための努力をする。それがこの学園の不利益になることでも。それでも構わないか？」

アルトは本気でそう考えている。言葉を持たないバジユラ達ともわかりあえたのだから。

「ええ、かまわないわ。ふふふ。織斑先生から聞いた通りね。いい男。惚れちゃいそうだわ」

「か、からかうんじゃないよ！」

少し照れたアルトは顔を背けた。その顔すら美しく生徒会の面々には見えた。

「用があるときは本音から伝えさせるわ。本音、いいわね？」

「りょーかいーしました」

（し、心配だ……）

と思わずにはいられない。

「あ！いけない、忘れてたわ。お礼を言うのを……マルチロツクオンシステムのデータ提供してくれたんでしょ？ありがとう」

「ん？じゃあ更織簪つてのは……」

「そう。私の妹よ」

「そうか……少しは役に立ったのか。オレや一夏のせいで迷惑かけてたみたいだしな。それくらいのおせっかいは大したことはないさ」
「うふふ。本当に優しいのね。本気で惚れてもいいかしら？」

「だからからかうな！」

「きゃー！ごめんなさい」

「でも、妹さん。自分でISを作りあげるって話だけどそんなことできるのか？」

アルトは倉持で聞いた話を思い出して聞いてみた。

「うーん。出来ないこともないのよね。私もそうやって作っただし」
「？」

更織楯無は本物の天才なのだとアルトは確信した。とんでもない女だということは間違いない。

「そうだ！もし話す機会があれば仲良くしてあげて！あの子……言にくいんだけどぶっちゃけ暗いから」

「ぶっちゃけ過ぎだ。覚えていたらな」

「よろしくねアルト」

「もう呼び捨てかよ……」

「あら、同じ年なんだからいいじゃない？」

「わかったよ……それじゃあ帰るな」

「うん。今日はありがとう」

「早乙女さん。本日はお越しいただきありがとうございました」

「あるーん。またね」

「ああ。それじゃあな」

こうしてアルトは生徒会室から出てそのまま学食に向かうのだった。

食堂にいくと鈴が広東麺を啜っていた。

「あ、姫今日はお疲れ！てかアンタ包帯だらけじゃない？お見舞いにいったら一夏しかいなかったから心配したじゃない！」

「だから姫って呼ぶなって何度言えば解るんだ？この猫娘は……」

「な！？誰が猫娘よ？」

「お前だ。お前」

アルトはざるそば・いなり寿司のセットを注文して鈴の隣に座る。やはり夕食は和食に限る。

「そういえば一夏は？」

「保健室では一緒だったけどそれからはわかんない。でもアンタよりピンピンしてるわよ」

「そうか……なら良かった」

「良くないわよ……結局勝負はつかなかったし。まあ一夏と仲直り出来たから良かったけど」

「ん？じゃあプロポーズしたのか？」

「ぷ、ぷ、ぷ、プロポーズって！！あんたもうちょっと言い方を考えなさいよ」

相変わらず目茶苦茶な鈴の言い分だった。

「それで伝わったのかよ？」

「……一夏に意味はわかってもらえたけど自分で『そんなわけないじゃない！馬鹿！』って否定しちゃった……」

問答無用で殴ろうかと思ったがさすがに女を殴るのはマズイと思い、

「よし。鈴。目を閉じろ」

「へ？」

「いいから。早くしろ」

「わ、わかったわよ」

目を閉じた鈴に対してアルトはデコピンを食らわせた。

「い、いったあ。何すんのよ！」

「素直になれない鈴に罰を与えたんだよ」

「な、なによ……」

「素直になれないとどんどんライバルに差をつけられるぞ？ただでさえクラスが違っんだ。手遅れになっても知らないぞ？」

「うっ……」

アルトの正論に全く言い返せない。

「それに一夏はいい男だからな。次々と新しい女子があいつの事を好きになっていくかもしれないな？」

「くっ……」

「そのうち鈴以外の誰かと愛し合ったりして？」

「アルトのいじわる……」

鈴は涙目でアルトを睨みつけるがドSモードに入ったアルトには全く効果がない。

「幼なじみだからって付き合えるわけじゃないだろ？同じ幼なじみの篠ノ乃を選ぶこともあるかもしれない。だから後悔しないように戦えよ？」

「わかってるわよ……フン！アルトの馬鹿！」

そう言っただけで鈴は逃げ出すかのように食堂を後にした。

「姫の次は馬鹿かよ……やれやれ」

最近ため息が多くなっていると自覚しているアルトだった。

部屋に戻ると一夏の部屋の前に真耶が立っており、

「お引越しです！」

と箒と一夏に告げていた。どうやら箒が別の部屋に引っ越し、一夏が一人部屋になるらしい。

「待ってください。それはいますぐでないといけませんか？」

箒が食い下がっていた。どうやら一夏と離れたくないようだ。

「それは、まあ、そうです。いつまでも年頃の男女が同室で生活するのは問題がありますし、篠ノ乃さんもくつろげないでしょう？」

「い、いや、私はー」

「そんな気を遣うなって。俺のことなら心配するなよ。箒がいなくてもちゃんと起きれるし歯も磨くぞ?」

「先生、今すぐ部屋を移動します!」

「は、はいっ!じゃあ始めましょうっ!

隣の部屋でどたばたと引越しの用意が進められている。

(一夏よ。お前はもうすこし敏感になろうぜ。さすがに篠ノ乃が不憫だ)

アルトでも気がつく好意を全く気付かない一夏はなんで箒が怒っているのか全くわからなかった。

一気に引越しが終わり隣が静かになった。アルトはそろそろ寝ようかと思っていると隣の部屋に箒が戻ってきたのか声が聞こえた。

「来月の学年別トーナメントだが……私が優勝したら……つ、付き合ってもらおう!」

愛の告白が聞こえた。ちなみに学年別トーナメントは自主参加の個人戦でトーナメント方式で学年1位を決める大会みたいなものだ。

アルトは、

「また嵐がくるな……」

と思わずにはいられなかった。

第18話 生徒会との出会い！そして……（後書き）

ようやくヒロインの一角が本格的に登場しました。これからちょこちょこ本文に絡めて行きます。次は妹の番だ！

感想・ご指摘・こうしたらもっと良くなるっていうのがあればぜひご意見ください。

第19話 牡牛座（アリエス）はヒーローの夢をみるか（前書き）

かなり間隔が空いてしまいました。読んでいただきました皆様申し訳ありませんでした。
ヒロインの登場です。

第19話 牡牛座（アリエス）はヒーローの夢をみるか

第の『優勝したら付き合ってもらう』宣言の数日後、アルトはフローラからの呼び出しを受けて倉持技研に来ていた。

「あらあら。遠路はるばるようこそいらっしやいました。それで、本日はどのようなご用件でいらっしやいますのですか？」

「……アンタがオレを呼んだんだろうが!？」

「まあまあ。そうでございましたか？それはご苦労様です」

相も変わらず話がかみ合わない2人……アルトはなんとか話を進めるべく質問を続けた。

「それで？今日はオレに何の用だ？」

「はい。申し上げますとあなた様のIS用換装装備パッケージの試作品が完成したのでございますわよ」

換装装備は読んで字の如くISの装備を変更し様々な状況に対応するための換装システムである。

単純な武装変更だけでなく、増設アーマーや増設スラスタなど装備一式を指し、その種類は豊富で多岐にわたる。

また、専用機が持つ機能特化専用パッケージを『オートクチュール』と呼ぶ。

しかし、これらの換装装備を追加するにはISの拡張領域が空いていないとならない。

例えば一夏の『白式』には拡張領域が空いていない。これは『雪片式型』が拡張領域を全て使っているからと推測される。

それに対し、アルトのIS『ヴァルキュリア・デュランダル』は元々『ラファール・リヴァイブ』が変化したためか、もしくはフォルドクオーツの影響なのかは定かではないが拡張領域が空いている事がこれまでの調査で判明していた。

そこでアルトはスーパーパックとアーモードパックをISで使用できないかと考えた。

本来はバルキリー用のオプションパックだがアルトはこれまでの経験でオプションパックを使った戦闘に慣れている。

ファイター、ガウオークに変形出来ない戦闘面のマイナスをパック装備によって補えるのではないかと考えたからである。理由はわからないが、幸いにも『ヴァルキュリア・デュランダル』内に、ある程度のオプションパックのデータが入っており、これを参考にして倉持での換装装備作成が始まったのだった。

さらに、ISの世界で初の試みとして戦闘中での着脱式換装装備の実現を目標としている。

これにも理由があり、被弾や武装の弾切れなどで換装装備がデットウェイトにしなければならない状況を考慮してのことだ。

これが実現できれば戦術の幅がさらに広がる。

簡単に言えば『量子変換により何時でもパッケージの装備・パージが可能』ということになる。

さらに言えば武装展開の要領で呼び出し可能な装備一式である。現段階では換装装備の実践における量子変換の基礎理論が完成しておらず、『パージ可能な換装装備』として運用データを取り、量子変換へと繋げる方向で話がまとまっている。

最初に作成されたのは『スーパーパック』 - 高起動/推進剤パックである。マイクロミサイルポッド、化学ロケットブースターで構成されたオプションパック。

本来のYF-29デュランダルのスーパーパックは大出力フォルド・ウェーブプロジェクターを内装しているが今回作られた試作スーパーバックではオミットされている。

外見の特徴としてはデュランダルの翼にそれぞれ挟み込む形でブースターが取り付けられている。このスーパーバックのコンセプトとしては『高速機動戦闘特化』――すなわちヴァルキュリア・デュランダルの本来のコンセプトをさらに強化するための『オートクチュール』となる。

「分かった。早速、試験運用を開始しよう」

「はい。後はインストールをすればすぐにでも使用可能となりますわ。あなた様のISを展開してくださいませ。すぐにでも作業を始めさせていただきますわ」

「了解……」

アルトはISを展開するために待機形態のイヤリングに念じる。

（……来い！デュランダル！）

全身が光に包まれ、ISアーマーが構成される。細く、鋭く、美しい赤と白のコントラスト、永劫敗れることなきオルランドの剣の名を冠したアルトのISが出現した。

「それでは行きますでございます」

フローラはデュランダルの装甲に多数のプラグを差し込み、量子変換を開始する。球状の自作キーボードを凄じスピードで叩きプログラムを入れていく。そして5分くらいでその手を止めた。

「終わりましたでございますわ。これで展開可能になっておりますです。」

「は、早いな？」

「これくらいは普通なのでございますわよ？」

「そうなのか……？まあいいか。テストアリーナへ行こう。実際に動かさないとな？」

「はいでございますわ」

アルトはテストアリーナに来ていた。

倉持技研のアリーナはIS学園の第2アリーナと同規模の広さがある。テストパイロット同士の模擬戦や訓練用となっている。

ちなみにフローラはアリーナの管制室にいる。そのフローラから通信が入った。

『早乙女様。まずは起動テストからお願いしますわ。スペックカタログ上では通常形態よりも約2倍の速度での運行が可能ですわ。スーパージャンプ自体に燃料タンクが積まれていますのでそのことをお忘れなく』

「ああ。慣れているから平気さ。対Gに関してはどうなった？」

『ISの操縦者保護機能、PICと併せましてあなた様のISに積まれているISCが相乗効果によりG関連の問題はクリアしているでございますわよ』

『ISC』……正式名称「Inertia Store Converter」。

VF-25やYF-29に搭載された慣性制御装置であり基本原

理は可変戦闘機のコクピット周辺に生じた起動慣性を異次元空間に一時待機させ、少しずつ通常空間に還元することで、瞬間的な慣性負荷からパイロットを保護するトンデモ装置である。

この存在を知ったフローラは「どこのネコ型ロボットの秘密道具でございますか？」と訳の分からない言葉を発していた。

ISとなったヴァルキュリア・デュランダルもこの装置が搭載されており瞬間的には慣性負荷をなくすことが出来るようになっていた。

本来のISは操縦者の意識途絶などを防ぐ保護機能が付いている。これらの相乗効果により理論的には亜光速で機動を行ってもある程度は生命の保証がされることになった。

実際には亜光速までスピードをだすのは現段階では当然不可能なのだが。

「了解。これよりソードダンサー1、機動試験を開始する」

ソードダンサー1はアルトの航空管制用のコードネームだ。『聖なる剣を用いて空を舞うもの』としてアルトが考えたコードネームVF-25では「スカル4」、VF-29では「サジタリウス1」のコードを使用していたアルトが新たなヴァルキュリア・デュランダルとしてこの名前を選んだ。

そもそも軍隊ではないIS学園にいる以上はコードネームなど必要ないのだが数日前にIS学園生徒会長こと更識楯無からのお達しを受けたのだ。

『アルト。一応、あなたの所属は生徒会というか私を含む暗部の所属になるのだけれど実はコードネームが必要になるのよ』

『はあ？なんでだよ？』

『もちろん、身元が判明するのを防いだりするためよ。それに作戦によつては必要になってくる。軍属だったあなたには理解できるわよね?』

『そりゃあ話は分かるが……その前にお前はなんでそんなニコニコ笑顔なんだ?』

『いやん……そんなことはないわよ?』

『ほう……なら虚^{ほつ}に聞いてみるから少し待ってる』

『信用されてないわね。お姉さんはご立腹よ?』

『ぬかせ。今、電話している所だ。ああ、虚か?更識のことで聞きたいことがあるんだが?』

『はい?何でしょう?』

『アルト、虚ちゃんは暗部との実際の関わり合いはないわよ?それと楯無と呼んでって何度いったら分かるのよ?』

『……楯無が見るからに怪しい笑顔で話しかけてくる時はどんなときだ?そうだな……イタズラしてやるって顔なんだが?』

『……そのまま顔の通りで間違いないですよ。お嬢様はイタズラや悪ふざけがとても好きなので。気をつけたほうがよろしいかと』

『分かった。ありがとうな』

『……』

『ということだそうだ。更識さん?』

『い や ん』

『いやんじゃねーよ……まあいい。考えとく』

『あ、それなら私がもう考えてあるわよ? 「桜姫」なんて如何かしら? 歌舞伎の演目にもあるやつね』

『ぐつ……きゃ、却下だ。自分で考える。それよりも! お前には罰をくれてやる』

『罰?』

『ああ。生徒会長権限で……』

以上がことのあらましである。これまた楯無がアルトの演じた出演演目をズバリ言い当てたかは謎である。それは一先ずおいておき今は機動試験の真つ最中であった。

(かなりのスピードだな……)

マッハ2近くのスピードで飛行しているアルトはアリーナの遙か上空に来ていた。

さすがにバルキリーの最高速度程ではないが常時、瞬時加速しているような感じだ。

負荷慣性による体の異状も問題なし。

改めてISというモノが高性能であると感心し、同時に恐怖した。宇宙用マルチフォームスーツとして開発されたはずのISが、今

は兵器として利用されている。

（開発者はどんな風に考えてるんだろうな……）

篠ノ乃東。ISの基礎理論、コアの開発など全てのISの産みの親、そして篠ノ乃箒の姉。どんな人物かは想像出来ないが、戦争の道具として利用されているISについてどのように考えているのだろうか、アルトは考えを巡らせた……が、今は試験に集中することにした。

機動試験は問題なく終了した。通常時の性能を遥かに上回る結果になった。

「こちらソードダンサー1。機動試験を終了する」

『了解でございますわ。次に模擬戦を行いますわ。ご用意をお願いいたします』

フローラからの返事にアルトは不思議に思った。

「模擬戦？プログラムには入っていなかったはずだが？それに誰とだ？」

『今から相手ISのデータをあなた様にお送りしますわ。ご覧になつてくださいませな』

「データ照合……『打鉄式うちがねにしき式』！？おい？これって？」

アルトは困惑した。打鉄式は未完成だと聞いていたからだ。すると管制室からフローラではない人物からの通信が入る。
『やつほゝあるるん』

こんな独特な口調でアルトを呼ぶ人間は1人しかいない。

「うおっ！布仏本音！？」

『そうです。みんなのアイドル本音ちゃんです』

アルトの級友であり、生徒会の書記の布仏本音だった。

「何言つてやがる……それにどうしてお前がこんな所にいるんだ？」

『わたしはかんちゃんの専属メイドさんであり、かんちゃんのパートナーなんだよ？』

「意味がわからん。それにかんちゃん？？」

『さあかんちゃんノベル入場だ』

『本音……やめて……恥ずかしいから……』

ISの通常回線オープンチャンネルで本音を諫める声が聞こえた。その声ははかなくオドオドしているような喋り方だった。

それと同時にハイパーセンサーが発声者の姿も捉えた。ISを装着した、水色のセミロングの髪をもつ少女だ。

ISは機動性を重視した独立したスカートアーマー、スマートなラインの腕部装甲、肩部ユニットは大型のウイングスラスター、小型の補佐ジェットブースターが前後で2基装備された一見独特で一夏の白式に何処か通じるものがあるISだ。

そして操縦者の少女には見覚えがあった。ここに来た時に何度か見かけた顔。そしてこの少女の姉を知っていた。

（更識楯無の妹か……）

すると今度は個人秘匿通信プライベートチャンネルで本音から通信が入った。

『あるーん？聞こえる？かんちゃんにはたっちゃんの話は余りしないでね？』

『なんでだ？』

『たっちゃん……お姉ちゃんと比較されるのがイヤなんだって』

それを聞いたアルトは瞬時に理解した。どことなく昔の自分に似ていると。歌舞伎役者の家の息子として強制的な生き方をさせられてきた。神童と呼ばれ周囲に期待され、そのことが嫌で堪らなかった。他人の敷いたレールの上を生きなければならなかった自分に。

彼女……更識簪もまた暗部の家系として生まれ天才の姉と比較され生きてきた。彼女が生まれた瞬間から『天才の妹』というレールを引かれたのだろう。

自分に天才の兄でもいたらその背中を追うことが嫌だったにちがいないとアルトは思った。

『わかったよ。本音』

『うん。それにしてもあるんに名前呼ばれちゃった。明日全校生徒にじまんしようっと』

『すみません。それだけは勘弁してください』

しみりとした空気が台なしである。アルトは本音と5通信を切

り、今度は簪に通信を入れた。

『えっと、更識さんでよかったよな？そのISって未完成って聞いてたんだがいつの間に完成したんだ？アルトの質問に対し簪は俯き加減な様子で答えた。

「……機体自体は管制していた。……武装面はマルチロックオンシステムはあなたが提供してくれたデータで完成……その他の調整はフローラ博士や整備科の人に協力してもらった……」

IS学園では2年生からIS開発・研究・整備を専攻にした『整備科』が1クラス作られる。聞いた話だと新聞部の黛薫子や生徒会の布仏虚が所属しているという。

「そうか……ってロックオンシステムのデータ提供したのがオレって何で分かったんだ？フローラ博士には匿名にしといてくれと頼んだはずだが？」

「世界に実践配備されているISでマルチロックオンシステムが搭載されているのは……あなたのISだけ……しらねれば分かる」

「オレまたそんなミスを……」

アルトはまだこの世界に疎いたためそこまで気が回らなかった。フローラは知ってて教えなかったのだがアルトにはそんなことわからない。

「そうか。それにしても何で接点のないオレなんかと模擬戦しようと思ったんだ？しかもこんなところで」

「戦闘時の稼動データが少ないから……博士に相談したらあなたの

事を教えてもらった……それと……あなたのISを見てみたかったから」

（あれ？更識、1人で完成させるって言ってた割には結構、他人に協力してもらってる様な……？まあ、いいことだが）

何か心境の変化でもあったのかと不思議に思うアルトだった。

『お2人ともよろしいでございますか？問題がなければ模擬戦を開始させていただきますでございますが？』

フローラから通信が入る。アルトと簪は機体を戦闘モードに移行する。

「問題ない」

「だ、大丈夫です……」

簪は複合装甲用薙刀「夢現」を展開し、構える。

『それでは、模擬戦スタートー』

のほほんとした本音の声を合図に模擬戦が開始された。

先に攻撃をしかけたのは簪だった。背部に装備された2門の荷電粒子砲「春雷」で攻撃。2本のビームがアルトに襲い掛かる。

しかし、機動力が向上したアルトのISには当たらない。上空に避けたアルトはそのまま右手にガンポットを召喚し、弾幕を形成す

るべく、簪に向けて発射した。

これを簪は「瞬間加速^{イグニッションブースト}」でかわした。予めアルトの戦闘スタイルを研究していたのだから。開始直後にはウイングスラスタに瞬間加速用エネルギーを貯めていたのだ。

「やるな……『打鉄』が防御主体の機体に対して『打鉄式』はやはり機動性重視の機体だな。武装も遠距離主体のものだからオレやセシリアと戦闘スタイルも似ている」アルトは冷静に分析をしていたが、一方の簪の顔には一筋の汗が流れていた。

（す、すごい……最初のやり取りだけで読まれている……。け、経験が違いすぎる……）

簪は歯を食いしばりながら考えていた。

（で、でもここで逃げたら前を同じ……。お姉ちゃんに並ぶことなんかできない）

腕部装甲を量子変換で収納し、かわりにフォロスクリーンとキーボードが出現。

同時にアルトもフォロスクリーンを展開。

2人とも次の一手は同じ武装だった。

「……お願い、『山嵐』」

「勝負！」

打鉄式から48発のミサイル全弾アルトに向かって飛翔する。

これに対しアルトが発射したのはミサイル32発。大きく弧を描くミサイルもあれば直接簪に向かうものもある。

両ミサイルは白い噴射炎を引きながら空にその軌跡を描く。それは青のキャンパスを2人の絵師によって白で染められていくようだった。

お互いのミサイルがぶつかり合いアリーナの中は爆発だらけになり、一転して赤い炎と黒の爆発煙だらけになった。

「きゃあ！」

ダメージはないものの爆風により身じろぎした簪は一度、体勢を立て直すべく上空に舞い上がった。

「……なにか……おかしい……」

上空に昇りながら簪はミサイルの応酬戦について考えた。明らかに簪が放ったミサイルの数が多いはずなのにそのほとんどがアルトに届くことはなかった。アルトにダメージがないのはハイパーセンサーの情報で分かっている。

幾つかのミサイルが相殺されたのは理解できた。けれども、残りのミサイルはアルトに着弾することなく上空へ向かいそのまま爆散した。

「……これって。まさか……」

ハイパーセンサーで熱源を探知させる簪。その簪の頬に冷たいものが当たった。

「……雨……じゃない？アルミ箔？じゃあ、やっぱり……」

「そういうことさ」

「……！？」

黒煙が消えていき、その中心にはアルトが無傷で佇んでいた。

ゆっくりと目を開け、簪の方を見る。

「これは所謂、チャフとフレアで、戦闘機に装備されているヤツだ。これで短時間だがISのミサイル兵装は防げる」

無論、戦闘機に装備されているタイプのもものではISには通用しない。これはフローラが作成した対IS用チャフ・フレア弾頭である。

ISのハイパーセンサーとAIによる相手ミサイルの解析がなければ使えないが、遅出しでも効果があるのが特徴的である。

「これでお互いミサイルは使えない……勝負を決めよう。更識さん」

「……うん。それと名前……」

「……？」

「……な、名前で呼んで！」

顔を朱めて何やら大声で叫んだ簪にアルトは面食らってしまった。

「わ、わかったよ。え、と簪？」

「……うん」

再び、『春雷』の銃口を向ける簪。それに対し、アルトはガンポットを展開し構える。

両者ゆっくりと機体を上昇させて行く。

「じゃあ、行くぞ？ 簪」

「……うん」

その瞬間、打鉄式式の右スラスターが小さな爆発を起こした。

「きゃああああああ！」

打鉄式式のアラートが鳴り響く。管制室の2人にも原因は解らない。打鉄式式のPICをはじがカットされ地面に真つ逆さまに落ちていく簀。

「簀っ！」

スラスターに全エネルギーを収束、瞬時加速で限界まで加速した。

「さ、早乙女君……」

「しっかり掴まれ！！」

「……でもこのままじゃ激突……」

「任せろ！」

瞬時加速で完全にスピードに乗っているためこのままでは2人共地面に激突してしまう。音速で激突すれば怪我ではすまない。

アルトは可変型前進翼を変形させ逆噴射し減速させる。しかし完全に減速はできない。

さらに後方への瞬時加速でアルトは大地から離れようとした。

「墜ちてたまるかあああ！」

エンジンノズル回転させながら姿勢制御を行う。
なんとか地面に激突せずにすんだ。

「ふう……なんとかなったな。簪、お前は怪我はないか？」

「う、うん……ありがとう」

「管制室、聞こえるか？今からピットに戻る」

『了解でございますわ』

『かんちゃん、あるくん、怪我はない？』

「ああ」

「……大丈夫」

管制室の2人と軽く会話をし、アルトは簪を抱き抱えたままピットに戻った。

簪の頬が夕日のように茜色に染まっていたことにアルトが気づくことはなかった。

「システムエラー？」

ピットに戻り、アルトと簪はISを解除してフローラからの説明を聞いていた。

「はいでございますわ。初の実戦が過激すぎたということですね。

火器管制システムの方も複雑ということもありますし。」

「……わかりました。調整……し直します」

しょんぼりとした様子で聞いていた簪が口を開いた。

自分のミスだと思っているのだろう。

「いえ。私の方で治しますわ。ほんの30分位あれば終わるでしょう。更識様、お手伝い頂けますか？」

「は、はい」

笑顔が少し戻ったようだ。ISが深刻なダメージを負っている訳ではないと分かり安心してゐる。そんな笑顔だった。

「じゃあ、オレは帰るな？」

「はいでございますわ」

「わたしはかんちゃんにつきあーう。またね。あるるん」

「おう」

振り返りピットの出口に向かったアルト。

本音のあの呼び方はどうにかならないものかと考えながら歩いてゐると、急に腕を引っ張られた。

引っ張られた腕の方を見ると簪がいた。

彼女は照れ臭そうに下を向いている。

そして簪は何かを決意したかの様にアルトに言葉を発した。

「……あ、あの！ほ、本当にありがとう……」

「ああ。気にするなよ？それにああいうのには慣れているんだ」

過去にアルトはシェリルやランカが空から落ちていくのを助けたことがあった。

それゆえ、落ち着いて対処することが出来たのだ。

「……？」

「いや、何でもない。また学園でな？」

アルトの過去を知らない簪は不思議そうな顔をしていたが、話すこともないので適当にごまかした。

「……その……かつこよかった」

「……ん？何か言ったか？」

「うんうん。何でもない……」

小さな声だったのでアルトには聞こえなかった。

だが、簪はそれでいいと考えていた。いきなり何をいいだすんだと思われるのも嫌だったからだ。

「それじゃあな」

「……うん」

倉持技研のシャワールームで簪は熱い雨を浴びていた。

「……早乙女アルト」

自分を救ってくれたヒーローの名を呟く。

あの綺麗な顔立ち、しぐさも素敵なアニメの主人公の様な少年。

アルトの事を考えると自然と胸が熱くなる。

危機を救ってもらったヒロインの気持ちはこういうものなのだろうか。

そこまで考えて、簪の頭は急激に冷えていった。

「姉さん……」

心を冷やしたのは姉である楯無の存在だった。

憧れであり、優しい姉であり、優秀な人であり、魅力的な人であり完全無欠の姉。

その存在はアルトの想像通りであった。

ほんの少し前までは。

今の簪は勝ちたいとすら思うようになってきた。無論、戦闘技術等ではなく、姉に対する自分の心に。

「姉さんは姉さん……私は私」

そう思える様になったのはアルトの存在が大きな柱になっているからだ。

最初はアルトと一夏のせいで機体の完成が遅れたことに怒りをあらわにしていた。

けれどアルトが自分の技術が無償で提供してくれたことが簪の心に響いていた。

だからこそ、整備科の人達にも協力して貰うように自分から頼んだ。

意固地になって姉と同じくISを1人で完成させようとしていた自分が愚かに思えた。

そして今日、一緒にいてさらにその気持ちが強くなった。

姉には姉の、アルトにはアルトの、そして簪には簪の「道」がある。全く同じ人なんていない。

「……………私は……………負けない」

簪の思いは勇気と呼ぶに相応しい思いだった。

第19話 牡牛座（アリエス）はヒーローの夢をみるか（後書き）

原作とは微妙に簪の性格が変わっています。原作好きな方には申し訳ありません。

色々と長ったらしい説明が入っていますがこれから必要になるものもある……かもです！

コードネームに関しましてはとあるマクロス関連の書籍から引用しています。連載当初からどうしても使いたかったものなのでご容赦ください。

戦闘もそっけないです。

質問・感想・指摘等全て受け付けます。気軽に申し付けください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1410w/>

IS 《インフィニット・ストラトス》 FRONTIER VALKYRIES

2011年10月20日04時09分発行